Epic_of_Remnant another 完全臨界特区 高天ヶ原（Fate／Grand Order）

ＲＵＭ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時系列は「Ｅｐｉｃ＿ｏｆ＿Ｒｅｍｎａｎｔ」の終わりごろ。

藤丸立夏はひと時の平和を過ごしていた。しかしある時、令呪が痛みだし気を失う。目覚めるとそこは四方を巨大な城壁で囲まれた東京のスクランブル交差点だった。

兵士に襲われ、重傷を負った藤丸の前に現れたのは「礼服に身を包んだアサシン」だった。

――これは在りし日を救い、在りし日を捨てる物語。

「常夜の東京」「烈火の武士」「最強の者」「国立国会図書館」「傀儡の親衛隊」「誇り高き愚行」「継承する希望」「三画の令呪」「無敵の剣」「終わりの終わり」

※注意

本作はオリジナルサーヴァントおよび一部独自の解釈が存在します。その点をご了承ください。

あと筆者は完全素人です。

目次

fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第一章 …… 1
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第二章 …… 10
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第三章 …… 25
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第四章 …… 33
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第五章 …… 40
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第六章 …… 47
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第七章 …… 57
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第八章 …… 100
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第九章 …… 112
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
第十章 …… 119
fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原
最終章 …… 127

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第一章

亜種特異点「ＡＮＯＴＨＥＲ」
【完全臨界特区　高天原】

万年雪を湛える高山の地下に存在するフィニス・カルデア。魔術師アニムスフィア家が管理するこの機関は「天文台」と一般的には説明されるが、実際は星以上のものを観測している。それは、人類の歴史「人理」だ。歴史を観測し、人類史の継続を続けさせるために、この「天文台」はある。幾分か前、この機関はサーヴァントと呼ばれる使い魔と時に協力し、時に敵対して、人類のすべてを救い、世界の歴史を守った。尊い者を対価に。

「マスター、私は愚か者ですか？」

マスター藤丸立香が就寝した真っ暗のマイルームにて、一人のサーヴァントがベッドの上に座っていた。眠るマスターの髪を分けて、彼は頬を緩めた。

よく眠っている。世界を救ったマスターなのだから、眠るときくらいは安らかでないとならない。彼はそれが気がかりだった。過酷な特異点探索、絶望なまでの恐怖を乗り越え、それでも前に踏み出した偉大なるお人なのだから、心身は強い方だと思うが、自分からすれば年端もいかぬ子どもだ。だからと言って彼を「制御」しようとは思わない。

この人との出会いは偶々だ。偶然の交差と形容できるだろう。マスターが偶々召喚サークルを使っていたら不意に何も意図なく私は召喚された。

あの時のポカンとした顔は忘れられない。

「こんにちは……　サーヴァントですか？」

印象は良かった。少し抜けていると思ったが、それがマスターの魅力だ。誰にでも表裏なく接し、誰でも遺恨はあれど平等にしようとす

る。その心に好意を持ったのは言うまでもない。マスターほどの求心力さえあれば、世界征服も夢ではない。
「ふふふ、やはり私の主はこの人だけだ……」
――――ん？
後ろの気配に気づいた。今まで消していた、というよりも気付かれるために気配を露わにした、という方が正しい。自分も警戒を最大限に高めていた。マスターのマイルームは一種の特異点に近い。不特定多数のサーヴァントが出入りし、ここに居座っている。無論、マスターのプライベートな時間は一人にするのが常識だが、それをないがしろにする輩も知る。
「さて、どうしたものか……」
少し考え、振り返った。
「なんだ、清姫。何か用か？」
「旦那様に何をしていらしたの？」
「何も、ただ顔が見たかっただけだ」
「ウソつき」
「本心とはまた違うだけで、ウソとは限らん。私はこれでもすべて本当のことを言っている。それよりも、私の言葉を嘘と断じるのは構わんが、お前はここで騒ぎ（戦争）をするつもりか？　マスターの就寝を邪魔するのは嫁として失格とは思わないのか？」
「私は旦那様の正妻です、ならばここは私のテリトリー。出ていくのはあなたではなくて？」
「――――」
「……」
殺気が交差する。清姫は私を葬る気だ。迎え撃つ私もそのつもりだが、いかにせんここは場が悪い。だが奴は「狂戦士」のクラス。理性がぶっ飛ぶのは避けたい。彼女は年端もいかぬ子どもだ。マスターよりも年下の英霊だが、「狂化ＥＸ」スキル持ちだ。私と本気で戦うことになったら、どちらも消滅必至だ。
「分かった。私の負けだ。ここは下らせてもらう」
「イイですよ。さようなら」

「マスター、お休み」
私はその場を去った。
――――――私は思う。このマスターが、一番だ。優秀なマスターはいくらでもいるがここまで好意的に接してくれる人いないだろう。例外はある。だが例外がないだろうと思うほどに、マスターは私のマスターに相応しいのだ。
「寝ようか、明日も早い」

「おはよう、マスター」
赤い外套のエプロンのアーチャーが食堂で声をかけた。カルデアの厨房では、料理ができるサーヴァントたちが毎日料理を作ってくれる。古今東西さらに時代も異なる異種の料理の合作などもあり、毎日ネタに事欠かない。
「今日はどんな朝食がいいか？」
「おすすめは、私の自家製マスタードで作ったサンドイッチだよ」
厨房の奥で中華鍋を揺らすブーディカが言った。
「おや、ご主人。本日はこのタマモキャットが練りに練りまくったうどんも用意してあるぞ。もちろん味は保障するぞ。」
「じゃあ、両方貰おうかな。全部食べたいから量は半々にしてほしい」
「あいよ」
「了解、キャット」
「あいあいさー！」
注文が終わると、見慣れた顔が現れた。
「おはようございます、先輩」
「おはようマシュ、今日もメガネにあってるね」
「……ッ！　あ、ありがとうございます、先輩」
「まったく、朝からイチャイチャしてるな。お二人さん……」
「クーフーリン、おはよう」
「おはようございます、クーフーリンさん」
「おはよう嬢ちゃん」
声をかけてきたのはランサーのクーフーリンだ。カルデアには、

「狂王　クーフーリン《オルタ》」「キャスターのクーフーリン」「ランサーのクーフーリン」がいる。クーフーリン統一でも本人たちが聞き分けてくれるので今のところは何とかなっている。もし、これ以上クラス別のクーフーリンが増えたら、自分たちも聞き分けに苦労するだろうな、と最近危惧している。
「おや、アーチャー。今日の勧めは何かな？」
「ふ、何を言ってるクーフーリン。今日の勧めは日替わり朝食だ。そこのメニューが目に入らないのか？」
「マスターと違って俺の扱いはいつもこうかよ」
「当然だ。マスターには毎日苦労を掛けている。こちらとしても、使い魔としての最低限の義務はこなさなければならない。それがたとえ、料理の一品だったとしてもだ」
「ほう、言うじゃねーか？」
　二人はいつもこんな感じだ。犬猿の仲のようだが、どうも互いに憎んでいる節はない。互いに皮肉を込めて話しているからわかりにくいが、雰囲気は親友のそれだ。
「ご主人。朝食ができたぞ」
「ありがとう、キャット」
「キャットさん、私の朝食は先輩と同じでいいですか？」
「了解したぞ。このキャットに任せておき」
「じゃあ、マシュ。俺は先に席を確保しておくよ」
「はい、わかりました」
「まったく、今日も騒がしい／楽しくなりそうだ」
　立香は席を見繕った。何気にカルデアには規格外に巨漢なサーヴァントたちが多い。マシュと一緒に食べられるだけのスペースがあればいいといいが……
　――ドクンッ！
「……ッ！」
　ガシャンと立香はトレーを落とし、その場に座り込んだ。この音にサーヴァントたちが一斉にマスターに顔を向けた。無論、サンドイッチもうどんも床にぶちまけてしまった。

「せん、ぱい？」
異変に最初に気付いたのはマシュだった。それに追従するようにマスターの異変にサーヴァントたちは総毛立った。
「熱い／痛い」
令呪が赤黒く染まる。血管が破れ、毛細血管が爆発する。神経がバーナーであぶられているかのような熱さと痛みに耐えながら藤丸立香は必死に歯を食いしばった。
――――手の甲が痛い。腕が焼ける。このままでは血液が沸騰してしまいそうだ。
「先輩！　先輩！」
「大丈夫か、マスター？」
「私が非常事態警報鳴らすから、だれか早く医療班を呼んで……」
「クーフーリン、お前の速さならすぐに行けるはずだ」
「おう、任せろ」
「先輩、せんぱい！」
痛みが許容量を超え、意識が遠のいていく。意識がどこか深くに引っ張られるようだ。
「マ、シュ……大丈夫、お、れは……」
「せんぱい、せんぱい」
涙ぐんだ後輩の顔が掠れる。
「だい、じょう……ぶ……だ、か……ら」
マスターはここで事切れた。

「先輩は、先輩は、大丈夫なんですか？　ダヴィンチちゃん！」
マシュは声を荒げた。医療班とナイチンゲール女史にマスターを回収されてから十時間近くたっているが、一行に事態が終わることはなく、マスターも医療班も無菌室で缶詰だ。マルタ、天草四郎、ジャンヌダルクなどの聖人、アイリスフェール、ジェロニモ、メディアを含めた魔術関連のエキスパートが続々と加わっているが、終わる気配すらない。時々交代で出てきた医療班の方に詰め寄っても「何ともいえない」を繰り返すばかりで何も情報が得られない。

そのさなか額に汗をかき、疲れ果てた顔でダヴィンチちゃんが現れた。
「マシュ……　彼の様態は、はっきり言って芳しくない」
「……ッ！」
「ベッドが聖遺物になるレベルで処置を施している。まずは現代医療からアプローチしてみたが効果がなく、魔術的アプローチに切り替え、聖人の祈りから、交霊術、古今東西全ての超自然的現象を試してみたけど、効果はなかった」
「そんな、じゃあ、先輩は……一生目覚めないんですか！」
「そこまで危惧はしてない。この状況は前みたいに特異点に意識だけ飛ばされた状況に似ている。どこかで似通った存在に憑依する形で存在を維持しているかもしれない」
「確証はないのに、楽観的過ぎます」
「マシュ、君は焦りすぎている。少し冷静に……」
「冷静になれません。先輩が……目の前で、あんなに苦しそうにして……」
　マシュは自分の不甲斐なさを悔いている。自分に何かできなかったのか？　異変にもっと早く気づけたのか？　何よりこの状況で何もできない自分が一番不甲斐ない。
「いいかい、マシュ。自分だけで全てできるわけじゃない。人には得手不得手がある。不得手なところは他人に任せて、君は得手なところだけをすればいい。そうやってここはいつもやってきたんだ。君は君に出来ることさえしっかりとすれば、自ずと結果は出てくる」
「は、はい……」
「まずは特異点を観測することから始めよう。残りの分野はサーヴァントや局員に任せて、マシュはその一つに心血を注ぐんだ」
「わかりました。行ってきます」
　マシュは廊下を全速力で駆けて行った。ダヴィンチちゃんは大きく息を吐いて、後方に隠れた気配に声をかけた。
「探偵さん、今回は推理してくれないのか？」
「情報が少なすぎる。推論に推論を重ねるのは性に合わない」

「それはどうかネ？」
　無菌室のドアが開き、ひげを蓄えた英国紳士が現れた。
「……モリアーティ。どうしてここに？」
「私が呼んだ。彼はいろいろとユニークな発想をしてくれる。それにヴィランの視点から逆説的に考えられると思ったわけだ」
「なぜ、私ではないんだ？」
「それは君が危ない人だからだよ、ホームズ君？」
「それを君が言うのか、モリアーティ？」
「ホームズ、君は好奇心が強すぎる。それに今回は魔神柱の仕業の可能性もある。協力者としてはバアルと行動を共にしていた頃の自分に何かしらの参考になる点がないかと思っただけサ。それに、君は解き明かすのが仕事だ。そこに至るための情報がない限りは何もできないそれが探偵だ、そうじゃないかネ？」
「だが推論はできるぞ。例えナノレベルの情報でも、そこから犯人を見つけるのが真の探偵だ」
「では、ヴィランとしての見解を含めて答え合わせと行こうじゃないか？」
　モリアーティは頬を緩めて微笑した。この男たちが何を考えているのか、ダヴィンチちゃんにはわからなかった。しかし、この二人が互いに協力するときというのは、これ以上頼もしいことはない。大惨事が起きない限りは……
「では、まずはマスターの容態から……」
「身体すべて正常。しかし令呪は黒く染まっている。契約としての機能は保ったままに、その機能の半分以上が消失している。加えて形も変化した。若干の文様変化、しかし画が増えたわけではない」
「意識レベルは？」
「すべて正常。肉体的ダメージばなく。魔術的介入もない。それに属さない、神霊的な現象である可能性は完全にゼロだ」
「つまり、それ以上からの介入というわけだ」
「……これで分かることはあるかい、探偵さん？」
「――――ほぼ君と同じだ。やはり思いつくところは同じか？」

「だがこれは推論だ。これが本当だというのなら、マスターの令呪の機能のほとんどが失われた理由も説明がつく。ダヴィンチ女史、令呪はどの部分なら機能している？」
「うん。どこまでかはさっぱりだが、零基復元、宝具開放といった機能は消失、魔力の中継点としての機能は残っているし、契約の機能も残っている。無論、現界の依代の機能もある。だが、それもかなり弱くなってしまっている。これではまるで……」
「契約者が夜逃げしたようだ、とかネ？」
　モリアーティの言葉にダヴィンチちゃんは核心を得たようだった。
「私から言わせてみればこの表現が一番合っていると思うネ。契約書も家賃もすべて整っているのに関わらず、住人だけが突然消滅した。このような状況は普通はあり得ないだが……外的要因さえあれば可能だ。住人を消えさせるほどの理由。例えば、借金取りとネ！」
「モリアーティ。君は少しは自重するべきだ。そうである理由は確証がない限りはどうともいえない」
「すまないねホームズ。ヴィランは推測で物を語り、それを証明したくなる生き物なのサ。君のような真実のみを追い求める探究者とは違ってね？」
「とにかく。ダヴィンチ女史、これは一刻を争う。マスターの意識が取り戻されなければ、マスターの肉体はこのまま衰え、死んでしまう。その前に、この事態を収拾するべきだ」
「ならば、私はマシュと共に立香の意識がどこにあるのかを探ろう。二人には、引き続きマスターの意識を取り戻す方法を……」
「それは無理だ。ダヴィンチ女史、君も分かっているはずだ」
　ダヴィンチちゃんは慟哭した。ホームズとモリアーティは既に解に至っている。そして自分も、既に解を知っている。それでも理解できない。だが、これが答えだというのなら飲み揉まざるを得ない。
「ああ、わかっている……」
　監獄塔の時は魔神からの介入もあったが、意識は判然に分離してはいなかった。下総国の場合は、時間こそかかったが意識を取る戻すことができた。だがこれとは全く違う症例……　令呪の変質、機能停止

……　このようなことはなかった。つまりまったく別の原因。この事件は魔神柱は関係していない。
「その様子ならば、君も理解しているようだ」
「だが本当に、あり得るのか？」
　ダヴィンチちゃんは確認した。
「当然だ。そうでなければこのような現象の理由がつかない」
「ならまず、その場合の対処法について探るとしよう。彼の意識がどこに飛んだのか？　どこにいるのか？　何をしているのか？　そこを確かめるとしよう」

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第二章

「う、ううん……」

目が覚めた。地面に横たわり、天を向いている。目覚めた瞬間に天頂の星とそれに届くであろう高さのビルが視界に入った。

「ここは、東京？」

スクランブル交差点の真ん中で倒れていた。電光掲示板も街灯も車も人気もない気配もない、何もない。どういうことだ？

「東京だよな？」

その疑問は、周囲を見ればすぐにわかった。あらゆるところで日本語表記が見られ、標識にはしっかり日本語で「東京」の文字がある。だとしてもこれは不自然すぎる、静かすぎる。犬も猫も人も鳥の存在が感じられない。完璧な無の世界だ。普通こんなことはない。ここは東京のスクランブルだぞ、世界でも有数の交通量を誇る場所だというのに……

「とにかく、歩いて探索しよう」

――一時間後

立香はビルの屋上にいた。

無人の都会を迷わない程度に探索をしてみたが、自分の知っている東京都は若干赴きが変わっている。高所に登って俯瞰して見ても、東京タワーもスカイツリーらしい建物も確認できない。加えて最も気になったのは――周囲を囲む城壁だ。

悪性隔絶魔境「新宿」の時と酷似した数百メートル近い壁が東京の外周を囲っている。加えて、本来の東京にはない建物もいくつか見受けられた。

――バレルだ。それも数基が城壁の接点に立てられている。

新宿で衛星を装填するために作られた惑星破壊の装置。あの時は衛星を破壊して終わらせたが、まさかあのアラフィフ紳士がまたやらかしたのか？　だったら今度もまた何かコンタクトがあってもおか

しくないのに。
「――――――」
　ふと手の甲を見た。赤い令呪の文様がはっきりと残っている。カルデアで意識を失ったときはひどく痛んでいたが、今は痛みが一切ない。それに黒ずんでいる。
（どういうことだ？）
「新茶がやるには大胆だよな、それに……」
　犯罪界のナポレオンは現在、俺のサーヴァントで協力者だ。彼がまた悪さをするとしても、想像できるのは特異点一つを使ったマジックショー程度だろう。
「そのマジックが問題なんだけどな……」
　チェイテピラミッド姫路城のメカエリちゃんの件もある。だがその程度ならギリギリ許容範囲内。
「にしても、ここまで何もないと……」
　特異点の時はマシュがいた。亜種特異点ではカルデアのサーヴァントたちがいた。しかし今はどうだ。誰もいない。自分一人で何もかもやらなければならない。
「考えても始まらない」
　まずは行動あるのみだ。衣食住ができる場所を確保して、カルデアとの通信ができれば御の字だが、生憎通信機器がない。一方的に通信が来れば願ったり叶ったりだ……
「レイシフトは国連で禁止されている。ダヴィンチちゃんの救出部隊が来るかもわからない……」
　絶望的可能性の低さ。あきらめも肝心だというが、これでも往生際の悪さだけは自信がある。
「よし、まずは食料と住居だ」
　電気は通っているようだから、コンビニで食料は確保できる。住居はビジネスホテルがあれば十分だ。だったら、まずは駅を探そう。駅の近くに、コンビニもホテルもある。願わくば自分と同じ境遇の人がいれば……

――いなかった。

コンビニは店員がいない。ビジネスホテルには従業員がいない。総じて客もすれ違う人もいない。本当にもぬけの殻だった。コンビニは商品が整然と並び、道沿いの商店も異常が見られない。ビジネスホテルも確認してみたが、全室の鍵が揃っている。まさに『生物だけがごっそり消えた』ようだ。

しかし分かったこともある。

今日の日付は十月十八日、午後九時過ぎ。レイシフトしたのであればカルデアとの時間の差異も説明できる。人もおらず時間が止まったような世界だが、時間の概念はあるようだ。

「本当に人だけいなくなってる」

コンビニから食べ物を、服屋から上着を、ビジネスホテルの一室を、それぞれ書置きを残して借り受けた。ビジネスホテルに戻り、気分転換にシャワーを浴びて、ベッドで休むことにした。カルデアとの連絡は依然なく、しばらく待つことになりそうだ。

「令呪……」

赤い刺青の紋章。サーヴァントとの契約が残っているのなら、サーヴァントとの繋がりは残っているということだ。それならばいつかカルデアと通信できるはずだ。希望的観測に過ぎないがダヴィンチちゃんもサーヴァントもカルデア職員も優秀で信頼できる。マシュも全幅の信頼を寄せられる理想の後輩だ。彼女たちなら必ず、助けてくれる。

「だったら……」

こうしていられない、自分もできる限りの情報を集めないと……

食べ物を口に放り込むと、もう一度付近の探索に出ることにした。もしかしたら何か見つかるかもしれない。

ビルの切れ目の大通り。コンビニ、飲食チェーン店、デパート、証券会社、不動産、保険会社。左右にぎっしりと詰まった店の数々。店内を可能な限り確すると、書きかけの書類、口の開いた宅配便、電源が入ったままのパソコン。どうやら人のいた気配がある。証券会社

の個人用のパソコンをいじって最終更新時間を見てみたが……少なくとも数日前のようだ。
路肩に寄せられた宅急便のトラック、駐車場の民間車両の全て車内を確認してみたが、飲みかけの缶コーヒーやどれも人がいた気配がある。クール便のトラックからは魚や生肉の腐敗臭で鼻が曲がりそうだ。しかし確かめないわけにもいかないので、吐き気がする臭い扉を、意を決して開いてみると……
「……こ、これは……ぐぶッ！」
ヤバイ、吐きそうだ。積みあがった発泡スチロールから腐った臭いが車内に充満している。赤みが所々黄色く変色し、油の分解が進んでいるのか、妙に甘い匂いが鼻につく。
「少なくても数日はここに放っておかれたみたいだな……」
口を押えながら扉を閉めて密閉する。人間が消滅してから少なくとも数日、ここはモヌケノ殻ということは特異点ができて少なくとも数日は経っているわけだ。
訂正。そもそも特異点である保証もない。下総国の際は平行世界だった。一概に決めつけるのは良くない。だが、この区域を囲っている巨大な壁、新宿のバレルのような複数の建物が、脳裏で怪しく焼き付いていた。
「何があった、ここで……」
特異点だろうと異世界だろうと、並行世界だろうとやることは変わらない。だが、自分一人で何もかも解決できたためしがない。隣にはいつも後輩がいて、背中はサーヴァントたちが守ってくれていた。自分は前を向き、自分に出来る最大限のサポートをするだけだった。
「――なにか、他に出来ることはないのか……」
奥歯をかみしめた。平凡な自分の頭をフル回転させて、できることを模索する……
「――よし、決めた」
バレルに行こう。あの施設が重要なところであるのなら、敵であれ味方であれ、サーヴァントがいるはずだ――敵がいるのは御免被りたいが、今はそれしかない。

――閑話休題

「ここか……」

最寄りのバレルの前で見上げる。新宿の特異点では惑星破壊用の銃身だった建物が、この東京には城壁の一部として数基が取り込まれている。入り口は正面に一か所だけ、他の侵入口はなく、窓らしいものも見当たらない。まるで巨大な金属の柱だ。前にこの建物に来たときはエミヤオルタが守っていたが……

「雀蜂百人とかやめてくれよ……」

警備員らしい人影がないのはうれしいが奇襲されないとは限らない。警戒していこう。

「……お邪魔します」

恐る恐る内部に入った。室内は薄暗く、照明も最低限で、棚どころか家具もインテリアもない。円形の柱だけが立ち、白い床が一面に広がり、最奥のエレベーター乗り場が直接見える。まるで支店が入っていないデパートのようだ。

しかし天井の四隅に監視カメラが自分を監視していた。赤ランプがついているということは、最低限起動しているようだ。

「見られているのか？」

しかし、場は物音も風音もなく静まり返っている。藤丸は息を呑んだ。このような状況は経験したことがない――無意識に体全体の筋肉が収縮して身構える。

「――落ち着け……」

深呼吸して心臓の鼓動を抑える。周りが静かすぎると心臓の緊張した鼓動が耳まで届いて余計に強く感じる。呼吸を深くして肩にこもった力を抑え、片手で軽くもんで強張りを緩めて前方を見据える。

「だれもいないよな……」

一切のリアクションがないのは、逆に緊張する。だからと言って、敵が出て来られても困る。味方のサーヴァントなら言うことないが、だったら気付けばすぐに駆けよるだろう。

「いたとしても敵性勢力か……」
監視カメラから自分の姿は見えている。呼びかければ聞こえるか？　やめよう、そんな機能があるとは思えない。このような場合は挙動不審な行動しないことを心がけよう。
「それよりも、上に行こう」
一階突き当りのエレベーター乗り場で、上りボタンを押すと、すでに一階で待機していたようで、一秒も待たずエレベーターの扉が開いた。
「――」
最上階は六十階を行き先に設定する。この階数ともなると高さは超高層ビルなみだ。このような建物が周辺に数基あるとなれば、現代の東京にしてみれば異質だろう。少なからず、この異常な状態に対して影響を与えているとすれば、この建物の存在にも合点がいく。
「なんたってあのバレルだもんな」
最上階へ向かうエレベーターの中で藤丸立香は呟く。新宿の時の記憶がよみがえる。ホームズ、モリアーティ、ジャンヌ、セイバーオルタとの楽しくも厳しい戦いだった。その決戦の地にまた登ることになろうとは思いもよらない。
――ピンポンッ！
最上階六十階に到達した。エレベーターが開いて、まず目に入ったのは――強大な石碑だった。
魔術の方陣が描かれた床の中心に佇み、見ているだけで風が体に吹き付けを感じさせる強い魔力の気配が、モノリスから放たれていた。モノリスを囲む方陣は紫に発光し、モノリス自体も紫のオーラを纏っていた。
「結界か？」
魔術の素人でも経験則で分かる。ゲームでもモノリスは大体仕掛けの中心になる。特にこのようなあからさまに重要そうな施設なら容易に推測できる。
「――どうする……」
モノリスの近くまで寄るか？　見たこともない石の柱に藤丸は興

味を抱くが、理性が動きを躊躇させる。見るからに重要そうな施設に防御設備の一つも配置しないのは、明らかに可笑しい。自分であればセンチネルの一体でも配置する。アサシンエミヤやロビンフッドあたりは、このフロアに来た時点で出入り口を完全封鎖してビルごと爆破解体すると言い出すだろう。

「――何もなければいいが……」

モノリスの接触は無理でも、モノリスを囲む円形の方陣の外からは見ても支障はないはずだ。藤丸は慎重に一歩一歩安全を確かめて足を踏み出す。モノリスまで約五メートルのところまで来た。円形の方陣の外周ギリギリの地点、足先が術式のすぐそこまで来ている。

「メディアが来てくれていれば一番良かったんだけど……」

自分も多少の魔術の手ほどきは受けたことがあるが、実戦的とは言えない。あくまで習い事としての軽い講座だ。魔術というにはほど遠い。

「これでもマスターなんだ……　何か役立ちそうなことはないか？」

身を乗り出し、眉をひそめてモノリスを注視すると、表面を削って彫り込まれていた。

――どこかの記号か、文字のようだ……　すり減って何なのか見分けがつかない。文字であるとするのなら、日本語ではない、英語の筆記体でもない、マニアックなところではウルク語も除外できる。古代エジプトの象形文字も無論除外。

もし完全な記号だとするのなら魔術的意味の略称、公職詠唱用の記号が考えられるが、これも専門外の分野だ。

「うーん……」

もうここで分かることはない。さっさと逃げよう。時間が経つほど危険度が高まる。

藤丸はその場を引き返してエレベーターに乗る。エレベーターに乗る際にも、ここで爆破すれば始末は簡単だろうに……と思いつつ、一階のボタンを押す。

エレベーターは静かに一階へ降りていく。

どうも腑に落ちない。自分を呼び寄せたのが敵とするのなら、今の

今まで接触がないのはあり得ない。仮にここに来たのが偶然だったとして、ここはどこなんだ。先ほどのモノリスは明らかに本来の東京にない人工物。しかも、新宿の時のバレルにあった。
「人工物が自然にできるはずがない……」
何かある。見逃している何かが……
腕を組み、眉を寄せて考える。今わかっていることすべてをまとめて、客観的に思考してみたが、あの探偵のようにはいかない。
「やっぱり、魔術素人が探偵の真似事などできるわけ……」
――ゴドン！
「な、なんだ」
爆発音がした。地面から藤丸のいるエレベーターまで伝わるほどの揺れだった。幸い、揺れれば微弱で姿勢を保てていたが藤丸は迷うことなく、非常停止装置を押したエレベーターは最寄りの階に停止し、ドアが開いた。
「十六階……　一階までは遠いが、しょうがない」
エレベーター脇の非常階段を急いで下る。爆発の原因がどうであれ、火のないところに煙は出ない。
「――はー、はー、はー、ふう、やっと着いた……」
足を止めずに下り続け、一階まで下ると息を歩きながら軽く整える。一階に変わった様子はなく、爆発が起きたとは思えないほどだ。つまり、ここに影響が起きない地点で爆発が起きたわけだ。
「ハ――、はぁ……　よし、行こう」
藤丸は施設の外に出て付近を見回したが、爆発の影響があった様子はない。もっと遠くで起きたのだろう。藤丸は寝床に決めたビジネスホテルがある方向に走る。何かあったとして今の自分に一番重要なことは安全な場所を確保することだ。
爆発の方向が分からない以上、ビジネスホテルに戻る方が賢明だ。あそこならどこに何があるのかは調査済みだから何かがあってもすぐに逃げられる。
「――――ッ！」
バレルから百メートルほどの十字路の角を曲がった直後、藤丸は急

に足を止めてビルの物陰に姿を隠した。
――人がいた……
数人の全身フル装備の鎧の兵士が徘徊している。藤丸は顔を半分陰から出して様子を伺う。今、見えている兵士は六人、装飾のない簡略化された甲冑なので兵卒（最下級の兵士）だろう。身長は自分と同じくらいか、それ以上。
（さっきまで誰もいなかったのに……）
何もなかったところに、兵士が現れた。であれば、その敵もいる。爆発を起こした原因と爆発を止める敵、二つの勢力がこの周辺にいるとするのなら、俺はどこの勢力に付けばいいのか……
「――ここは危険だ」
敵の近くにいることはサーヴァントのいないマスターにとって命の危機そのものだ。出来れば安全なところまで逃げたい。藤丸は呼吸を押し殺し、体を前に向けたまま静かに後退する。足音一つ、吐息一つが命の取捨を分けえない状況に、バクバクと拍動する心臓の脈が、耳の中で大きく聞こえる。ゆっくり、ゆっくり、姿を悟られないように、身を引いていき……
曲がり角まで後退するとビルの陰に身を隠して心臓を落ち着かせる。敵らしい人影はここからは見えない。まずは一安心。
「ふう……」
肩に入った力が抜け、藤丸はその場に腰掛ける。サーヴァントがいないだけで、安心感がまるで違う。自分独りだけで全てを熟さなければいけない場面はほぼなかった。はぐれても待っているだけでサーヴァントたちが守ってくれた。寂しくてもマシュが温かく微笑んでくれた。
だが焚火のような温かさはない。感じたことのない孤独感と恐怖に手が震え、寒さが体の芯に届く。大丈夫、大丈夫と心で呪文のように唱えながら、藤丸はまた立ち上がった。
――休憩は終わりだ、ここから逃げよう。
敵がいることを考えると、他にも複数の集団がいるかもしれない。最悪の事態でない限り走りは厳禁。見つからないように、某潜入ゲー

ムのように動くことを心得なければ。
「――参考になればいいけど」
藤丸は曲がり角を警戒しながらゆっくり物陰から物陰に移動する。車の影を巧みに利用して動き続ける。
――ヤバイ!
突然、十数メートル先の交差点から兵卒の横隊がこちらに曲がって来た。藤丸は乗用車の陰に身を潜めてゆっくり横隊をみる。横に五人、縦は……兵卒が重なっていて詳しく把握できないが、一番危険なのはこちら側に向か合ってきていることだ。
(これじゃあ、見られる。物陰に隠れても見つかる)
乗用車の長さでは横隊の視界の広さをカバーしきれない。
――こうなったら……
逃げ道はなくなるが、車体の下に隠れてやり過ごすしかない。藤丸は車の下に潜り込んで息を殺す。それでも荒い息が収まらないので両手で口を塞いで鼻だけで呼吸をする。
規則正しい歩幅で同じ動き方で歩く兵士たちが藤丸の隠れる乗用車に迫る。横隊が藤丸のすぐ脇を通過する。
――見つからないでくれ……頼む……
口を押える両手に力がこもる。ここで見つかれば確実に殺される、恐怖で涙が目にあふれ、背筋が凍り付く。頼む、頼む、頼む、と心で連呼して横隊が完全に通り過ぎるまでの一分間ずっと呼吸を殺し続けた。
――行ったか?
横隊が曲がり角に消えるまで隠れ続けて、安全を確保したところで車の下から這い出た。
「ハァ、ハァ、ハァ、危なかった……」
動いてもいないのに息がとぎれとぎれ。藤丸は一旦息を整えてから、また歩き出した。
――閑話休題
藤丸は途中で何度か兵士を隠れてやり過ごしながらビジネスホテルに向かって歩を進めていた。ビルの間の横道を巧み使って兵士を

やり過ごし、屋上から屋上に飛び移るといった芸当までして見せた。それでも兵士たちは巡回範囲を広めているようで、何度も見つかりそうになりながらも、追いかけられることはなかった。

「あともうすこし……」

ビジネスホテルまで四分の一もない地点まで来た。ここまで何もなければいいが――――そう、うまくはいかないよな……

藤丸が横断しようとする道路の先に兵士が迂路ついていた。

毎度のごとく物陰に隠れて動きを探ってみると、彼らは部隊を分割してビルの中をしらみつぶしに探している。あれではビジネスホテルに戻っても見つかるかもしれない。しかし迂回できたとしてもこの周辺は敵兵だらけで、いつ見つかってもおかしくない。彼らが生きている人間ならば声をかければどうにかなるが、全身鎧で槍、刀、剣を握っている時点で、現代の人間か怪しい。もしかすれば、イスカンダルの「王の軍勢」のような使役されるサーヴァントの可能性もある。

要するに今は逃げるか身を潜めるしかない。あの兵士たちを避けて包囲網されていないどこかに逃走するしかない。

――――ビジネスホテルに逃げるのはやめよう。

引き返すことも考えたが兵士がどこにいるかもわからない以上、また同じところに行くのは愚行だ。もっと兵士がいない、隠れる場所にでも行かない限りはどうしようもない。

――――ここではないもっと別のところに行かないと……

藤丸は車の影を移りながら、兵士がいないと思われる方向に進む。通りの先にいる敵に見つかれば一巻の終わりだ。

藤丸の拍動が高鳴り、息をひそめても息遣いが抑えられない、深呼吸しても拍動が止まらない。あらゆる音を抑えても、自分と兵卒以外誰もいない空間ではほんの少しの音も大きく聞こえ、致命的になる。それが藤丸の恐怖を煽る。自分が何もできないのが、怖い。

走れない、走ったら見つかるから。

呼吸を潜めろ、呼吸音が止まらない。

足音を隠せ、影を移るときは早足になる。

移動する行為すべてが藤丸のプレッシャーを与え、個々から動かな

い方がいいと思わせる。だが、それでもは意味がない。ここに兵士たちがいる以上、必ず見つかってしまう。動かないのは、愚行過ぎる。今まで遭遇した兵士の数を思い浮かべても、それは自明だった。

車の陰から街路樹へ、街路樹の陰から車へ、車の陰から建物の柱まで……

一つ一つ細心の注意を払って、先へ先へ進む。

そして歩くこと十数分、藤丸は最初に自分が倒れていたスクランブル交差点の入り口まで戻った。

「ここまで来たのか……」

兵士たちを避けて避けて避け続けて、よもや最初の地点に来るとは思いもよらなかった。スクランブル交差点はその広さ故にかなり開けた作りになるのが常だが、此処には兵士たちは見当たらない。まだ来ていないだけかもしれないが、ひとまず誰も見当たらないのは幸運だ。

「……ふう」

藤丸は大きく息を吐いた。バクバクした心臓を落ち着かせ、一旦膝に手を付く。座ってもいいが、このような場面ではすぐ動けないといけない。何より、一旦座ってしまったら立ち上がれなくなるかもしれない恐怖があった。

「――早く休めるところに行かないと……」

息も整え、心臓も落ち着いた。

「――よし、行こう」

行く当てはないが、来た方向に歩いて行けば兵士たちから逃げられるはずだ。

藤丸がスクランブル交差点を避けて、歩き出した直後！

――ブスッ！

突然右足に力が入らなくなった。「なんだ？」と思った瞬間、右足のモモから熱い不快感と激痛が体を駆け巡った。

「あああああああああああ！」

脚に矢が刺さっている。太い矢尻が右足を貫き、矢の半分が真っ赤に染まっていた。貫いた矢からぽたぽたと血が伝わって地面を紅く

する。赤く矢じりで裂けた血肉がズボンの中でふくらみを作り、ズボンが赤く染まる。

藤丸は立っていられずその場に膝をついた。周囲を見回すと、左から兵士の一団がこちらに走ってきている。藤丸は歯を食いしばって使えない右足を庇って立ち上がり、全体重を左足で支えながら右足を引きづって逃げ続ける。走ろうとしても足が動かない。歩くよりも遅く、敵との間は狭まるばかり。

兵卒たちは藤丸が動けると分かるなり、また弓を射る。矢が上空から何本も降ってくる。大半は僅差で外れていくが……

そのうち一本が、藤丸の背中を貫き、下腹部から血染めの矢じりがギラギラとした切先を覗かせていた。

「ぐう、ぐう、ぐあああああ……」

体から一気に血の気が抜ける。体を貫いた不快感と痛みのあまり膝をつく。矢じりからドロっとした赤黒い血と、ザクロのような鮮血が入り混じった鉄臭さが鼻を衝く。体が酸素を欲して息が事前と荒く、動こうとしても血が抜けすぎて力が出ない。足を動かしても蹴る力が足りず、ズリズリ地面を靴が滑るだけで一向に動けない。

右手を矢じりが貫いた下腹部に当て、赤黒くなった左手、地面を滑る左足で何とかその場から動こうとする。四つん這いならぬ、二つん這いで少しづつ動くが、それよりも早く血が抜ける。矢先から音を立てて血が滴るたびに息が荒くなり、動く力が消えていく。

後ろから敵の足音が高くなる。

藤丸は逃げる。足を、手を、体を、全てを使ってもあきらめずにがき続けるが、血だまりが広がるだけでほとんど動けずに、ついに力尽きて自分の作った血だまりに倒れた。粘性の冷たい血液が頬に触れる。鼻腔が鉄臭さで充満し、手の色が青白く、死体のように色味が抜ける。

――――敵の走る音が止まった。

ガチャガチャと鎧の擦れる音が耳元で聞こえる。

だがそれも遠くなる。意識が深くまで埋没するようで、体が寒く感じ、眠気が藤丸を死の淵に沈む。視界が霞み、さっきまで見えていた

ビルにドット絵のモザイクがかかる。
兵士たちは藤丸の周りを囲む。
藤丸は力を振り絞って、手を伸ばす。どこにも触れることはなく、ただ逃げるために手を伸ばし続ける。
あきらめたくない、諦めたらそこで死ぬ。
――意識が遠くなる。
考えろ、逃げる方法を探せ。
――息が途切れ途切れになる。
考えるのをやめてしまったら、もう自分という意識を保てない。
――血だまりが広がる。
カルデアのサーヴァントの顔がよぎる。
――体温が地面に奪われ、冷たくなる。
愛すべき後輩が『先輩』と自分を呼ぶ。
意識をかき集めて必死に抗う。抗う理由なんてとっくに考えられなくなった。それでもまだ、まだだ。諦められない。誰かのぼやけた笑顔が、掠れた誰かの呼び声が、自分の力をかき集めていく。誰かは分からなくなっても、『彼女』だけは悲しませたくないと、体全体が叫ぶ。魂に力が集まり、自分の中にあるすべてが抜け落ちた部分を修復するがごとく、死にあらがう。
――今持てる最後の力を振り絞り、右手に力を籠める。
何ができるかわからない。
右手に、「何か」があったかもわからない。
目を向けても、全力で見開いても、視界全てが真っ暗。
「あきら、なるも、んか！」
右手に満身の力を籠める。最後の力すべてを集めて「彼」は心で体で、魂すべてを込めて助けを求められる「存在」に向かって全力で、叫んだ。――だれでもいい、悪魔でもいい。「あそこ」に帰るために……
「――来い、サーヴァント！」
一瞬だけ、右手が光った。
そして、声が聞こえた。それは救世の声か、それとも神の声か、藤

丸に確かめる時はなかった。
『――――諦めの悪さは、一人前だな。もう大丈夫。安心しろ、私が助けてやる』
目の前に何かが現れた。人だ。人間だ。何かわからない、何かが現れた。
視界が薄暗くて見えない。だが、それでも現れた何かが誰かと戦っている音がわずかに聞こえた。
――――ああ、本当に来てくれたのか……　ありがとう……
その瞬間、抗う力もなくなり、正真正銘すべてを使い果たした男の意識は闇の中に埋没した。

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第三章

意識が深く落ちていく。深く、深く際限なく、暗闇の洞穴に飲み込まれるように墜落する。

見上げても光はない、下を見ても黒々した闇だけ。

――ああ……　俺は死んだんだ。

男は自然と腹部を貫いた一矢が致命傷になったと受け入れた。記憶の最後に残る断片を思い出してそれをすべて飲み込んだ。自分の後輩らしき少女の顔も、自分を補佐してくれる万能の天才も、陰ながら大いに協力してくれた人々、自分を日々助けてくれる誰か。それら全員の顔はもうわからない、雰囲気だけで個人を認識している。

――ごめんな……

男は言った、胸からあふれる悔しさと慟哭を涙に変えて。

だがもう遅かった。自分は既に亡き者……

この墜落は黄泉への入り口か、三途へのいざないか、地獄の淵への招待か。

――どうして俺は……

悔しい。これは認められない。もう一度会いたい。

何もわからないはずなのに、自分は忘れてしまったというのに、なぜか慟哭が止まらない。

『お前は、まだ死んでいない。あきらめるな、私がいる』

どこかで声がした。凛とした女性の声だった。

『死にたくないだろ、だったら願え。目覚めたいと、願え。障害あるのなら私が跳ね除けよう、救い欲しいのなら、私がなろう』

――誰だ？　誰なんだ？

『戻って来い、戻ってくるんだ。そこはお前の居場所ではない』

――あ、ああ。

豆粒のようなか細い光が見えた。手でつかめば握りつぶせるくらいの光だ。

――俺は、あきらめたくない。
男は手を伸ばした。落下する中でも、大きく長く両手を伸ばした。

「ぶ、ふッ！　ごほっ！」
藤丸は目を覚ました。のどに詰まった血塊を吐き出してベッドから飛び起きた。まず目に入ったのは自分が裸体で寝ていて、その体が包帯でぐるぐる巻きにされていたことだ。足にも同じように包帯が巻かれて、腹部ほどではないが若干血色に染まっていた。
「どういうことだ……」
現状に戸惑っていると寝起きで鈍っていた感覚が戻り、触覚、聴覚、視覚、味覚が明瞭になり、下腹部と右足に走る激痛に悶えた。
「あ、あああ……」
痛みをこらえながら周囲を見回してみると、此処は初めに寝床に決めたビジネスホテルだった。ベッドの下に飲料用天然水のボトルが数本と、散乱した血染めの包帯がいくつか、加えて使い古しの注射針に輸血用血液パックなんかもあった。
「治して、くれたのか？」
誰だろうか？　いやそれ以前に自分はさっきまで……
「目覚めたのか、マスター？」
部屋のドアが開いたと思ったら、物陰から一人の女性が段ボール箱を抱えて現れた。
凛とした目じりと黒目、均整の取れた顔、背中の中ごろまで届く黒髪はリボンでポニーテールにまとめられ、服は上下漆黒のスーツ、ネクタイも真っ黒。
一度も見たことのない女性だった、それも「格好いい」という言葉がふさわしい凛とした若人（わこうど）。
彼女が荷物を置いて中身を整理する間、藤丸はサーヴァントに問う。
「あなたはサーヴァント、なのか？」
「ああ。私はそのつもりだが？」
「俺はマスターなのか？」

「馬鹿げたこと言う、私を呼んだのはお前であろう？」
「――あ、もしかして……」
あの時、死に必死にあがいて叫んだ時に、偶然召喚されたのか？
そういえば記憶が飛ぶ前に、誰かに声をかけられた気がした。誰かがやってきたと思ったが、まさかサーヴァントを自力で召喚したのか？
「思い出したか？　お前が呼んだサーヴァントの事を」
「記憶が飛ぶ最後に、すこしだけ……　誰かの声が聞こえて……　それが……」
「私というわけだ。カルデアのマスター、藤丸立夏」
「――ッ！」
藤丸は身構えた。初めて会ったサーヴァントが自分の事を知っているのは大抵悪い兆候だと藤丸は経験則から知っている。しかし、右足と下腹部に穴が開いている状態でサーヴァントと相対するのは自殺行為だとも感じていた。サーヴァントは藤丸のその心理を読み取ってか、軽く鼻で笑った。
「私はこれでもサーヴァントだ。マスターの事は基礎知識として頭に入っている。もちろん、令呪のパスもあるから、お前の記憶を夢として見たこともある」
「――そうか……」
藤丸は構えを解いた。
「それにだ。お前に危害を加えるのが目的だったら、治療なんかせずに延命処置だけでいい。お前のようなバカ素人は魔術にいともたやすくかかってしまうからな」
「――むむむ……」
確かに自分は素人だ。だが、バカにされるいわれはない。
「ムスッとするな。これでも褒めているんだ。素人がよくもここまで冒険をしていられたと、ね。――だったら訂正すべきだな、お前は素人であってもバカ素人ではない。許せ」
サーヴァントはその場で振り返って軽く会釈した。
その流れのまま、彼女は思い出したように、

「そういえば、自己紹介がまだだったな……」
サーヴァントは藤丸に自分の全体像を見せて、自信ありげに申し上げた。
「――我が忌み名は、アサシン。真名は教えられない。もし他のアサシンとの差別化をしたければ……そうだな……ここは単純にスーツのアサシンとでも呼んでくれ」

スーツのアサシンことアサシンは、藤丸に現在の置かれた立場について語ってくれた。
「まず、お前は一回死んでいる。心肺停止という奴だ」
開口一番でこれだから、藤丸から血の気がすっかり抜けて顔が紫になった。今の自分が生きていることが不思議でたまらないと、アサシンに言うと「私もまったく同じことを思っていた」と半笑いで言われた。
「まあ、すぐに病院を見つけて人工呼吸器とか輸血用血液にＡＥＤというヤツも使って、お前の蘇生と延命にかなりの時間を費やした。ざっと五日くらいか？」
「五日間も死んでいたのか？」
「半死半生と言えば聞こえはいいが、どちらかと言えば九死一生だ。蘇生して心肺が動いても四日近くは自律呼吸ができていなかった。それで半日前にやっと自律呼吸ができるようになって、此処に運んだわけだ」
「――俺が、死んでいた……　本当に、死んでいたのか……」
「バカ言え、いくら死んでいようが、今生きているのならそれでいい。マスターは死人より生人に限る。そうは思わないか？」
藤丸は小さく頷いた。衝撃的な話であったが、もう過去だ。アサシンが言いたいのはそういうことだろう。言い方はどうであれ、勇気づけてくれているようだ。
「なあ、アサシン。他に何かこの東京についてわかっていることはないか？」
「わかっていること？」

「例えば、敵の兵士の事とか……」
「あの泥人形の事か？」
「え？　ど、泥人形？」
　あの兵士たち、人形だったのか。
「そうだ。砂と土と泥を固めて作った兵士の形の素体に本物の武具を付けた人形だ。ゴーレム、という人形とも違う。あれは、完璧に兵士として動ける代物だ。ゴーレムのように単純な命令のみが有効な木偶（でく）人形ではない。複雑な命令を遂行しながら統率力にもたけた、軍隊だ」
「サーヴァントの宝具ってことか？」
「わからん。宝具でなくとも、あの程度であれば魔術師でも作れる。頭脳にプログラムを埋め込むだけだ。難義ではなかろう」
「……じゃあ、それを操っているのはサーヴァントなのか？」
「不明だ。こちらはお前の看病に付きっ切りで捜索なんて半日前まで不可能だった」
「――ごめん」
「謝る必要はない。この状況はお前の責任ではないし、お前が原因でもない。真に迫るべきは、この特異点を作り出した張本人と、兵士たちの司令官に他ならない。違うか？」
　鋭い切り口であってもフォローを忘れない所に、彼女の不器用さを感じた。
「ありがとう」
「……」
　数秒の静寂の後に、アサシンは咳払いする。
「他にわかっていることはない。あの人形どもを片端からぶっ潰せば大本が出てくると思われるが、今はお前がこの状態だ。せめて傷が癒えるまでは、発見を避けよう」
「傷が癒えるまでって、言われても……」
　これだけひどい傷となれば一朝一夕で治るわけがない。最低でも一か月はかかるはずだ。
「それじゃあ、遅い……　遅すぎる……」

「だがそれしか方法がないのも事実だ。我慢しろ、とは言わないが少しでも短くしたければ、飯を食え。よく寝ろ、治ると願い続けろ、いいな？」
「――分かった」
アサシンが持ってきたビニール袋一杯のおにぎりを腹いっぱいまで食べ、失った水分（血液）をミネラルウォーターで補給し、傷を撫でまわす痛みに耐えながら古いガーゼと包帯を交換した。
「さあ、寝ろ。身の安全は私が守ろう」
「でも、アサシンも寝なくていいのか？」
「サーヴァントは寝なくとも活動できる。寝た方が魔力の節約になるが、今は気にするな。お前はバカの一つ覚えのように回復に全神経を回していればよい……」
「わかった。お休み、アサシン」

――藤丸が熟睡してから数分後の事だ。アサシンはビジネスホテルにマスターを残し、一人外出した、腰に刀を帯刀して。彼の最も近くにいることが一番だということも分かっている。眼を離した隙に何かが起きるかもしれない可能性も推測できる。だがそれでもマスター守る使命を忘れていない、むしろそうするしかないと思ったから外に出た。マスターの命を保証するには自分で打って出るしかなかった。でないと巻き込まれてしまう。
アサシンをビジネスホテルの向かい側の広い駐車場で、待つ人物がいたからだ。
「待っていたのか？　律儀だな？」
複数のアパレルが入った商業ビルが闊歩する虚空に呼びかける。
「――待ってた？　違うね……　礼儀を守っただけだ、サーヴァント……」
虚空から霊体が舞い降りる。霊体は徐々に肉体の形を得ながら舞い降り、両足をついた。
――サーヴァントだった。
光沢のあるトリコロールの綿織物の着物に金色のラインが入った

白いスーツのようなズボンを履き、膝、脛、前腕、肘に金色の防具を身に着け、頭には特徴的な小さい王冠を付けたサーヴァントだった。戦いに赴くには古今東西の常識からして派手過ぎるその出で立ちに、アサシンはため息交じりに別の意味で感心しながら右手に握った刀に手をかける。
「おい、会ったそばからやり合う気かよ。いくら俺っちが敵でも少しは会話するのが礼儀ってもんだろ？」
「貴様は馬鹿か？　結局は仕合うのだろ、だったら会話しようがしまいが、変わるまい」
　アサシンは帯刀した刀を握り、親指で鍔を押して刃を露出させる。
「焦ることはねぇよ、俺っちとの戦いは逃げねぇから安心しろって。それに今日はマスターが目的ってわけじゃねぇ。今回は威力偵察ってやつだ。本格的にドンパチ大騒ぎするのは、あとの楽しみだ。でも、これだけ待たせたのだからちょっくら味見くらいはしてもいいよな？　というわけで、俺っちは気配をぷんぷん臭わせて待ってたわけだが、それはあたりだったようだな。」
　サーヴァントはアサシンを上から下まで見回す。
「いい体つきをしたお嬢さんだ。それに手練れでもある。身の構えから気配、殺気に至るまで熟練している。これだけの鍛錬は生半可な戦場で得られるもんじゃねえ。どれだけの修羅場をくぐったか知らねえが――ぶっちゃけ、体から成りまですべて俺っちの好みだ。」
「――馬鹿げたことをぐちゃぐちゃというな。耳が腐る。死にたいというのなら遠慮せず、言ってみろ。その饒舌に免じて介錯してやる」
「そうかよ。つまんねえな」
　何も感じていないように見えて、サーヴァントはアサシンに警戒心を抱いた。自分が彼女を「お嬢さん」と言った瞬間に放たれた殺気に血の匂いが混じった。この女剣士は只者じゃない、とサーヴァントに思わせる強い殺意。ここまで来ると、闘気だけで「人間を殺せる」レベル――いや、それよりひどい。
（なんだ、あのサーヴァント。クラスがどうであれ、いろんな奴と殺り

合ってきたが、『剣気で殺せる』奴はいても『剣気が血塗れ』ってどういう要件だ……）
「どうした。饒舌な舌が止まったぞ？　もっと負け犬のように吠えたらどうだ？」
「言ってくれるな……　だが、ここじゃあ万が一にも勢い余ったら、大事なマスターを踏み潰してしまいそうだ。場所を変えよう、此処の近くにスクランブル交差点がある。そこなら、邪魔も入るまい……」
「――嫌だと言ったら？」
「そん時はここで仕合うしかねえな。一応捕捉しておくが、今熟睡しているマスターの身の安全は確約しよう。これは俺っちのプライドを賭けてもいい」
「信じられないな。貴様の言うことには確証がない」
「そうか、んじゃあ。しょうがねえな……　明日、今度は部隊丸ごと連れて来てやる。それならお前もやる気になるだろう……」
「――ッ！　――貴様と一戦交えても結果は変わらないということか？」
「いや、今日俺っちを完膚なきまでに打ちのめせば、明日の襲撃はなくなるし、超豪華特典としてこの特異点の秘密から全貌まで洗いざらい白状するぜ？　これに関してもプライドを賭ける？」
「――そこまで大見栄を切るとは、大した自信だな」
「なんたって、俺っちは最強だ。最強である俺っちはいくら見栄を張ろうが、何を賭けようが関係ない。結局は俺っちの勝利になる。お前っちが勝つことはありえねえ……」
　サーヴァントは自信に満ち溢れた微笑でアサシンを挑発する。
「――（どうしたものか……）」
　一応、利点はある。ただし自分が倒れる可能性も捨てきれない、ハイリスクハイリターンの決断。アサシンは数秒考えた後、刃を露出させた日本刀を納刀しサーヴァントに向けていた殺気を緩めた。
「わかった。その提案に乗ろう……」
　その時、彼から気の抜けたため息が聞こえた気がした。

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第四章

――スクランブル交差点。
夜十二時を回ったころ。
静けさとアスファルトで覆われた異様な空間で、アサシンとサーヴァントは実体化した。
互いの間は約十五メートル弱。
二体のサーヴァントは、その視線で相手を威嚇しながら相手の動きを見つめる。
アサシンは日本刀に手をかけて敵サーヴァントに殺気を向けた。
敵サーヴァントは屈伸、伸脚、前屈と準備運動をしながらアサシンと対峙した。
決闘場となった交差点で二人は静寂が破られる時を待つ。
「獲物は抜かないのか？」
「安心してくれ、いま出してやる」
サーヴァントは右腕を横に伸ばし手を広げると一瞬にして長さ約2メートルの赤い棒が出現し、彼はそれを握りしめて構えを取った。棒の先をアサシンに合わせ、肩幅に足を広げて間合いを図る。
「こいつが俺っちの獲物さ、棍棒っていえばわかるかな？」
「なるほど。一瞬ランサーかと思ったが、当てが外れたようだ。お前は、ライダーだな？」
「へー、これだけで俺っちのクラスがわかるのか……　意外だな？」
「これくらい誰でも雰囲気で分かる。獲物を見ればな。三騎士クラスで棍棒を使うサーバントなんて想像できない。加えて四騎士からそれらしいものを使うクラスとすれば、それはライダーくらいだ。んで、どうだ？　お前も戦車くらい持ってるだろう？　出したらどうなんだ？」
「戦車の方は整備中だ。でも俺っちからすれば、これだけで十分。なんたって最強だからな」

「吠え面賭けるのも今の内だぞ、ライダー」
「よく言う、そういうお前はアサシンか？　セイバーにしては魔力を感じない、ランサーなら獲物は槍、同じ条件でアーチャーとキャスターは除外、バーサーカーは言わずとも除外、ライダーの可能性もあるが、それにしてはお前っちの構えは地上戦に特化しているようだから、騎乗戦もない。とすればアサシンしかない」
「エクストラクラスの可能性もあるのにか？」
「そん時はそん時だが、クラスはどうであれ、俺っちが強いことに一瞬の揺らぎもない」
　ライダーは体の重心を低くして、戦闘態勢を取る。
　アサシンも即座に抜刀して、中段の構えを取った。
　ライダーの獲物は両端に金の装飾のある棍棒。アサシンの獲物は刃の青白く日本刀。
「行くぜ、見せてやるよ。最強の証ってやつをよ！」
　――戦いの啖呵は刹那で切られた。
　瞬刻、ライダーの姿が消えたかと思った瞬間、彼の棍棒の突きがアサシンの顔面まで迫る。アサシンはそれを驚きながらも冷静に頭部を右にずらして、ライダーの初撃を避けて，中段の態勢を維持したまま一旦距離を取った。
「へー、これを躱すか？　俺っち渾身の初撃をよく見切った。大したもんだ」
（コイツ、何を馬鹿げたこと言ってる！　完全ノーモーションかつ低姿勢からの一本突き。加えてあの速さは化け物か！）
　ライダーはないも動きの兆候を見せていない。構えから全くの動きのロスなく放たれた渾身の突きをアサシンが躱せたのは『彼の闘気が一瞬だけ強まった気がした』ただそれだけだ。人は誰でも雰囲気を放ち、それで人を見る時がある。
　決闘の時も同じことが言える。人を殺す覚悟のある殺気は相手の動きを図る手段と言えよう。誰しも「倒す」と思った瞬間に眼つきが変わるものだ。それすらも隠ぺいするのは、まさに手練れとしか言えない。いや、コイツに関しては『殺気を発した後、その殺気を相手が

感じる前に間合いを詰めた』の方が正しい。
（――どうであれ、今ので分かった。こいつの技も、動きも、殺気もすべて人外の域だ）
アサシンの刀を握る手に力がこもる。
（舐めていたら負ける、コイツの動きは『本物』だ）
ライダーは突きの構えを再度アサシンに向けて突貫する。狙いはまた顔面だ。
アサシンは冷静に二撃目を同じ動きで避けて見せた。だが今度は避けるだけではなく、膝を曲げて低姿勢を維持して腕を引き肉迫して、こちらも同じ突きで返す。
ライダーの胸にアサシンの切っ先が沈む。
だが手ごたえが薄い。
ライダーはすぐさま後退したからだ。
「今度は突きを突きで返してきたか。面白い……　じゃあ、次は――――こんなのでどうだ！」
ライダーは左腕を突き出した。魔力が手に収束し、真っ赤な炎が作られる。
魔力の収束は炎に変わり、ライダーの手から火炎の魔力弾が放たれる。
その間、僅か二秒足らず。
弾速も速い。
「――――ッ！」
アサシンはすぐさま射角から速攻で逃げる。火球はアサシンをとらえることなく後方で乗用車に直撃し爆発を起こした。アサシンは爆発音を聞いてもライダーから眼をそらすことはなかった。
「面白い曲芸だな」
アサシンは頬に冷汗を感じながらも挑発する。
「ああ、これでも俺っち最強なんでね！」
ライダーは急接近し、続けざまにアサシンを突く。ライダーはアサシンの体全体をランダムで狙って連続突きを繰り出す。アサシンはそのすべてを紙一重で流して見せる。顔、胸、腕、足、膝、肩、脇腹、

二の腕。ライダーが狙う部位を瞬時に見抜き、そこの部分だけを避ける動きで、必要最低限の紙一重でいなす。
（なんだ、このアサシン！　これが本当にアサシンの動きか？）
ライダーは口では緩い言葉を言っていたが、内心は驚きの連続だ。
実のところライダーは初撃で終わらせるつもりだった。それが見事にかわされたかと思ったら、次はそれよりも速い攻撃をしたつもりだったが逆に突きを返され、火球も見事に避け、今の連続突きも紙一重ながら一発も当たる気配がない。
すべて避ける。渾身の突きも、連続の突きも、フェイントを混ぜても、本来の狙いから位置をずらしても悟られてしまう。
彼女の態勢は一切崩れていない。中段の構えを大きく崩すことなく体を巧みに動かしてライダーの連撃を避けてみせる。
「……ッ！」
ライダーの肩を狙った突きに対してアサシンは態勢を低くした。ライダーは瞬時に突きを引き、アサシンの顔面を狙って突きを繰り出す。アサシンは足の筋肉、胴の筋肉、腕の筋肉すべてを使いライダーの突きとすれ違いざまに日本刀の突きを繰り出す。
「――――グッ！」
ライダーの突きは外れ、アサシンの突きがライダーの脇腹を貫く。ライダーはたまらず身を引いて傷を押える。しかし、アサシンが得た手ごたえはさっきと同じく薄い。
「ライダー、貴様の力はこの程度か？」
切れる息を整えながらアサシンは構えを立て直す。
「油断しただけさ。まさかここまでアサシンに健闘されるとは思いもよらなかった」
ライダーは傷の痛みをこらえるが、目じりがピクピクとして隠しきれていない。だが、それもすぐさまなくなりライダーはまた構えを立て直す。
「だが、これで仕舞だ。ウォーミングアップはこれくらいで十分だ、そろそろ俺っちの本気を見せようか？」
ライダーはコンクリートが割れるほどの勢いで地面を蹴った。棍

棒を振りかぶり、右から袈裟懸けに全体重ごとアサシンにたたきつけるつもりだ。アサシンは体を右に翻して躱す。ライダーは両足で踏ん張って棍棒を振り払った切り返しで突き上げるが、アサシンは身を引いて避けて見せた。続けざまに突き上げを振り下ろすが、これも完璧な身のこなしで避けられる。

ライダーは追撃をやめて距離を取った。これ以上近接になればアサシンの間合いに踏み込み、先ほどのような反撃を受けてしまう。

「――はあああ！」

ライダーは左手に魔力を収束させ高速の火球を、連続で放つ。アサシンの動きは単発的な攻撃では有効だが、連続で発射される火球では不利だ。アサシンはライダーの射線から退避するが、ライダーもみすみす逃すわけはなく、アサシンの影を追いながら火球を連射した。

射線上の商店のショーケース、乗用車、窓ガラス、オフィス、街路樹が爆発で吹き飛び燃え上がるこの威力なら、火球と言えど耐久力の低いサーヴァントならば数発で倒せてしまう。

アサシンは火球の射線上から逃げながら少しずつ間合いを詰め……

「――はッ！」

地面を蹴って急速に方向転換、ライダーに突貫する。ライダーも火球の連射を打ち切って近接戦に切り替える。アサシンは一直線に突っ込み、ライダーの間合いに入った。

ライダーは棍棒を振り下ろす。だが、これも空を裂いた。

アサシンが瞬間的に眼前からまるで霧が空に溶けたように消滅したのだ。

「――ッ！」

アイツが消えた？　――いや、違う！

ライダーは横目で後方に意識を向ける。

――そこにアサシンはいた。

あの一瞬で方向転換して彼の後ろに回っただけだった。

ライダーが気付いても、遅い。

アサシンの振りかぶった日本刀がライダーの背中をとらえた。

「……ハッ！」
アサシンは渾身の力で切り払った。
――勝ったと思った。ライダーに勝ったと思った。
――だが、現実は甘くはなかった。
――捉えたと思った。しかしアサシンが切ったのは、先ほどライダーがいた空間だった。
――残念、俺っちはその程度じゃあ、切れないんだぜ！
「……ごぶっ！」
強い衝撃がアサシンの腹をとらえていた。
ライダーの赤い棍棒だ。
棍棒が腹にめり込み、ボキッと骨の折れる音と一緒に、ライダーは力いっぱいに棍棒を振り切って、アサシンを空中に投げ飛ばした。アサシンは軽く十メートル以上も放物線を描いて、冷たいアスファルトに落下した。日本刀はアサシンの手元から離れ、別の方向に飛ばされ地面に転がった。
「――ぐ、あぁぁ……」
あばら骨が粉砕され、内臓は破裂していないがダメージがひどい。アサシンは痛みに耐えながら起き上がろうとするが、力が入らない。
「アサシンにしてはいい動きだ。でも、俺っちに比べればこんなのは平均的だ。これくらいの動きなら大抵の速いサーヴァントならできる。もちろん、俺っちも例外じゃない」
ライダーは悠然と語る。
「本気を出すっていったよな？　これが俺っちの本気さ。――1回だけ本気で隙を作って、お前っちの本気を避けてみた。――お前っちの剣筋は大したものだ。ここまでくりゃあ剣客の中じゃあ上の上　……だがよ、俺っちはそのレベルじゃねーんだよ。あのお遊びで決められる場面はいくらでもあった。でもお前っちができたのは、たった一つの傷口。それも、回避してから数秒もかかる前に治癒しきっちまう程度だ。これじゃ、お前っちの底も分かるってもんだ。まあ、手を抜いていたとはいえ俺っちが苦戦するくらいの芸当をして見せたんだ。それに免じてさっきのは手加減してやった。だから、とっ

とと逃げるんだな……　お前とマスターが何もしなければ俺っちは何もしないことだけは確約しよう。でも他の連中はどうするかは分からない。それだけは忠告してやる」

ライダーは身をひるがえして、霊体化した。

戦いは終わったのだ。

アサシンの完全な敗北だった。

最後の一撃もライダーがわざと隙を作ったからだ。

アサシンは悔しさに歯を食いしばりながら、涙を流して痛みに耐えていた。

――今夜、アサシンのサーヴァントは敗北した。

fate／grand order　完全臨界特区　高天ヶ原　第五章

抉れたアスファルト。
炎上する乗用車。
粉砕された店舗。
なぎ倒された街路樹。
スクランブル交差点周辺は戦場跡と化していた。
その中央でアサシンのサーヴァントが倒れていた。ライダーに殴打された部分が酷く傷んだが、この程度なら現界の際に得た魔術の知識でどうにかなる。アサシンは必死に立ち上がり、日本刀を納めてトボトボと歩いた。
私はライダーの口車に乗って私は戦闘した。挑発に乗ったつもりはないし、冷静さを欠いてもない。あの状況にされては受けざるを得なかったと確信しているが結果は散々だ。これでは「挑発に乗ってライダーと戦闘した」と言われても、マスターに警護を放ったと思われても仕方ない。
「馬鹿げている」
自分が憎たらしい。生前も似たような事で私は役目を果たせぬまま死んだ。それを今繰り返した。絶対に繰り返さないと決めたことを繰り返して自分に嫌気が差す。
「ち、くしょう。私はここまで落ちぶれたか……」
醜態を晒すくらいなら自害する。
だが本末転倒だ。マスターを守らなくてはならないというのに当の自分が消えては何も意味はない。
「あ、いいさ。とことん落ちぶれてやるさ」
今こそ約束を果たさんが為に。

――――ううん
物音一つしないビジネスホテルの一室で、藤丸は目を覚まし、ベッ

トから出ようと地面に足をついた時に、駆け巡った脚の腹の鋭い痛みで完全に覚醒した。
「痛っ！」
寝ぼけて習慣通りにしてしまった。
急いで脚をベットに戻して傷を確認したが、血が滲んではいるが包帯の下のガーゼにうっすらあるだけで、これといって困った程ではない。
「ふぅ」
ベット脇のミネラルウォーターを取り、栓を開け一口含みながら、時計を見た。時間は朝六時頃、早起きには丁度いい時間だが、カーテン越しの外は深夜のように暗く、朝日の光が見られない。
遅い日の出ならばいいが、ここはもしや太陽どころか昼も存在しないのだろうか？
「うん？」
そういえばアサシンの姿が見られない。てっきり霊体化しているのだと思っていたが、まさか本当に消えてしまったのか？
「アサシン！　アサシン、どこにいる？」
返す声はない。
「どこに行ったんだ……」
アサシンに何かあったのだとすれば、居ても立ってもいられないが、探しに行こうとしても身体からの悲鳴がそれを許してくれない。
腹だけなら痛みを辛うじて無視して歩けるが、脚に大穴が開いていてはどうにもならない。
「クッ！」
藤丸は奥歯を噛み締めた。どうしようもない不安に駆られて、痛みに耐える覚悟を決めて歩こうと、床に両足をついた時、
「おい、動くな。傷が開くぞ」
何事もなかったようにアサシンは、コンビニのおにぎりをいっぱいに詰めたビニール袋を持って現れた。
「アサシン、外出していたのか？」
「あ、ああ、ちょっとコンビニと付近の探索にな」

アサシンはベッドわきに座ってマスターにおにぎりを差し出した。
「腹空いたろ……」
「ありがとう、アサシン」
藤丸はおにぎりを受け取り「いただきます」と手を合わせて食べ始めた。鮭、梅干し、ツナマヨなどが適当に入ったビニールから、抽選くじの感覚で一つずつ手に取り腹を満たしていった。だがモクモクと食べる藤丸に対してアサシンは未開封のおにぎりを睨んでいて、食が進んでいなかった。サーヴァントは食べなくても肉体の維持はできるが、アサシンはそれとはまた違った様子だ。
「藤丸、食べながらでいいから聞いてくれ……　昨日、サーヴァントに遭遇した。ライダーだ」
「……ぶふッ！」
藤丸は突然のカミングアウトに驚きのあまり米を吹き出し、その破片がアサシンの頬にかかった。
口を閉じて不服そうな顔をしながら、アサシンは懐から出したポケットティッシュで頬を拭う。
「食べながらでもいいと言ったが、噴き出してもいいとは言ってないぞ」
「ごめん……」
「まぁいい。……ライダーはこの場所を見つけて私が出てくるのを待っていた。『マスターを殺す』と脅しをかけられて、止む終えず戦うことになったが、かなり苦戦させられた。相手も相当の手練れで、終始一方的で、結局撤退せざるを得なかった」
「そんなに強いのか？」
「強い。多分、私とは本気で戦ってなかった。あの戦闘である程度の実力を計れたが、ライダーは底どころか頂点ですら、見せようとしなかった……」
アサシンは何かを言おうとして藤丸と目が合った瞬間、アサシンは視線をそらして歯切れ悪く、言葉をこもらせたが、藤丸は彼女のちょっとした表情の変化を鋭敏に感じ取って、
「アサシン、ライダーっていうのは――――お前よりも確実に強いの

か？」
「――――」
アサシンは目をそらしながら、ゆっくり頷いた。藤丸は口を伝えずともライダーとの実力差を理解し、その深刻さを受け入れるように
「しょうがない……」と溜め息をついた。
「敵側に回ったヘラクレスや下総国の一件に比べれば、この程度くらい深刻でも何でもない」
「――――本当か？」
「いや、嘘……　で、でも、これくらいなら切り抜けたことがあるし、敵側のサーヴァントが複数ならバランスをとるために、味方になるサーヴァントも出現するはず……　それに敵側であっても味方にすることさえできれば……　戦力差をひっくり返せるはず」
「馬鹿げてる……　とは言うまい。事実、そうせざるをえない」
「ありがとう、アサシン……」
「――――カルデアのマスターというのは、いつもそこまでへりくだっているのか？」
「そんなことないよ。苦労を掛けたら感謝する……　俺がしているのはそれだけだ。俺ができるのはサーヴァントに比べたら、ほんの少しだけど……　そのほんの少しだけは、精いっぱいの自分ができる最大の事がしたいんだ」
「――――そうか。話が逸れた、元に戻そう……　ライダーに発見されたせいで、此処もすでに敵にマークされているだろうから、今のうちに別の拠点に移動する」
「移動するって、どこに？　俺の治療をした病院か？」
「いや、あそこは敵の巡回範囲だ。私が拠点に据えようとしているのは、此処から十分ほどの距離にあるコンビニだ。お前には安静が必要だが、それぐらいなら食料もあるコンビニの方が手っ取り早い」
「それはいいけど、俺は怪我人だぞ？」
「安心しろ。担ぐことはできる。それがいやなら、敷布ごと引きずって……　どうした？　顔が真っ青だぞ？」
「――――お手柔らかに、頼む」

どこかの建物の地下でライダーはサーヴァントと対峙していた。
彼は一段高くの玉座に腰掛け、立て肘で頬をついていた。彼は姿の隠匿のために前面にカーテンを挟んでいるため、ライダーであっても全貌を見たことがない。ライダーはこれを「姿そのものが真名を露呈する」ものだと考えてはいるが、上座で玉座から動かないこの態度からして「王様」としての気質も現れているのだろうと見立てている。
「ライダー、君は少し勝手が過ぎる。相手の拠点が分かったのなら、こっちと情報を共有してもらわなくては困るよ。僕も兵士の再配備で手一杯で調査どこらじゃないんだから……」
「何言ってるんだ……　俺っちは最強と戦いたいんだ。だったら、まずは一回やり合ってみたいに決まってるじゃないか？　俺っちを召喚したキャスターとあろう者が、それすらわからねえのか？」
「すまない。そこは分かっていたんだ。でもそのために、恰好の機会を取り逃すのは嫌でね」
「俺っちも、最強である証明のために戦ってる。それに、お前っちに従ってるのは、それが目的と一致したからということを忘れては困る。用が済めばとっとと座に帰るつもりだし、一興として『王殺し』をするかもしれねえな？」
ライダーは冗談の中に殺気を含ませてキャスターを見る。
「あー、それは大変だ。非常に大変だ。僕はこれでも君のような戦士でもなければ、知恵の回る策略家でもない。しがないただのキャスターだ。君を屈服させられるほどの強さはないし、あったとしてもベクトルが違う……　だから――――――ランサー、出番だ」
ライダーは真後ろからの殺気に気付き、棍棒を抜いて振り返り戦闘態勢を取った。
先ほどまで空間だけだった場所に光が寄り集まり、霊体化していたサーヴァントが現れた。
赤い鎧、赤いハチマキ、赤い槍が特徴的なランサーだった。
ライダーが初めて見る、槍使いのサーヴァントだ。
「キャスター。お前っちにこんな手ごまがいたなんて意外だ。それ

に、ランサーだったかな？　なかなかいい面構えじゃないか。これは一戦交えてみたい」
「ライダー、頼むからここは控えろ。私はここで体力を使いたくはない」
　表情一つ変えずにランサーは言った。
「ほう。その言い方、まるで俺っちよりも自分が強いみたいな言いぐさじゃないか？」
「実際その見識はあたりだ、ライダー。ランサーは僕が考え得るサーヴァントの中で最強のサーヴァントを用意した。その装いもその意思表示とでも思ってくれ」
「全身真っ赤色の鎧武者が、最強ね？　もしや、宝具か？　それに『最強』ってのは俺っちよりもって意味か、キャスター？」
「彼の個人的な部分についていうことはない。だけど覚えてくれると嬉しい、ライダー。君の見識は正解だ。ランサーと本気で戦ったのならば『ランサーは確実に君と相打ち以上の結果を残す』のは確定事項だ。最強であるプライドをズタズタにされたくなければ、やめておいた方が身のためだ。もしそれでも戦いたいのなら、こちらの目的が終わってからでもいいだろ？　十分時間は残されている。内ゲバはそのあとでもいいだろ」
「分かった。決戦は予約だけにしておこう。ここでつぶし合うのは得策じゃないからな」
「わかってくれて結構。ランサー……持ち場に戻ってくれ、必要があれば呼び出す」
「御意」
　ランサーは霊体化して消滅した。顔色一つ変えないランサーにライダーはつまらなさを感じていたが、その中にある強さには興味をひかれるばかりだ。自分の心の中にある『手合わせ』をしたい衝動を抑えられずに、襲い掛かってしまいたいほどに。キャスターはそれを知っていると思えるタイミングの良さでライダーに言った。
「ライダー、君に一つ指令を与えよう。君もつまらないのは嫌いだろ？　そろそろ事態を前に動かそうと思うんだ」

「ほう？　で、どのように？」
「カルデアのマスター、藤丸立夏をさらってきてほしい。生け捕りだ」
「おいおい。前はそいつを殺そうとしていたよな」
「あの時は、計画に精一杯で兵士共に通達が完全に届いてなかった。だが今度はヘマしない。藤丸立夏を生け捕るのがこの計画の要だ。死んでいてもかまわないが、生きていた方が、手間が少なくなる。だから、くれぐれもこれ以上怪我させるなよ」
「了解……でも『何もしなければ手出ししない』みたいなことを言った手前、アイツらには手荒な真似はできない。もちろん、関係ない奴が割り込んで切れば別だ」
「仕事は早いのなら、やり方は問わない。加えて支援用に二個小隊分の兵士を預ける。頼んだぞ」
「あいよ……　任せな」
　ライダーはやる気の無さそうな声でその場を後にした。

ビジネスホテル前の駐車場で、藤丸はアサシンが用意した車いすに座っていた。相棒のアサシンは借りてきた黒いＳＵＶの席を倒して車いすのための空間を作っている。自分も何かを手伝おうとアサシンに言ってみたが「馬鹿なことはするな」と一蹴された。

「アサシン……車を運転できるのか？」

「騎乗スキルを持っているが、この程度の乗り物ならスキルなくとも知識で動かせる。ブレーキ、アクセル、クラッチ、ハンドルさえ分かれば、あとは勘でどうにかなる」

「そこに技術は必要ないんだな……」

「何言ってる。勘は技術だ」

「――そ、そうか……」

アサシンはＳＵＶのリアゲートを開き、ビジネスホテルの敷布団と掛け布団を敷いた。

「やはり車は便利だな。負傷者一人を寝かせるくらいの空間があるのはありがたい」

「最近の車って、大きさの割に空間が広く作られているし、コンパクトだからな」

「だからこそ、お前を寝かせられるのだが……」

アサシンは藤丸の背中に手を入れ、太ももを抱えた。

「持ち上げるぞ、私の肩に手を回せ」

「……お、おう」

藤丸はアサシンの首に両手を回した。

「持ち上げるぞ……　よっと！」

藤丸を軽々持ち上げたアサシンだったが「もっと密着してくれないか？」

「だ、抱き着くのか？」

「そうだ。思いきりぎゅっとしてくれ、このままだとずり落ちるかも

しれない……」
「わ、わかった」
　藤丸はより強く、アサシンに身を寄せて抱き着くように密着したが、女性の体に密着されることはあっても自分から密着することには抵抗があった。アサシンは自分の性別を気にしない性格のようだが、藤丸立夏は年頃の男子だ。アサシンをどうしても女性として意識してしまう。
　地味に彼女の髪からシャンプーのいい香りがしているし、彼女の胸のあたりの妙に大きい膨らみに体が触れて気恥ずかしい！　心臓もバクバクしているし、出来れば、早く終わってほしい……
「下ろすぞ、そこに腰かけて、後ろに下がると枕があるからそこに寝てくれ」
「ああ、そうか」
　アサシンとの密着が解かれて安堵の息を吐く。ずっと息を止めていたように何度も大きく息を吸って心臓の高鳴りを押えて、敷かれた敷布団に横になる。
「藤丸、ドアを閉めるから足に注意してくれ」
　アサシンはそういってリアゲートを締めると運転席に座り、ハンドルを握り、ブレーキをかけた姿勢でセオリー通りにエンジンをかけた。エンジンが元気のいい音を上げて稼働し始め、アサシンは苦も無く車を操り、道路を走らせた。マスターに気を使って揺れの少なくなるように急な動きを極力避けて、段差のない道を選んでいる。このような運転ができるのも騎乗スキルの恩恵だろう。
　藤丸は全身の力を抜いて目を閉じた。
（傷が治ったら、アサシンに何か御礼をしよう）

　　――ギュイーン！（ブレーキ音）

　藤丸が深い眠りについてからほどなくして、アサシンは道路の真ん中で車を止めた。藤丸は止まった勢いで布団をすべり、頭を壁にぶつけて目を覚ました。

「な、なんだ？　ん？」
　藤丸は体を起こして道路の先を見ると、棍棒を持ちトリコロールの綿織物風雨の服の上に金装飾の鎧を装着した、特徴的なサーヴァントだ。あれがアサシンの言っていたライダーなのだろうか？
　アサシンは日本刀を握って車を降り、ライダーの前に立った。
　両者の距離十五メートル。
「アサシン、また会ったな。大人しくしていれば何もしない、と言ったな――あれ、嘘になっちまった」
「――ッ！」
　アサシンはＳＵＶを横目で見た後、日本刀の青白い刃を露出させて戦闘態勢を取った。
「マスターはやらせない」
「いや、藤丸立夏の命が目的じゃねえよ。俺っちが必要なのはマスターそのものだ」
「なに？　一度命を奪いかけたのに、コイツの身が目的とはお笑いだな」
「俺っちもそう思う。だが俺っちはサーヴァントだ。呼び出したキャスターの命令には従わないとならない。分かるだろ、お前もサーヴァントならな……　おっと、これ以上は無駄話だな。んでだ、俺っちは無駄な争いはしたくない。実力の優劣は昨日ではっきりとさせた。アサシン、マスターを渡してもらおうか？」
「ライダー、サーヴァントが見す見すマスターをあけわたすと思うか？」
「そうか……　だが、これでも勝てると思うのか？」
　パチンっとライダーが指を鳴らすと、左右のビルの屋上から弓兵が二十名以上の現れ、後方と前方から歩兵部隊が現れた。
「（ざっと二部隊――多めに考えて一個小隊か……）一人で来たわけではないと思ったが、ここまでしてもマスターを誘拐する気か？」
「ああ、時間はたっぷりあるが、仕事は早いことに越したことはない。キャスターはきな臭さ満点だけど、その点だけは俺っちは賛成だ」
　ライダーが棍棒を構えると、屋上の弓兵が一斉に矢をつがえる。

「いいのか？　攻撃態勢に入った瞬間にお前に大量の矢が降り注ぐぞ？」
「さてどうかな……」
強気にいきがってみたアサシンだが、ライダーとの実力差は最悪防戦一方でどうにかするとしても無数の矢弾を躱せる余裕はない。
「じゃあ、まずは……」
ライダーは手を上げる。
「これでも受けてもらおうか！」
ライダーの腕が振り下ろされる、その時だった……
――ドゴンッ！
突然、弓兵のいる屋上が爆発し弓兵のゴーレムが砕け散った。
続けてアサシンの後方上空から火炎を纏った弾頭数発が弓兵のいる屋上を砕く。射手は弓兵がいた屋上よりも頭一つ高い屋上、ここから直線距離で約二百メートル付近から狙ったようだ。
「サーヴァント！」
「なんだ、こりゃ！」
屋上を焼き払った射手が次に狙ったのはアサシンの後方に展開していた部隊とライダー。新たに放たれた数発の火炎の矢が両者に襲い掛かる。部隊の方は避けきれずに矢弾の爆発に巻き込まれて総崩れに、ライダーは身を引き避けきれない矢弾は棍棒で弾き飛ばす。弾き飛ばされた矢弾はビルの壁で爆破して大きな穴を空けた。
アサシンは何が起きているのか意味が分からず、硬直していたがハッとしてアサシンはＳＵＶに乗り込み車を後退させる。
「クッソ、何だってんだ。お前ら、アサシンを逃がすな！　狙撃手は俺っちがヤる！」
ライダーの足元に円形の白い靄が発生した。靄は脛まで足を表面を覆い、霧が円形をたもったままライダーと共に浮き上がり空を浮遊する。
「逃がすかよ、飛び立て！」
ライダーは靄に乗って直線的に射手に向かい飛び立った。
ＳＵＶの中で一部始終を見ていた藤丸は、あれがライダーの宝具だ

と思った。あのライダーは「靄に乗るライダー」なのだろう。そして、あのような乗り物は世界で一つしかない。
「まさか、あのライダーの真名って……」
「立夏、頭を引っ込めろ！　包囲網を突破する！」
　アサシンは車を反転させて総崩れになった部隊をアクセル全開で駆け抜ける。突破を阻止しようとした兵士もいたが、アサシンはそれをひき逃げする。
「マスター、逃げるぞ！　ライダーはあちらがひきつけてくれているはずだ」
「味方がいたのか？」
「いなかった。私も驚いている。一体、だれが……」
　ライダーは砲弾のごとき速度で夜空を飛翔する。屋上の射手はライダーに向かい矢弾を連射し、ライダーは応戦するが矢弾は棍棒に触れると同時に爆発し、ナパーム並みの火炎と指向性爆薬並の爆風が襲い掛かるが、ライダーの体は即時再生し、鎧も傷つくことはなく、爆炎の中を駆け抜け特攻する。
「この程度じゃ、俺っちは止められねえぜ！」
「デタラメすぎる！」
　ライダーの視線が射手の姿をとらえた。銀髪赤眼の完全武装の女鎧武者。　額には角が生え白い鉢巻を巻き、巨大な火炎を纏う矢をつがえた、煉獄の忌み名を冠するアーチャーだった。アーチャーは驚嘆しながらも矢を放ち、ライダーは何度も矢を誘爆させて爆炎の中で倍の速度で直行する。
「残念だったな、アーチャー！　俺っちはこの程度の火炎じゃ焼けねーよ！」
「ッ！　不覚！」
　ライダーは棍棒を振りかぶる。彼の筋力に加えて巡行速度を乗せた一撃は耐久の高いサーヴァントと言えど、無視できない破壊力がある。アーチャーはライダーの一撃を避けられないと悟り、弓を投げ捨て、肩幅に足を広げて迎え撃つ態勢を取った。ライダーは速度で生まれた力を棍棒に全て乗せて振り切り、アーチャーに槌の撃が打ち付け

られる。
だが――その寸前で、ライダーは目を疑った。
――アーチャーはその棍棒を両手で握り取って、受け止めて見せたのだ。
ライダーの渾身はアーチャーの体を抜けてコンクリートの足場にひびが入り、アーチャーの脚が引きずられる。まさに彼女の持つ妖の一端を持つからこそなせる荒業だ。
アーチャーの肉体は正真正銘人外の強度を持つ。この強度はサーヴァントになったことでより洗練されているが、ライダーの攻撃を受けきるにはまだ足りない。純血の妖魔でも無理がある限界を超える力技をなそうというのだから、アーチャーの両手両足は耐えられずに筋肉がピキピキと割れて瓦解する。
「うあああああああああああ！」
アーチャーは鬼神の如き雄たけびを上げ、肉体の限界を超えている全身にさらに力込める。それは彼女の体に重大な負荷を与え、神経を開裂し、血管が破れ、骨がひび割れる。
「舐めるなあああああアアアアアアアアア！」
慢心の肉体になりながらもライダーの一撃を受けきり、完全に棍棒と速度の勢いを殺し切った。
「お、おう……　ま、マジかよ」
流石のライダーも開いた口がふさがらなかった。ハッとして、ライダーが棍棒をアーチャーの手から引き抜こうとしてもがっちり握られて簡単には抜けない。
「今です！　スカサハ様！」
最後の力を振り絞りアーチャーの呼びかけに応え、ライダーの後ろから、黒い戦装束に真紅の魔槍を携えた、赤い瞳のランサーが現れる。
「――――ッちぃ！」
ライダーは棍棒を放し、紙一重で上空に退避した。奇襲が失敗するとアーチャーは棍棒を持ったままその場に倒れ込んだ。限界のさらに限界を突き抜けた体はもう動く余力もない。
「大丈夫か？　まだ動けるか？」

「は、はい。まだ、た、戦えます……」
　アーチャーは見るからに疲弊し戦力として数えられない。スカサハは靄の足場で宙に浮くライダーを見据える。
「驚いた。あんな力業初めて見た。見事だった、アーチャーのサーヴァント。だが甘かったな」
　ライダーは何かを小声でつぶやいた。すると棍棒がアーチャーの手をすり抜けてライダーの手元まで戻った。
「さて、これで仕切り直しだ。今度はお前と勝負だ」
「そうか、お前は私に挑むのか？」
「ああ。俺っちは最強なんでね。俺っちは俺っちよりも強い奴と戦って、勝ってそれを証明する。その点、お前っちは最適だ。だろ、影の国の女王スカサハ様よ」
「面白いことを言う。私もこれだけ大口を叩く戦士も珍しい……」
「スカサハ様、私も戦います……」
　ふらふらとしながらもアーチャーは立ち上がろうとするが……
「やめろ、お主はもう立てん。お前がひきつけてくれている間に、待機していた一部隊は壊滅さられた。それだけで十分仕事をした。だからもう、これ以上戦っても私の足手まといになるだけだ。だからこの場に治癒のルーンをかけておく、傷が治り次第マスターの援護に行け。ここからは私の仕事だ。適当にあしらってマスターの退路を確保する、いいな？」
「わかりました。ご武運を……」
「お前もな」
　スカサハはアーチャーに手をかざすと彼女の足元にルーンの陣ができ、傷が再生していく。
「さて、では腕試しだ。ライダーのサーヴァント！」
　スカサハは足を強化して跳躍し、ライダーは急速下降する。ライダーは全体重をかけて棍棒を振り下ろし、スカサハの赤槍と棍棒が激しい音を立てて衝突した。互いの力はおおむね互角だ。故に弾け合い、ライダーは揺れる姿勢を空中で整え、スカサハは何事もなく屋上に余裕をもって着地した。

ライダーは満足そうにほくそ笑み、赤槍が触れた場所を軽く撫でて影の国の女王の強さを悟る。あの接触の際に彼は僅かだが押され、スカサハの放った一撃は重かった。こん棒から手のひらに伝わる感触が今まで戦ってきた戦士たちとは異質であり、比べるまでもなく強者のものだった。

「やるな、影の国の女王だけはある。これなら俺っちも本気の出しようがあるってもんだ」

ライダーはそう言うと、一旦その場から逃げていく、だがすぐに旋回し同時に再度急降下する。

ライダーは距離が欲しかった。アーチャーが全身で受け止めたあの速さまで加速し、一撃で仕留めんとするライダーは棍棒を振りかぶる。

「――――ほう、面白い。だが――――」

スカサハはその場から別の屋上に退避する。今この場には治療中のアーチャーがいるため可能な限り、その場から離れなければならなかった。

「逃げるのか、スカサハ！」

ライダーは方向を変えて、彼女との接触場所を速さから逆算して突進する。スカサハもそれを踏まえて適当な位置まで移動して足を止めた。

ライダーは標的を見据え、更に靄を加速させる。彼が足に纏う靄はおそらく「人を運ぶ乗り物」としては世界最速だろう。

スカサハは槍を握りしめる。ライダーは「油断ならぬ敵」であるのは、先ほどの一撃の手合わせで熟知した。先ほどは若干競り勝てた気がしたが次の一撃はまともに受けては体が持たない。

だが、迎撃は簡単だ。

真正面から受けなければいい。身を軽く翻して回避するだけで事足りるが、スカサハは軌道修正される可能性まで踏まえ、限界まで引き寄せから加速のルーンを全身にかけて最低限度の動きで回避する。

その素振りの最中だった。――――突然、ライダーは自分の乗る靄から空中に飛び出した。

制御を失った靄は直線的にスカサハに突進する。スカサハはモーションの最中で動きを止めることができずに誰もいない霧のような乗り物を避け、その際ライダーを見失った。だがおおよその位置は把握できていたため、回避が終わり次第再度前方に跳躍してビルの屋上から飛び出す。

その読みは見事に当たり、スカサハの上空にいたライダーの渾身の一撃は紙一重で避けたが、屋上は木っ端みじんに粉砕される。

「さすがだな、やってくれる」

スカサハはルーンで落下速度を押えて地上に着陸し、一息ついた。ライダーは一流ではないが英雄になるだけの実力は兼ね備えているし、あの高速移動は油断できない。スカサハは槍を握りなおして後ろを向いた。

「――――おっと、休憩中だったかな?」

ライダーが平然と立っている。

スカサハはライダーを睨んだ。

彼は強者だ。出で立ち、立ち振る舞い、目配せ全てに実力者としての風格と研鑽がある。棍棒を雑で大味な扱いをしているように見えるのは、彼はまだ本気を出していないからであろう。

「貴様、本気を出さないのか?」

「影の国の女王様が、何を仰る。俺っちたちが本気を出したら、この楽しい殺劇が一瞬で終わっちまうだろ?」

「そうか、お前はそういうタイプか……」

スカサハの手から力が抜けた。

「幻滅したか?」

「ああ、嫌になる。お前は遊び感覚で死線を見ている。お前はただの戦士ではないが、私が好きなタイプの戦士とはかけ離れすぎている」

ライダーは棍棒を強く握り締めた。

悔しくはない。純粋にムカついた。

「スカサハ、俺っちを見縊るな。お遊戯で棍棒を振ったことはない。たしかに死線を楽しみにはしていたが、どんなときもそれだけはしない。殺りあいはいつも本気だ。でないと殺した相手に失礼だろ?」

「ならばそれを証明してみろ」
「ご要望とあれば。では、早々に真名解放と洒落込もうか。俺っちもキャスターの期待に少しはこたえないとな」
瞬時。ライダーから暴風の如き殺気が放たれた。離れていても感じる魔力の奔流が、スカサハを圧するが彼女は決して動じない。だが次に起きた現象に瞬きほどの面食らった。
――ライダーは瞑目し転化を始めた。
絹のような派手な着衣は形を変えてより絢爛に、身につける鎧は光沢と装飾緻密さを増し、棍棒は新たに可憐な金装飾が施される。完全に霊基が別のものに差し代わり、それに伴って体内魔力、放出魔力の上限および循環魔力の効率に至るまで格段に増幅する。
これは、彼の霊基を構成する全要素が一段階上へ到達することを意味する。スカサハは知っている。この現象はカルデア内のサーヴァントなら一度は経験することだ。
――霊基再臨
サーヴァントが本来の姿へと昇華する際に行われる強化の過程。カルデアでは霊基を高めたサーヴァントのみが特別な素材を使うことでのみ可能となるが、彼はそれを真名の解放というたったひとつの要素でなして見せた。スカサハは霊基再臨に多大なリソースを消費し、その量は生半可なサーヴァントが一人で成せる容量を超えていることを知っていた。
故に彼女は期待を込めて微笑する。
完全な変化が終わり魔力の奔流が安定すると、ライダーは瞑目から開眼して、
「これが本来の俺っちだ。今こそ、俺の本来の真名を語ろう」
ライダーは淡々と語る。
「我が名、真名は斉天大聖。斉天大聖孫悟空だ」

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第七章

斉天大聖孫悟空。別名孫行者。

中国の四大寄書「西遊記」の登場人物。おそらく中国大陸最強の戦士の一人であろうこの人物は、最初は猿たちに崇められる美猴王だった。だが不老不死を求めて仙人に弟子入りした際に孫悟空という名を貰う。そんな彼が最も世界に名を馳せた逸話といえば、三蔵法師とともに天竺へ旅立つ話であろう。

彼はその時の功績で仏の名に連ねることになった。

「なんていうのは、もう意味のない戯言だ」

彼は決まって自分の過去話の最後を締めくくる。彼にとっては仏の名は通過点に過ぎなかった。

天界、人界、冥界。孫悟空はそれすら広いと感じていた。そして自分はその中で最強だった。負けことはあったが敗北はしたことがない。最後は勝っていた。天狗のように鼻を伸ばすほどに得意げになったが、世界を知った時、伸びきった鼻は完全に折られてしまった。

斉天大聖は天竺への旅で、世界を知った。自分の過ごしてきた天界も人界も冥界ですら世界の一部分でしかなく、仏の序列など無意味だと気づいた。「世界は広い」と一度は聞いたことである言葉を彼はプライドを抉られるほどに思い知らされた。英雄となって座に名を刻んでからは更にそれが加速した。

古代ウルクの英雄王、影の国の女王、ブリテンの騎士王、古代エジプトの太陽王、中東の大英雄、施しの英雄、授かりの英雄。そして、獣の因子。

世界は広過ぎた。

天狗でいたことが恥ずかしい。

だが、それで最強を諦めるほど馬鹿ではない。

誓った、あの軟弱泣き虫法師に。

「俺っちは最強だ」

初めて会い、弟子となったあの瞬間から法師の中での最強は俺になった。普通は信じないだろうが、あの法師はどこか抜けてて馬鹿正直に「そうなんだ。だったら、旅も安心ね！」とほざいて、手当たり次第に連れ回されて「悟空がいれば大丈夫！」とか小っ恥ずかしいことも連呼された。

しかし、それがいかにせん嬉しくなり、いつしか自分の誇りだった。玄奘三蔵法師の最強の弟子の称号に居心地の良さとプライドを詰め込めるほどに。

だから、この大見栄を切ったからには、最強で居続けるしかない。これで最強でないと笑われでもしたら、今度こそ本当に自分は泣き虫法師に顔向け出来ない。

「俺っちは最強だ。アイツの弟子としてそれだけは譲れない！たとえ世界に強豪がいようとも、俺っちは最強で居続けてみせる！」

ゆえに、孫悟空は棍棒を振るう。

「さぁ。死にものぐるいで、プライドも、誇りも、全て賭けた勝負と行こうか！」

「こい、英雄！」

「おうよ！」

道路がえぐれるほどの踏み込みで悟空はスカサハに肉薄し、棍棒を振り下ろし叩きつける。スカサハは赤槍で向かい打ちながら槍を倒して勢いの向きをずらす。棍棒は赤槍を辿りながら道路を破壊し、沈黙した。

「甘い！」

スカサハは2本目の赤槍を左手に編み出し刺突したが、ライダーの鎧をかすっただけに終わり、ライダーはスカサハが二槍流に変わったため、追撃をやめて身を引いた。

「どうした？来ぬのか？」

「二槍流はちと珍しくてね。思わず避けちまった。そういえばスカサハの武術は最大六槍流だったな。腕が何本もある如来様ならイメージつくが、俺っちにはどうみても腕二本に対して六本の槍をあやつれるようには見えな……っ!?」

目を離した隙にスカサハの周囲に赤槍４本が支えもなく宙に浮かんでいた。切っ尖は常にライダーに向けられ、発射態勢で待機している。
「マジ、かよ」
「残念、こう言うことだ」
一斉に４本の赤槍が射出された。悟空は足元に霧を生み出し目にも留まらぬ速さで赤槍全てを避けてみせた。
「危ねぇな！でもこれで六槍流のからくりはわかった。この程度俺っちなら屁でもねぇ！」
悟空は霧を乗ってスカサハに向かって道路を滑走させる。
「さぁ、真名解放した俺っちの必勝パターンを見せてやるぜ！」
スカサハは槍を撃ち出し迎撃するが、全て棍棒に弾かれるが、悟空の速度は落ちない。むしろ上昇し、悟空は神速を持って、棍棒で辻斬りしようと言うのだ。対してスカサハは間合いを見計らい最小の動きで身を逸らした。
だが……いくら身を逸らしても棍棒はスカサハの身を捉え続ける軌道を描く。体を倒しても棍棒は自立しているように形を変える。
回避は不可だ。スカサハは守りルーンの出力を最大にする。
――バコンッ！
鋼、いや超硬合金を押しつぶす重厚な破裂音がスカサハの横腹を突いた。悟空は全身に力を込めて高速下で棍棒をフルスイングした。スカサハの体がバットに打たれたボールのように放物線を描きながら宙を飛び、道路脇の服屋のショーケースに突っ込んだ。
「クリティカルってわけじゃねぇな？だが手応えはいい感じだ。ダメージくらいは入っただろ」
悟空はスカサハが突っ込んだ服屋に向かった。店内はスカサハが飛んだ軌跡を中心に物が散乱し、それ以外は理路整然としていて目立った損壊がない。
スカサハは店奥の服の山に埋もれていたが、悠長にしているとライダーの追い討ちが来る。彼女は衣服を払いのけて立ち上がった。
「どうだ？俺っちの一撃の重みは？」

「なかなかだ。腹が二つに割れると思ったぞ？」
「そりゃいい。もう一丁行こうか！」
悟空は俊足でスカサハに突貫する。
槍と棍棒がぶつかり合い火花が散る。
悟空はスカサハに対して反撃を許さず、一方的に棍棒を繰り出す。切り上げ、振り下げ、薙ぎ払い、突き崩す。しかしその全てをスカサハは槍で流し、悟空はそのたびに自然な動きで流れた攻撃を次の攻撃に繋げる。
まるで演舞だ。
一貫した流動的な攻防は一進一退というより一心同体。互いに自分の手の打ちを相手の手の打ちに照らし合わせて、最善の動きを連続させる。
悟空が攻撃側、スカサハが防御側。この構図は互いの武器の動きが止まるまで変化することはなかった。スカサハが一度、ルーンで加速して距離をとったからだ。
「厄介だな。その棍棒、ただの棍棒ではないな？」
交えてみてわかった。
悟空が本気を出した最初の一撃はスカサハの読み通りなら確実に避けることができたはずだ。しかし棍棒の軌道は常に腹を狙った。悟空はこれといって持ち手を長くするといった特別な動きをしていたわけではない。そしてこの攻防で、ライダーの攻撃は『一撃一撃の間合いが変化』していた。二度と同じ距離はなく、微妙な長さの違いがあった。
つまり、あの棍棒は……
――瞬間的に長短が変化する。
「ああ。これも俺っちの宝具だ。面白いだろ？ケルト神話には無い意外性に富んだ武器だ」
悟空は朗々と語り、スカサハは緊張で手に汗を感じた。
彼女の読みは当たっている。
彼の持つ棍棒、名を『如意金箍棒』と言う。
孫悟空の持つ宝具の一つ。当初は海を支える重りとして置かれて

いたが、孫悟空が奪い取ってからは武器として使った。効果は単純で『長さ、太さ、硬さを任意の状態に変化させる』だけ。しかしその汎用性と拡張性は他の宝具とは一線を画す。
「間合いを測ろうとしても長さを変えられてしまうか……面白い」
間合いを自在に変化させられるなら、元から全領域が間合いだと割り切ればいい。
次はスカサハから詰め寄った。槍の間合いギリギリから攻め、棍棒の動きだけでなく長さにも注意を払う。スカサハの対応は適切で、先程の守勢がウソのように棍棒を流して攻勢を変えない。
悟空も何度か攻勢に転じようとしても、スカサハの動きが自分の動きを全て読み切っているせいで、守勢に回らざるを得ない。
悟空はスカサハとの実力差を如意棒の自在性で補うつもりだったが、これでは意味がない。
「だったら！」
悟空は突然、後ろに下がり火球を撃った。スカサハは槍で火球を両断して打ち消し、悟空に詰め寄るが悟空はよりも早く後退して、屋外に飛び出した。
「作戦変更としましょうか」
ライダーは足元に霧を生み出した。
孫悟空の第二宝具「筋斗雲」である。
「さて、影の国の女王様は高機動戦はお得意で？」
「知らんな」
「そうかい！」
悟空はスカサハに一撃。
防がれる。
続けて筋斗雲の流れに乗って後ろに回り一撃。
防がれる。
「甘い！」
スカサハは棍棒を押し込んで悟空の体勢を崩した。悟空の実力と宝具の特性を理解し、戦い方は完全に把握した今のスカサハなら容易いことだ。その隙に瞬時に二槍流に変え、魔力を槍にかける。

刺し穿ち、突き穿つ、不可避の宝具ーーー『貫き穿つ死翔の槍』が発動しようとしていた。
スカサハは踏み込んだ。二槍が赤く発光し、赤い六本の軌跡が悟空を空間に縫い付け……
――――ビリッ！
スカサハの体が麻痺した。突如、槍の発光が止まり、宝具の魔力が大幅に減衰し、悟空の一歩手前でただの槍になった。
「なっ！」
突然のことにスカサハは目を見開いた。悟空は槍を不発にされて隙だらけになったスカサハに、悟空は逆襲の一撃を浴びせる。ルーンで防御を固めていたもののスカサハの体は立ったまま、道路を引きずられるが、姿勢は崩さない。
「呪詛か！」
驚きが隠せない。守りのルーンは抜かりなく張り続けたというこに、ライダーの『宝具封印』が宝具を使用不能にし、威力も大幅に低下させた。
「ご明察！俺っちの神通力の一つで俺っちよりも強い奴らへの切り札だ。『貫き穿つ死翔の槍』と『死溢るる魔境への門』は俺っちにしてみれば相性最悪だ。この二つがある限り俺っちに勝利はない。だが！」
悟空が急接近し、スカサハは防御姿勢を取ったが間に合わず、彼の棍棒がまた同じ腹部に叩きつけられる。
「くっ！」
今度はルーンの守りを突破した。スカサハは痛みを無視して悟空に反撃しようとするが、体が震えが止まらず、思うように力を出せない、反応も遅すぎる。
「そらよっと！」
悟空は後ろに周りスカサハの腰椎に蹴り飛ばし、先程突っ込んでめちゃくちゃになった商店に鋭く蹴り込んだ。
「これぞ、ダイナミック入店ってか？」
斉天大聖は感嘆の声を上げ、勝ち誇った様子で店内を覗いた。二度の派手な入店のおかげで、店内は暴動の後のように荒らされ、床に所

狭しと新品の服が散乱し、壁に掛けてあった服も全て落ちた。
その中にあった服の山の一つからスカサハは現れた。
「ほう、腰椎をへし折ったはずだが生きていたか？」
「生憎、弟子がいる以上、師は其奴よりもしぶとくなければならん。見事な一撃だが、それでもお前の蹴りはルーンの併用で容易く凌げる程度でしかない」
「言ってくれるじゃないか？宝具は沈黙してるっていうのに顔色一つ変えやしねぇ。でも、時間稼ぐくらいにはなるだろ。てな訳で、そろそろキャスターの言いつけを果たしますかね……っ！」
悟空はスカサハに突撃した。鍔迫り合いになると悟空は力尽くでスカサハを押し込み筋斗雲の加速力を上乗せしながら壁に激突し、轟音が店の壁を破った。砂煙とコンクリート片が飛び散るなか、二人は道路に飛び出した。スカサハは投げ出されて砂煙から抜けると、空中で態勢を戻しながら槍で勢いを殺しつつ着地した。
「どこだ？」
スカサハが見回すと彼女の上空で一筋の雲のが高速で流れている。
悟空の筋斗雲だ。
「っ、やってくれる！」
追いかけようとするが、筋斗雲と瞬足では分が悪い。加えてスカサハはマスターからも仲間のサーヴァントからも突き放されてしまった。
そもそも悟空の動きには不可解な点があった。妙に戦闘を伸ばしながら決定打になる立ち回りを避けていた。
スカサハはそれをわかっていたが、仲間のサーヴァントがマスターを確保する時間を稼ぐために乗らざるを得なかった。
――悟空の目的は自分と同じ時間稼ぎ。
それがわかっていながら、時間を長く稼ぎすぎた。スカサハの顔から余裕が消えた。
スカサハが悟空との戦闘に苦戦している最中、藤丸とアサシンも苦戦を強いられていた。先回りしていた傀儡兵に車を大破させられ、徒

歩での移動を余儀なくされた。
　傀儡兵が追いかける中を、アサシンは藤丸を背負いながら片手で刀を握り逃走していた。持ち前の俊敏な動きも藤丸を背負っては発揮できず、傀儡兵もアサシンには劣るものの侮れない練度を持っていたため徐々に追い詰められている状況だ。
「アサシン、敵に先回りされてる」
「わかっている。だがお前がいる以上、無茶な動きができない」
　今のアサシンに出来ることといえば、追手を正面から突破するか細い道に入ることで攻撃される方向を制限させることだけ。ジリ貧に変わりなく、下手に逃げれば袋小路に追い詰められてしまう。
「そこを退けぇ！」
　アサシンの一閃は傀儡兵の首を刎ね、砂塵に返す。そこで生まれたわずかな陣形の穴をすり抜け、程よく手薄な場所を見計らって逃げる。
「はっ……ハーハー、ハー」
　息が荒くなった。敵は明らかに自分の消耗を狙って追い詰めている。マスターを背負っての逃走はサーヴァントであれ重労働だ。消耗すればするほど傀儡兵でもサーヴァントは仕留められる。
「敵の思う壺か……」
　かといってマスターを置いていくこともできない。自分は助かってもマスターが傀儡兵に殺されてしまう。それでは意味もない。
「アサシン、大丈夫か？」
「少し辛いがなんてことはない。この程度のことは生前で何度も味わった。気にするな」
「でも、辛そうだ」
「だが、休むわけにもいかない。今のうちに距離を稼がなければまたライダーが襲ってくる（しかし一体何者だ？あの火炎はサーヴァントのものだ。私たちを援護したように見えたが、あれは味方なのか？）」
　っく、考えるな。それは安全圏に出てからだ。
　アサシンは裏路地を突っ切り、大通りに出た。
「考えが甘かった……すまない」

アサシンが呟いた。
何事と藤丸が周囲を見回すと、敵だらけだった。通りには重装歩兵が長槍を突き出しながら数列に連なり、屋上には数十という射手が弓を引いている。いつでも襲い掛かれる状態でアサシンを待ち構えていた。
「アサシン、これまでだ」
重装歩兵の横隊から紅の鎧に身を包んだサーヴァントが姿を現した。右手には赤い長槍、左手には業物の日本刀を握り、額にはハチマキ、鎧は軽装で日本の趣があった。
「サーヴァント！」
アサシンは刀を構えた。マスターを背負っての戦闘自滅行為だがこうも囲まれては、戦わざるを得ない。
「いいのか、アサシン。このままではマスターは死ぬ」
「知ったことか。ランサー、お前には関係ない」
アサシンは大見栄を張ったが顔色は険しく説得力に欠ける。紅のサーヴァントもそれを承知している。
故に……
「マスターを渡せ！そうすればお前も助けよう！」
「ッ断る！」
即座に毅然と否定する。
「そうはいっても、マスターの方はどうだ？見てみろ、今にも死にそうだ」
「え？」
アサシンは藤丸を横目で見る。
思返すとあのサーヴァントが現れてから藤丸は何も反応を見せていない。アサシンは怪訝に藤丸を揺らしたが、応答がない。
「おい、どうした……っ！」
藤丸の意識がない。前に回した腕が力なくだらりと垂れ、視線を落とすと、ズボンまで赤い線が引かれ、袖口からポタポタと血が滴っている。
「傷が開いたのか？しっかりしろ！」

アサシンが何度も問いかけても藤丸は答えない。
「わかったかアサシン。このままじっとしていてもマスターは死ぬ。お前が抵抗したところで彼の寿命が縮む以外になにも得はない。渡せ。渡せばマスターはこちらで治療する」
「信じられるか！」
「我々の目的はマスターだ。それに最後まで生きていてもらわないと困る。だから、みすみす死なせることはしない」
「……」
アサシンは思考を巡らせるが、打開策は思いつかない。そのうちにもマスターの命が危ない。
「さぁ、主人をこちらに渡せ、アサシン！」
鎧武者が声を張り上げた時、彼の足もとに丸い塊が一つ落ちた。手のひらサイズの陶器製の黒い塊で……まさか！
「焙烙玉ッ！」
刹那の驚愕の最中、閃光と煙が鎧武者の視界を塞いだ。
――バゴンッ！
鎧武者は逃げる素ぶりを見せる間も無く爆風に覆われた。続けて焙烙玉が十数個放り込まれ、同様に爆発し煙幕が敵横隊の視界を完全に奪った。加えて煙幕には目潰し用の薬剤が混ぜ込まれているようで、鎧武者は目の痛みを抑えながら必死に音で周囲を探る。
「全隊下がれ！一時撤退する！」
鎧武者は唇を噛み締めた、血が顎をつたるほどに。彼は一矢報いるべくアサシンへ走る。煙幕は大して広くなく数歩で抜けられたが、途端にサーヴァントが一騎、横這いからギラリとした殺気をもって仕掛けてきた。
――風魔小太郎だ。
目潰しが効いていたが鎧武者は殺気だけで敵の距離を感じ取って槍で空を薙ぎ払い、小太郎は寸前で回避して距離を取りながら「主人を連れて逃げてください！」とアサシンに言った。
「させてなるものか！」
ランサーは逃せまいと槍を地面に突き立る。槍の先端に魔力を込

める炎が生まれ、ランサーを周囲を包み込んだ火柱によって煙幕を振り払った。目潰しの薬も全て燃え尽き、ランサーは小太郎とマスターを目で捉えた。
「逃さん！」
「させません！」
小太郎は再度ランサーに焙烙玉を投げつける。ランサーは防御姿勢をとったが、ただの煙幕が広がりアサシンとの間に壁を作った。ランサーは煙幕を振り払い視界を確保したが、小太郎はアサシンを先導しながら路地裏に逃げた後だった。
「周囲を隈なく捜索しろ！」
ランサーは傀儡兵に命令を下し、兵士たちは分隊規模で散開した。アサシンは小太郎に導かれながら包囲網を離脱し、傀儡兵に見つかることなく適当な建物に入った。
「早くマスターを下ろしてください。応急手当します」
「なら私も手伝う。ガーゼとタオル……縫うものをがあれば一番なのだが……」
藤丸を長椅子に下ろして傷の程度のほどは小太郎が青ざめるほどだった。彼の着ているカルデア礼装の腹部が血で染まり、赤黒く染まっている。小太郎は服を脱がせる時間も惜しみ「御免」と言ってクナイで服を裂いた。
小太郎の手当の手際の良さには目を見張るものがあった。治療を施しながら片手間でアサシンに的確な指示を出し、彼女が行った手当の倍の早さで難なくこなしてみせた。
「血止めは終わりましたし、応急処置は済ませました。アサシン……でよろしいですか？あなたもご苦労様です」
「いや、礼を言うのはこちらの方だ。絶体絶命の所をかたじけない。自己紹介がまだだった、私は藤丸立香のサーヴァント、クラスはアサシンだ」
「こちらもアサシンです。言葉遣いからするに、同郷の方でしょうか？」
「真名は、まだ言いたくない。私は、コイツを認めたわけではない」

「ーーー訳ありなんですね。では合流地点に案内します。詳しい経緯はそちらで話してもらいます」
「承知した。だが傀儡兵がうろつく中をどうやって抜ける？」
「それは私の専売特許です。任せてください」
「なら、マスターは引き続き私が担ぐ。小太郎は……」
突然、二人は停止した。
何かに気づいた様子を見合う二人は窓に気配を感じ、それが何かを瞬間的に目配せだけで理解し、気配の先を見た。
その直後である。
窓を高速で突き破り室内を掻き乱しながらサーヴァントが飛び入る。
先程スカサハと戦闘していたライダーだった。
彼はほどのほどの戦闘で時間を稼ぎながらスカサハをマスターから突き放し、その機動力のアドバンテージをもってマスターの確保に回ってきた。
「見つけたぞ、カルデアのマスター！」
小太郎はアサシンの前に出る。
「逃げてください！ここは危険です！」
「逃すかよ！」
悟空は距離を詰める。小太郎はクナイを胸元から取り出して投擲するが、彼の纏う鎧に為すすべもなく弾かれてしまう。
「させません!!」
小太郎は煙幕玉を足元に落とし、目くらましを計った。室内は煙で満たされてマスターもサーヴァントも見失った。
「っち。やりやがる！だが俺っちにその手は通じるものかよ！」
方向を変えて窓を突き破った。
眼下にはマスターを背負い必死に走るアサシンがいる。
「マスターは頂かせてもらう！　おっと！」
悟空が突き破った部屋の煙幕からクナイが飛ぶ。悟空は身を翻して避けると次は小太郎が現れる。
「っ！」

首を狙う小太郎の一閃を華麗に躱し、アサシンを追う。小太郎は悟空のすれ違ったまま向かいのビルの壁を蹴り、悟空の背部を狙う。
「しつこい！」
悟空は小太郎に如意棒の先端を向けて火球を放った。小太郎は反応はしたものの、回避動作ができずに火球を受け、火に包まれながら墜落する！
「なっ！」
アサシンは息を飲んだ。ライダーとアサシンは同じ四騎士とはいえ二人のポテンシャルの違いは歴然であった。
マスターを守るため、自分を守るため、アサシンはライダーに体を向け右手に刀を握る。攻めることはできずとも、防戦であればやりようはある。
ーーーそう思っていたが
「うっ！」
アサシンの体が痙攣に襲われた。前兆もなく脚の筋肉が痺れ身動きが取れない。しかひ通電するような痺れに膝をついても刀はライダーに向けていた。
「呪詛、か！」
「もらった！」
ライダーはアサシンとのすれ違い様にマスターを強引に引き剥がして抱え込む。そしてライダーは速度を維持してビルの陰に消えていった。
「マスターは貰っていく！」
ーーー数秒もなかった。
アサシンは痺れる体を起こしながらアスファルトに拳を打った。何度も、何度も、血が出るほどに何度も。奥歯が割れるほどに歯を軋ませながら鋭い表情でライダー消えた先を睨んだ。

ーーー明日を変える夢を見た。
自分なら世界を変えられると思った。

自分の可能性を、自分の志を持っていた。
しかし世界は無情にも私を拒絶した。
ーーー女だから無理だと言われた。
ーーーそれでもと立ち上がった。
ーーー愚直に訓練を繰り返した。
血を吐くほどの努力をした。女を切り捨て、男になろうとし続けて、常人の数十倍以上の思いを胸に、全てを投げ打って努力した。
しばらくして私は至った。
男よりも強く凛々しく厳しく育ち、男を超えた。名実ともに、自分に叶う男など数を数えるほどしかいないと確信できるくらい。
ーーーそれでも無理だった。
ーーー結局は男社会。女の居る場所は家だけ。
ーーーでも、それでも！
言い続けた。言い続けて、言い続けて、言い続けて、言い続けて、言い続けて、言い続けた。
涙で床を濡らした日も、雨に打たれ絶望した日も、土に汚れ恥を晒した日も、男に中傷され心を裂かれた日も、全否定を否定し続けた。
ーーーすべて女を否定した。
ーーーすべて男を拒絶した。
ーーーすべての人生を捨てた。
ーーーそして最後に残ったのは残酷な夢だった。
これが後に仲間と絶望的な戦いに赴く運命となった瞬間になろうとは……

「ん、んんん!?」
どこだ、此処。藤丸立香は目覚めた直後に思わず飛び起きた。一見するとカルデアのマイルームに似ているが部屋の広さや設備も異なる。どちらかというと、マイルームに似せてあるように感じられる。
「傷が、消えてる」
包帯は新しく巻かれ、傷を触っても不快感や痛みはない。包帯を解いても傷跡らしいものが薄っすら残るだけで、完全に治癒されてい

た。
「何があった？」
記憶を思い返す。アサシンに連れられてライダーや土の傀儡兵から逃げる最中に意識が遠くなって気絶した。
「逃げ切れたのか？」
希望が胸を温めたが、程なくしてドアが開いた途端それは一気に冷え切った。
「こんにちは、カルデアのマスター」
見覚えのない人だった。紺色の浴衣を着た短髪の成年の男性で悪を感じさせない晴れやかな笑顔でこちらに話しかけてきた。
『直感がつけている。この人はサーヴァントだ』
状況的にもサーヴァント以外あり得ないが、論理を思考する前に確信を持てた。この魔力量は常人を遥かに凌ぐ、それも威圧感すら感じるレベルだ。
「キャスターのサーヴァント！」
「ほほぅ。名乗る前にクラスを当てるとは、さすが人理の守り手。最後のマスターの異名は伊達ではないか……」
「ここはどこだ！」
「東京の国立国会図書館の地下空間。私が作ったところだ。地脈や龍脈の関係上、ここが一番の最適だからね。それと注意事項を先に言っておく。出歩く時は私を呼んでくれ、インターホンをつけてあるからそれを押してくれると早く来れる。間違っても一人で出歩かないことだ。死にたくなければね」
「何を言う。すでに死にかけてていた。どうして治療した。俺を殺すのが目的じゃないのか？」
「半分正解だ。最初に殺しかけたのは此方の兵卒の行動がオートだったからだ。その点は謝罪する。あの時は本当に死にそうになっていたから、あの手のこの手で延命させた。小道具を一式を集めて、アサシンを誘導するのは骨が折れたよ」
「半分ってことは、結果は変わらないって意味か？」
「いや、そうじゃない。私が求めているのは君の命であって死ではな

い」
「命であって死ではない？」
　意味がわからなかった。魔術的な意味なのだろうと推測できたが、それ以上は分からない。
「まさか、体から命を抜き取るってことか？」
　キャスターがニヤリとしたということは当たりなのだろう。
「察しが良くて助かる。一から十まで言っていては日が暮れる。あ、ここは常に夜だったな」
「冗談を言える余裕があるなら教えてくれ。俺の命で何をするんだ？」
「一意一願の儀式といえば、聞こえはいいかな。この特異点を作ったのも、君を召喚したのも、ライダーに君を誘拐させたのも、願いを叶える布石。そのために私たちはいるのだから、当然ではないのか？」
「傍迷惑な願いだな。願いがあるなら聖杯を使えばいい」
「ああ。答えがそう単純ならよかった。でもそれは無理だ。聖杯は別の願いのために、その魔力リソースすべてを使い、消失してしまった。ここに聖杯はない。それに特異点の核は別にあるし」
「別？」
「おっと、これ以上は言えない。万が一にも脱出されて妨害でもされたら一大事だ」
「止める気はないってことか？」
「そもそも、願いに君は不可欠だから、止めようがない。代用も考えたが不確実すぎるし、出来ても不確定要素の温床で無理矢理やるわけにもいかない。すまないが、これは決定事項だ」
「じゃあ、アサシンも敵なのか？」
「ああ、君の味方すべて敵だ。でも同時に私たちは君の味方でもある。この計画の要は藤丸立香、君だ。君に死なれては困るし、この計画の妨害には君を殺すのが最適解だ。そういう意味でなら、私は味方だ。絶対に裏切ることのない味方だ」
「ーーーー」
　彼らの起こす計画は一体。藤丸は今までの経験すべてを思い返し

て考えて見たが、結論が出せない。ホームズやモリアーティーのようにうまく推理できるわけもないが……
「さて、話はこれで一旦終わらせてもらう。こちらにも、準備がある。カルデアのことも考えて後始末しないとならない。やはや、身を削る思いさ」
キャスターは顔色を変えることなく部屋を出て行った。

ーーー都内某ホテルロビー
アサシンはため息を吐いた。
合流したカルデアのサーヴァント3体から注がれる険悪な視線を無視しつつアサシンは壁に寄りかかりながら通信の様子を伺っていた。
「状況は一通り飲み込めた。それで、君がマスターを守護していたサーヴァントってことでいいかい？」
「ああ。私が護衛していた。ライダーに連れさらわれたがな」
「それはしょうがないとしかいいようがない。斉天大聖孫悟空の筋斗雲の速さは随一。一撃離脱に置いては彼の優勢は揺るがないし、高位のサーヴァントでもあの速度は捉えられない」
「残念だったな。私が、最上位サーヴァントでなくて」
「いや、上位であろうが最上位であろうが関係ない。君はマスターを守った、でも無理だった。ただそれだけのことだ。あの宝具はそういうものだと考えるしかない」
天才ダ・ヴィンチにはアサシンの皮肉は無意味のようだ。裏を返せば、あの筋斗雲はシャレにならない性能ということでもある。
「かのアキレウスの神速でもアレを超えるのは難しいだろうね。なんたって孫悟空は中国の文献史上最強の一人。？☒大夫でも三蔵法師でも手を焼く問題児だ。それを止めるのは骨が折れるどころか、砕け散るだろうね」
「倒すのは困難そうですね」
「時間稼ぎでも私と互角に鍔迫り合ったサーヴァントだ。この中で対等に渡り合える人選は私しかなかろう」

だが孫悟空は甘くない。時間稼ぎでもスカサハをやり込めた実力は本物で、この特異点での最大の壁になり得るサーヴァントだ。
「そういえば、スカサハ様は大丈夫でしょうか？呪詛をかけられたと仰ってましたが……」
「すでに解呪した。原初のルーンでも解呪が難航するほどに強い呪いだったがどうにかなった。次は遅れは取らん」
「それともう一騎。あのアサシンが言うにはランサーらしい。アサシン、あのランサーはどんなサーヴァントなんですか？」
「私も実際に交戦したわけではないから、なんとも言えない。ただ油断ならないサーヴァントだとは思う」
「規格外の孫悟空に不明瞭なランサーか。今回もなんとも言えない困難な任務になりそうだ。こちらからも精一杯援護してみるが、レイシフト前にも言った通り、君たち三人をここに送る際に多大な電力を消費した。これ以上、新たなサーヴァントを送ることは不可能だ。マスターの救出も特異点の修復も、アサシンを含めた四人でやってもらう」
「難しい任務ですね。せめてあと一騎居れば、負担も大きく減らせると思うのですが……」
「しかしカルデア側の魔力が少ないのでは全体の機能に大きな制限がかかる。こればかりはどうしようもなかろう」
「スカサハの言う通りだ。できるのなら、カルデア総員で惜しげも無く支援したい。しかし、現状サーヴァントを一騎をレイシフトしてしまえば、マスターの戻ってくる際の電力まで消耗してしまう。その特異点はレイシフトの時間が長く色々な意味で遠いんだ。通信するにも電力消費は馬鹿にならない」
「では、我々はこれからどうすればよいのでしょうか？マスターを探すと言っても闇雲に探すわけには……」
「だろうと思ってこの特異点をできうる限りサーチしてみた。まず、この特異点の調査結果から言おう。この特異点は東京都が何かしらの外的な要因で空間ごと歪められてしまった異界の都市だ」
「その、外的要員というのは？」

「未だに不明。現在鋭意調査中といったところかな。だが異界化には説明がつけられる。魔術のなかに空間を異界にする秘術があるからね。おそらく、それを応用して大規模にしたものだろう」
「来てわかったがここは魔境に何当てはまるほどの異郷の趣きがある。これは相当、厄介な特異点になるな」
「いくら異界化の魔術があっても現実を塗りつぶす大魔術となると発動はおろか維持も困難なはずなのでは？」
「うん、ごもっともな意見だ。お陰でその付近の空間には維持目的の魔力で満ちている。しかも空間かみ飽和するほどの量がね。神代では大気中に大量の魔力が自然と存在したが、この特異点はその比じゃない。場所によっては神代よりも濃いところもある。加えて、この特異点自体が限界に近い。魔力の飽和もあるが、特異点に圧縮されて貯蔵される魔力が異常を振り切って規格外の数値を叩き出している。これでは、ひとつ間違えればこの特異点が丸ごと大爆発する」
「これも聖杯の影響でしょうか？聖杯が特異点を魔境に変えてしまったとか……」
「うーん、どうだろう。聖杯は万能のように見えて万能じゃない。できる限度に限りはあるけど、その限度を未だにハッキリ確認できてない所もあるから断言できない」
「でも聖杯はここにある。回収できれば何かしらの変化は期待できますね」
「ですが、逆に聖杯を得ることでこの特異点が制御不能にはなるとは考えられませんか？」
　インフェルノは不安を隠せない。マスターの身の安全が保障できないことはしなくないのだろう。小太郎も同じ心境のようで、インフェルノの意見に頷く。
「そこがこの特異点の肝だ。目的と理由もわからない状態で、我々はマスターを失うことになった。つまり主導権は全て敵側にあるってことになる。これを打開しない限りどうしようもない」
　替えの効かないただ一人のマスターを盾にされてはカルデアは何もできない。藤丸立香の性格からして従わせるのは無理でも、沈黙さ

せるくらいはできるだろう。
ーーーサーヴァントたちが口を閉ざした。優先権が彼方にあるのなら不用意に動くわけにもいかない。アサシンのクラスである小太郎ですら、潜入という手段を口にしないくらいだ。効果はある。
静寂が始まってから数秒。口を閉ざしていたアサシンはため息をしながら、寄りかかっていた壁から背中を離した。
「大丈夫だ。今のところ、アイツらは何があっても藤丸に危害を加えない」
「ほう?どういうことかね?」
「ランサーが言っていた。『最後まで生きてもらわなければ困る。みすみすマスターを死なせることはしない』と、マスターに拘りを見せていた。もしカルデアの動きを封じる目的で攫うのなら『最後まで生きてもらわなければ』とは言わない。交渉材料を生かすのは『殺す』という選択肢を持ち続けたいから。なのに、殺す選択肢を最初から放棄している言い方をするはずがない」
「言葉のあやとも考えなれないか?」
「可能性は捨てきれない。だが『動けば殺す』を真に受けて、何もできないと決めつけるのは『諦めた』と同義だ。藤丸という人間は、それは絶対にしない。絶望感の淵に叩きおとされようとも、立ち塞がる強敵に足を震わせようとも、足掻き続ける。だから、私も最大限のことをする」
「なら君はここから出て行って何をするんだ?」
「調査する。元来、アサシンは隠密に長けたサーヴァントだ。本拠地への侵入は無理でも周囲の偵察くらいはできる」
「威力偵察ということか?なら風魔小太郎、君も彼女に同行してくれ。一人より二人の方が状況把握も迅速に行える」
「わかった。小太郎、付き合ってくれ」
「はい!」
「二人はここで待機。先ほどの戦闘での消耗があるだろうから、休息の間に英気を養ってほしい」

「ーーーーん？」
国立国会図書館の地下施設の一室。藤丸立香用に作られたマイルームが何者かによって開かれた。
「何者だ？」
眠りかけていた眼を開いて侵入者を捉える。
侵入者は紅の鎧姿の武士だった。サーヴァントなのは自明だったが、敵対心はなかった。ここの主人であるキャスターの命令で「敵対心を向けないようにしている」雰囲気ではない。もっと深い部分での信頼のような違和感を感じた。
「あなたが藤丸立香ですか？」
「うん」
藤丸は頷いた。
「人理焼却を解決してみせたカルデアの人類最後のマスターですね」
「うん」
ふっ、とサーヴァントはほくそ笑んだ。
「なるほど。迷いの無い眼だ。サーヴァントを前にしても、逃げようとせず。命の危険を前にしても平然としていられるとは」
「いつも平然としているわけじゃない。今は内心いつ殺されるか不安でたまらないけど、あなたはそれを感じない。だから平然としていられる」
「ふ、期待せてすまない。マスター、君はキャスターの儀式が始まれば死ぬ。これは変わらない。それに君の死を私は心から願ってる。それが義に反しているのことも重々承知だ」
「ならどうして、キャスター側に着く？」
「私がそう望んだからだ。私は聖杯に叶えなければならない願いがある。しかし、その願いはふつうの聖杯では叶えられない。だからこのいる。キャスターは自分と来れば願いを叶えると言った。私はそれを信じている」
「その願って？」
「今は語るまい。時がくればわかろう。それまでは此処でジッとしていることだ。あともう一つ。あのスーツ姿のアサシンは信用するな。

あれは、マスターに隠し事をする不届き者だからな」
「なぜ、アサシンのことを知っている？」
「知っているも何も、あれは元は私たちの仲間だ」
「ーーーーーえ、アサシンが？」
　そのあまりに自然と語られた言葉に藤丸は目を丸くした。アサシンは自分を救ってくれた。これは疑いようのない事実だ。たしかにアサシンは真名を隠し続けたが、疑わしいことは何一つなかった。誠実で忠実なサーヴァントだった。
「疑っていないのか？さすがマスター、その心のあり様は素晴らしいの一言に尽きる。でも、君は何度裏切られた。バビロニアでは作業行為の如くエルキドゥに刃を向けられ、新宿では自分の誠実さをモリアーティーに利用され、アガルタでは裏切り以前にそもそも価値観の共有もできなかった」
「何が言いたいんだ。アサシンが裏切るということか？」
「違う。元よりこちら側から決裂した奴だ。もう私には関係ない。だがアイツがそういう精神を持つことを忘れるな。あれは『悪』属性だからな」
「だからなんだ」
「アサシンは『必要であれば外道を許容する』ということだ。お前が気に入らなくても」
「だけど『悪』だって色々ある。エレシュキガルも悪だ。アタランテだって、小太郎だって、アステリオスだって悪属性だ。だから俺は、そのあり方で人を判断したりしない。人には立場と役割があるのだから」
「そうか、君はそういう人だったね。阿呆を晒したのは私の方か……」
　損した気分だ、と言いつつランサーは身を翻した。
「儀式まで残り数刻ある。覚悟を固めておけ」
「ーーーー」
　東京の摩天楼を跳びながら横断する偵察組二人。本場の忍である

小太郎が先行し、そこから若干の距離取ってアサシンが追いかける。これはアサシンが遅いとか小太郎が速いからではない。
本場の忍の持つ天性の勘と危険感知が敵の目を避けるには役に立つと小太郎自らがアサシンに提案したことだ。アサシンは偵察が効率的になるのならと少し苦い顔を見せたが一応承諾した。
二人は異界化した東京で強い魔力の反応がある場所を目指していた。ダ・ヴィンチちゃん曰く「特異点をスキャンした時に見つかった一番怪しい場所」だそうだ。
「ここならどうでしょうか？」
小太郎はとあるビルの屋上で足を止めた。同行するアサシンは小太郎の横に着き、彼の指差す方向を見た。地図と照らし合せるとちょうど、ダ・ヴィンチちゃんが言っていた怪しい場所だ。
小太郎は通信機のチャンネルをカルデアに繋いだ。
「あの建物でしょうか？どうにも敵の拠点には一切見えないのですが……」
「いや、ここで正解だ。地図と検知器が反応を示してる。ちょっと待ってくれ、シルエットと現存する建物と比較する。ーーーーーーー確認できた。あれは元は国立国会図書館だそうだ。異界化しているせいか元の場所とは違う位置に飛ばされているみたいだね」
「結界のような防御陣が敷かれているようには見えませんが、そちらでも同じでしょうか？」
「うん。キャスターの陣地作成スキルで工房化していると覚悟していたが、まさか結界すら広げられてないなんて同じキャスターとしてこれは驚きだ」
「こちらから仕掛けて来れないとわかっているからでしょうか？」
「違うだろうね。結界こそないが、あそこの地下から濃密な魔力が漏れ出している。結界がないのは、結界を起動したところで魔力の反応を抑えきれないからだろうし、特定のされても防ぐだけの力と算段があるからに違いない」
「同感だ。地下はキャスターの絶対領域になっているはずだ。侵入しようものなら傀儡兵の物量に押し込まれてしまう」

工房は魔術師にとっては、自分の体内のように入り口から異物が入ればすぐさま反応し、免疫がそれを排除する作りだ。特にキャスターの工房となれば内部に自動防衛装置張り巡らされていたり、方向感覚を狂わせる入り組んだ迷宮だったり、異界化して人間が通れない構造だったりとデタラメな拠点の可能性もある。
「傀儡兵だけなら易しい方と考えるべきでしょうか？」
「どちらにしろ。突っ込んで見ないかぎり内部はわからない。ガワは同じでも内部は全くの別物ということもある」
「もう少し近づきますか？」
「無理してまで近寄る必要はないよ。ここからでも解析はできるからね。少し待っててくれ、スキャンする」
ーーーーピピィ！
数分後に解析機器が停止しダ・ヴィンチちゃんは険しい顔で資料を眺めると、国立国会図書館を一瞥して一言。
「うん、正面突破しかないね」
自称天才が言うのだから間違いない、とダ・ヴィンチちゃんは念を押した。つまり絡め手を使っても意味がない、もしくは逆に危険になるということだ。
「あの陣地は見事なものだ。ネズミ入る隙間もない。キャスターの肩を持つわけじゃないが、あれは天才的だ。あの建物自体がキャスターにとっての結界。体内だ。外部に半円型の結界を広げていないのは、建物自体に結界としての効果を持たせている。たぶん、キャスターの道具作成スキルの応用かな」
「結局見つかるのなら堂々と入る。これがお前の答えか、ダ・ヴィンチ」
鋭い眼差しのアサシンに「そうだ」とダ・ヴィンチちゃんは冷静に断言した。
「容赦ない一言だ。でもこれで腹は決まった。帰るぞ、小太郎。拠点で強襲の案を練るぞ？」

「強襲の案ですか？こう言って難ですが、傀儡兵を突破しない限り、突入は不可能と思われます」
「十中八九、スカサハに孫悟空の相手をしてもらうしかない。小太郎、アサシン、インフェルノの三人で突入してもらう他ない」
　キャスターのクラスはこと拠点防衛に関しては他のクラスのサーヴァントよりも有利に立ち回れる。陣地作成と道具作成のスキルによる恩恵だ。
「突入したとしても内部構造が不明なことも問題になってくる。下手に動けば袋の鼠。傀儡兵の物量で押し切られる……こんな悪条件だらけの救出任務だけどやってくれるか？」
「でもやるしかありません。マスターを救い出すにはこれしか……ないのなら、私はやります」
「難しい任務ですが、全うしてみせます」
「もとから一人でもやるつもりだ。だが暗殺者二人と弓兵一人では少々機動力が心もとない。手頃な車を私が運転する。騎乗スキルはないが、多少の運転なら経験済みだ。それとスカサハ、お前のルーンの力を分けて貰いたい」
「ルーンの加護か？可能だが、過信はできんぞ」
「最悪一撃凌げればいい」
「でしたら車にも加護をお願いできませんか？私が立って応戦できる程度で構いませんので」
「ああ、もとよりそのつもりだ。キャスターがいないとなれば、私がする他ないにしても重労働だ」
「しょうがないですよ。槍兵が術者の真似事なんて畑違いなんですから」
　巴と小太郎がスカサハの手伝いをしている最中、アサシンはぼんやりと空を見ていた。
「どうしたんだ、アサシン。何か気になることでも？」
「なんでもない。ただ彼方に思いを馳せていただけだ」
「想いね……恋煩いか？」
「ーーはぁ、つまらん」

アサシンはダ・ヴィンチちゃんに背を向けて霊体化した。ダ・ヴィンチちゃんとしては、戦いの前に呆けているのは危険な兆候と言いたかったが……

「盛大に負けフラグを立ててくれなければいいか。彼女は一人にしておこう」

ダ・ヴィンチちゃんは他三人に助言に向かった。

藤丸は夢を見た。

誰かの夢だった。

誰かの一生だった。

ーーー私は誓った。心に誓った。

「私は死ぬほど戦う、最後まで絶対に」

仲間は消えた。仲間は死んだ。仲間は殺された。仲間は捕まった。仲間は拷問された。仲間は次々死体に変わった。

その中でも自分は動き続けた、誓いを果たすため。約束を最後まで遂げるために。

しかし現実は違った。

私は生き残った。無残な醜態を晒しながらも地べたを這いながら死に抗い続け、戦った先にあったのは敵の温情による生存という、度し難い生き恥だ。

「チクショウ!」

寝室で血まみれで倒れていた私は、医者から告げられた一言に慟哭した。

自分は誓いを立て、それを全うすると身に刻みつけたというのに私はそれを破り捨てた。なぜ、運命は私を最後まで生かした。なぜ、仲間は私を残して散ってしまったんだ。

傷だらけの身体で怒りに任せて刃を振るった。無造作に剣技などない、振り回しすだけの暴力。恨みを自分に向ける嘆きの暴挙で、寝室の壁がズダズダになるまで、傷口が開き動けなくなるまで、それは続いた。

「なんで、こうなる……私は何を間違えた」

慟哭に震えながら泣き続けた。
そして暫くして私は、受けた傷が病気を誘発して、そのまま息き絶えた。
私は、運命を呪った。私は、人生を呪った。
全てを捧げたモノに誓った願いすら果たせぬまま死んだ不幸を恨んだ。
ーーーああ、馬鹿げている。

「ーーーーん？」
また無意識に眠っていたようだ。
悲しい夢だった。目頭が熱く、雫が垂れる陰惨な誰かの一生の終わりを見た。サーヴァントとの契約でサーヴァントの夢を見ることはあったが、ここまで強い感情を持った夢は珍しい。
「あの夢、もしかして」
夢の主に思い当たる人がいたが、すぐ頭を振って忘却した。次に会うときは必ず元気な顔を見せなくてはならないから。
「よく眠っていたな、気を張っていたせいか？」
突然の侵入者に藤丸の眠気は吹き飛んだ。ベットから飛び起きて身構えたところ、侵入者は「警戒せずとも何もしない」と手を見せた。
侵入者は紅の鎧姿の武士だった。サーヴァントなのは自明だったが、敵対心はなかった。ここの主人であるキャスターの命令で「敵対心を向けないようにしている」雰囲気ではない。
「あなたが藤丸立香ですか？」
「うん」
藤丸は頷いた。
「人理焼却を解決してみせたカルデアの人類最後のマスターですね」
「うん」
ふっ、とサーヴァントはほくそ笑んだ。
「なるほど。迷いの無い眼だ。サーヴァントを前にしても、逃げようとせず。命の危険を前にしても平然としていられるとは」
「いつも平然としているわけじゃない。今は内心いつ殺されるか不安

でたまらないけど、あなたはそれを感じない。だから平然としていられる」
「ふ、期待せてすまない。マスター、君はキャスターの儀式が始まれば死ぬ。これは変わらない。それに君の死を私は心から願ってる。それが義に反しているのことも重々承知だ」
「ならどうして、キャスター側に着く？」
「私がそう望んだからだ。私は聖杯に叶えなければならない願いがある。しかし、その願いはふつうの聖杯では叶えられない。だからこのいる。キャスターは自分と来れば願いを叶えると言った。私はそれを信じている」
「その願って？」
「今は語るまい。時がくればわかろう。それまでは此処でジッとしていることだ。あともう一つ。あのスーツ姿のアサシンは信用するな。あれは、マスターに隠し事をする不届き者だからな」
「なぜ、アサシンのことを知っている？」
「知っているも何も、あれは元は私たちの仲間だ」
「ーーーーーえ、アサシンが？」
　そのあまりに自然と語られた言葉に藤丸は目を丸くした。アサシンは自分を救ってくれた。これは疑いようのない事実だ。たしかにアサシンは真名を隠し続けたが、疑わしいことは何一つなかった。誠実で忠実なサーヴァントだった。
「疑っていないのか？さすがマスター、その心のあり様は素晴らしいの一言に尽きる。でも、君は何度裏切られた？バビロニアでは作業行為の如くエルキドゥに刃を向けられ、新宿では自分の誠実さをモリアーティーに利用され、アガルタでは裏切り以前にそもそも価値観の共有もできなかった」
「何が言いたいんだ。アサシンが裏切るということか？」
「違う。元よりこちら側から決裂した奴だ。もう私には関係ない。だがアイツがそういう精神を持つことを忘れるな。あれは『悪』属性だからな」
「だからなんだ」

「アサシンは『必要であれば外道を許容する』ということだ。君が気に入らなくても」
「でも『悪』だって色々ある。エレシュキガルも悪だ。アタランテだって、小太郎だって、アステリオスだって悪属性だ。だから俺は、そのあり方で人を判断したりしない。人には立場と役割があるのだから」
「そうか、君はそういう人なのを忘れていた。阿呆を晒したのは私の方か……」
　損した気分だ、と言いつつランサーは身を翻した。
「儀式まで残り数刻ある。覚悟を固めておけ」
「ーーーー」

「もう少しだ、もう少しで夢が叶う」
　キャスターは玉座から天を仰いでいた。視線の先にあるのは巨大な球体状の術式。二次元的ではなく三次元的に表された模様の多彩な重なり合わせによって姿を変える特殊な魔術式である。
「あれが本命ってわけですか？」
　彼方に想いを馳せるひと時に水を差したのは、ライダーこと孫悟空であった。ライダーの作法も知らない無粋な態度にキャスターは、今すぐ不届き者の首を刎ねてしまいたい衝動を抑えながら、毅然とした態度を貫いた。
「ライダー、お前に答える義理はない」
「でも俺っちがマスターを連れて来なければこの術は完成しなかった。もう起動はできているんでしょ？だったらどんなものか教えてくれてもいいんじゃないか？」
「そうだな……。では一つ質問しよう。ライダー、お前はどうしても取り戻したいモノはあるか？」
「取り戻したいモノ？家族、親戚、友人、恋人ってあたりか？」
「概ね正解だ。そして、成せるのはどんな奇跡か、わかるか？」
　ライダーはあごを触りながら考え、突然ハッとした。彼が行おうとしていること、それは……
「第三魔法か！だがどうやって蘇らせる。魂は一度人から完全に抜け

てしまえば、戻ることはないし蘇ったとしても本人である可能はどうやって保証する？」
「魔法を使えば誰であれ、魂の固定は可能だ。しかしいくら第三魔法でも、無から有を生み出すのは不可能だが、もしここに魂の欠片があったらどうだ？魂とは元は無色だ。そこに色付きの魂を組み込めば、魂すべてその色に染められる」
「だったら何故あのマスターなんだ？アイツでなくても……。そういうことか。キャスター、まさか二つの魔法を同時に起動する気か？万能の願望機の出力を使って……」
「さすがライダーだ。察しがいい。それでこそ、斉天大聖だ。で、これからどうする？私の目的を知ってもなお、それでも従うか？」
　キャスターは手元の剣に手を伸ばした。ライダーがもし抑止力となってこちらに叛旗を翻すのならばここで首を斬り落すつまりだった。しかしライダーは前触れもなく吹き出し、大声で笑った。
「ああ、最後まで従おうじゃないか！元から俺っちの目的は一つ、最強になることだ。それにキャスター、俺っちは今感動しているんだ。生前見たこともない大偉業がこの目の前で成されるんだ。こんな面白いことは生前を全て見返してもほとんどない。まさに世界を揺るがす瞬間に立ち会えるなら光栄さ」
「そうか、なら最期の一手はお前に任せよう。ライダー、斉天大聖孫悟空よ。敵を討ち果たし、汝の願い存分に楽しめ」
「ああ、いいさ。やってやろうじゃないか！」
　悟空は満足そうに気を高ぶらせて去っていった。
　キャスターはまた天を見上げ、折り重なる秘術の体現を刻々と待ちながら安らかな顔で微笑みながら呟いた。
「我が主よ、しばしお待ちを」

「では作戦をもう一度確認しよう。今回、相手は物量戦を仕掛けてくると予想される。狭い空間は物量線には適しているが、小回りは効かない。そこを利用して、アサシン2人とアーチャーで突入する。もっとも驚異の高い孫悟空に関してはスカサハに任せる。異論は？」

首を傾げる人はいない。
「では、オーダーを実行する！」
副司令の気迫ある号令により作戦の開始が通達され、サーヴァントたちは行動を始めた。
アーチャー・インフェルノ、アサシンと小太郎はそれぞれボンネットに乗り、スカサハはあらかじめ車のフレームに刻み込んだルーンを起動する。
直後、都内の無数の無人車が一斉に唸りを上げ、国立国会図書館に向け走り出す。
この策はアサシンによって提案された。相手の戦力は千人規模で正面から相対するのは難しい。ならば頭数を増やす他ない。
どうやって？
簡単だ。この東京には車が無数に放置されている。これを利用するのだ。車全てにルーンを刻み、あらかじめ設定させたルートを走らせ、敵をひき潰す。サーヴァントに近い能力はあれど車と衝突すれば足止めは出来る。加えてどの車もルートは違えど目的地は同じに設定することでサーヴァントたちは車のボンネットを移動することで兵士の壁を抜けられる。
「最初聞いた時はなるほどと頷いてしまいましたが、実際に見てみると、これは詰まるところゴリ押し作戦ですね」
「ええ、まるでステータスを筋力のみに極振りしたような作戦です」
「だがそれしかない。我々はこれ以外の突破手段を思いつかなかった」
「はぁ、車一台一台にルーンを刻むのは重労働だった。キャスターの領分はあまり好かぬ」
それぞれはルート別に国立国会図書館を目指す。それぞれに与えられた車は大小合わせて２０台前後。車体もルーンで若干の強化を加えているので、正面衝突すれば低級サーヴァントでも無視できないダメージにはなる。
「なんだ、ありゃ！」
国会図書館の屋上で胡座をかいていた悟空は、車が一斉にこちらに

猛スピードで向かっている異様な光景に、目を丸くした。
あまりに豪胆な策に思考が停止したと思えば、程なく吹き出し、腹を抱えてゲラゲラと笑い転げた。
「そうきたか！そうきたか、カルデア！面白い！面白すぎる！こうでないとな！」
「なん、だ。マジか？」
キャスターは驚愕のあまり言葉を失った。物量にはそれなりの物量を投入するというのは、作戦のひとつしてあるがまさか頭数をこのように増やすとは思いもよらなかった。だが冷静な思考は止めない。
「全軍に通達。防楯を前面に押し出し、進行を食い止めよ！ライダー、カルデアを食い止めろ！ランサー、最終防衛線は抜かせるな！」
「御意！」
「あいよ！」
通達を終え、キャスターは玉座を降りて工房の最奥に急いで向かう。
「私も出ざるを得ないか。もう少し猶予が欲しかったが仕方ない。まさか未完成のまま宮廷を使うことになろうとは」
同時刻。国会図書館の外周では人身事故が多発していた。兵士をひき潰し、跳ね飛ばしながら大小様々な車が人の壁を超える車の潮流に傀儡兵は懸命に逆らっていた。車は爆発炎上するモノもあれば、横転するモノもある。これを防楯を駆使して兵士が車を押しとめる。わざと横転させることで進行を阻もうとするが、それを行うよりも車が押し返す力の方が強く、上手く横転させられない。横転させられても後続の車両が押し続ける。
「うん、いい具合にしているね。これなら兵士のほとんどは車の進行妨害に回されているだろうね」
「いえ、そうは上手く行かないかとしれません」
「え？」
小太郎は高空を指差した。そこにはほうき星のような一線の光の筋が宙を舞っていた。
ーーーライダーだ。

「さて、まずは！」
狙いを定め、直角に急降下。宝具筋斗雲の亜音速が地上に激突した。
さながら流星の墜落だ。大地震のように地を揺らしながら数百の傀儡兵、車両の一団はおろか地表を纏めて粉砕して藻屑と化した。地を揺らすほどの爆煙を巻き上げられ、地上にはぽっかりとクレーターだけが残り付近のビルが一斉に倒壊。
明らかにやりすぎである。
因みに肝心の悟空はというと破壊行為に興奮したようで恍惚な表情で誠に楽しそうに高空に戻って行った。地上で突入目前のメンバーは目を見張った。
「なんですか！あれ！デタラメもいいところです！チートです！チーターです！」
「あの程度で気を冷やしては先が思いやられる。あのようなじゃじゃ馬は影の国では日常茶飯事だ」
「なっ！嘘ですよね。影の国って本当に地球の国ですか？それって魔界か何かですよね！」
「うるさい。インフェルノ、弓で牽制しながらこちら側へ誘導をしてくれ」
「は、はい。承りました」
若干引き気味ながらインフェルノは矢をつがえ、引き絞る。
「届けぇ！」
紅蓮を纏った矢が高空を射抜く。ライダーも地上からの迎撃に驚きながらも回避する。そして唇を舐めて「いいだろう、次はそっちだ！」と筋斗雲を翻して急速落下する。
「食いついたか！」
インフェルノは次々と矢を放つ。相手の動きを読みながら一撃一撃に魔力を込める。
「当たらんよ！この程度じゃなぁ！」
「ならば！」
インフェルノは一度に数本の矢をつがえ、同時に散弾のように射出

した。一本一本に狙いを定め、逃げ道を塞ぎながら撃ち続ける。しかし全てが避けられて当たらない。
「残念、これもムダだ……っ！」
「だったら！」
インフェルノは第四波の矢を放った。ライダーは筋斗雲を見事な制動で操り、矢弾を回避しようとしたが、突然矢弾が爆発した。これを機に悟空を包むように矢弾が次々に撃ち込まれ、悟空は火炎に揉まれながら一旦離脱した。
「なんだありゃ、矢がナパーム弾になったぞ！」
「逃すか！」
第五波の矢弾が悟空の空域を丸ごと焼く。炸裂する矢、炎を広げる矢、破壊力を突き詰めた矢を織り交ぜながら悟空に微量ながらダメージを与えていく。
「くっそ！なんだあのアーチャーの矢は、炸裂焼夷榴弾かよ！だが、それでも、俺っちを倒すには足りないんだよ！」
悟空はインフェルノの矢弾によるダメージを無視し、迎撃をもろともしない急降下爆発を敢行する。
「えい、南無三！」
インフェルノは軌道修正も不可能と見るなり、ボンネットを伝いながら流星の射線から離れようとするがライダーも方向転換しながら追尾する。
インフェルノは縦横無尽に飛びながら、矢を放ちつつ動き続けた。しかしライダーを止めることはできない。
「大将首ひとつ目、貰い受けるぜ！」
矢の嵐を避け切ったライダーの一撃が、インフェルノを地上ごと解体するその時であった。
紅蓮の一閃がライダーの横這いから突き上げるように薙ぎ払った。
「待ってたぜ、スカサハァァァァァ！」
「待たせたな、猿」
悟空は紅槍を如意棒で受け止めながら筋斗雲で姿勢を保つが、スカサハの一撃は悟空の急降下を殺しながら筋斗雲の軌道を完全に自身

の槍の勢いに向けさせた。悟空は紅槍の勢いに堪らず、身体を反らせて力を流しつつビルの屋上に降り立った。
「スカサハめ。俺っちの必殺技を完全に相殺しやがった。あれが回避不可能の朱槍、ゲイ・ボルグか？」
「うむ。ちと違う。これは彼奴にやった槍よりも一昔古い品でな。ただの棒切れみたいなものだ」
「あれで、棒切れかよ！影の国ってのは異星の帝国なのか？」
「心外だな。昔は私もか弱い小娘だ、最初の方は苦労させられた」
「逆を言えば、あの影の国で苦労しかしてないんだよな……だ、だが寧ろ、そっちの方がやる気が出るってもんだ」
悟空は筋斗雲を展開しスカサハに踏み込む。彼女が如意棒を受け止めると悟空は筋斗雲を浮かせ、スカサハの体を押し切る。スカサハと悟空は勢いそのままに更に背丈の高いビルの側部に文字通り突撃し、オフィスの壁を打ち破りながら通り抜け、スカサハを空中に投げ出しながら、悟空は如意棒を突き出しした。
「伸びろ、如意棒！」
突き出された如意棒は銃弾のように伸びてスカサハの腹を捉えた。
「ぐっ！」
「そのまま、伸び続けろ！」
スカサハは伸び続ける如意棒を握りながら体を反らせて宙返りして如意棒に乗り、棒に沿って悟空に向かう。
「そうでないとな！縮め、如意棒！」
スカサハは棒を蹴って空中に身を投げ、ルーンを駆使してビルの壁面に着地し、脚力で空中の悟空に接近する。悟空は如意棒を突き出しスカサハはルーンで空中に足場を作ってスレスレで避ける。
「甘いわ!!」
悟空が如意棒に魔力をかけた次の瞬間、如意棒の先端がスカサハの腰椎を劈きつつ、ビルの外壁を撃ち抜いてオフィスに突っ込んだ。
如意棒の先端だけを曲げて、縮めることで奇襲したのだ。
「スカサハ！」
スカサハが叩きつけられた衝撃で怯んだところに、悟空は一閃の閃

光となって、オフィスに畳み掛ける。悟空はビル一階分を粉砕しながらビルを貫通。支柱から壁までなにもかもが解体されたオフィスは、もはや一階分の空白以外の定をなさず、上層階が下層にだるま落としのごとく崩落した。
「くっ、やってくれるな」
　間一髪のところでスカサハは脱出して隣のビルに飛び移ったため、下敷きならずにすんだが、蓄積されたダメージは無視できず、ルーンの防御も限界近かった。だが悟空からしてみれば、スカサハのしぶとさは呆然とせざるを得なかった。
「アレでまだ生きてやがる……なんだ?アイツはミュータントなのか?」
『冗談を言っている余裕があるのなら、スカサハを早く倒せ』
　キャスターの思念がライダーの耳に入る。
「んなこと、わかってるが……アイツはトップサーヴァントの中でも最上位級だ。いくら俺っちが最強でも苦戦くらいはする」
『そんなことは百も承知だ。だからこそ、リソースの一割をそちらに割いている。ランサーの倍の魔力を渡しているだけの働きはしてくれ』
「あいよ。しっかし、どうにもならんな。ルーンの防御は限界だろうが……問題はあの朱槍……どのタイミングで使ってくる……」
　スカサハの宝具は正真正銘の一撃必殺の呪槍。神すら容易に葬る死の閃光だ。筋斗雲という地球最速に近い宝具を持っていたとしても因果を捻じ曲げる極みから逃げ切れるはずがない。
　だが対策は無いわけではない。
「考えてもキリがない。こうなりゃ、出たとこ勝負……しかないよなぁぁぁ!」
　悟空は最高度からスカサハのいる屋上に突進する。地上を崩落させ、クレーターを作ったあの一撃だ。
　彗星のような煌めきがビルに狙いを定める。
「やるしかあるまい。調子に乗った小僧に少々仕置せねばな!」
　スカサハは正面から迎え撃つ構えを取り、槍に魔力をかける。必中

にして必殺の呪槍ゲイ・ボルグが脈動し、先端から因果を歪める呪いが槍を包み込みながらスカサハは槍を構える。
「斉天大聖、お前を試してやろう！」
「来い、スカサハ！」
呪いの槍を携え、スカサハは跳躍した。
流星を撃ち抜かんとする六つの紅の彗星と敵味方問わず粉砕する流星が虚空で交じり合い、溶け合うように互いを飲み込む。
空間に敵を縫い付ける一撃を悟空は耐えていた。彼の持つ鎧は呪いに対する耐性を有している。それでもスカサハの技に悟空は押されていた。キャスターのバックアップがあったとしても、基盤となる自力が違う。
「舐めるなぁぁぁぁぁぁ！」
悟空は咆哮する。スカサハの絶技を目の前にしても、呪いの槍の強大な潮流を目にしても、彼の闘志は衰えない。
全ては「最強になる」の資格のために、あの泣き虫の高僧と約束した出まかせのようなハッタリを実現させるべく……
ーーーーうぇぇぇん、助けて悟空！
「ーーーああ、だから……絶対に負けてなるもんか！如意棒、筋斗雲、魔力を食い尽くせ!!光を超えろ！呪いを超えてみせろ！」
「……なっ！これは！」
流星は赤い彗星を飲み込む。スカサハは悟空に押し込まれる。
「見事だ、斉天大聖！だが……まだ甘い！」
ここに来てスカサハは微笑んだ。
「見せてみろ、選手としての意地を！私の本気でお相手いたそう！ーーーー第二宝具起動！」
悟空の後方に巨大な魔力の塊が生まれた。それらは門となり、万物を死の誘いを与える力となる。
「超えてみろ、勇者よ！真名解放『死溢るる魔境への門』！」
「なにィィ！」
筋斗雲の制動が揺らいだ。ブラックホールのように森羅万象を吸い込む死の門が悟空を筋斗雲ごと？み込もうとしている。

悟空は歯を食いしばりながら魔力を限界まで引き上げる。
ーーーアイツに笑われるなんて、ごめんだ。誓いを破ってなるものか！負けてたまるか！
走馬灯に見る懐かしき顔を思い出を胸に絶望への争いを開始した。
スカサハは悟空の筋斗雲が勢いを失うと、宝具を起動させたまま落下し、ルーンで足場を作り再度跳躍し発射態勢を取った。
「勇者よ！手向けとして受け取れ！」
「来る！」
スカサハの持つ極み。一撃必殺の死の真名がついに解禁される。
「刺し穿ち！突き穿つ！貫き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク・オルタナティブ）！」
空間を引き裂くほどの投射。赤い螺旋を描きながら迫り来る死の恐怖に悟空の背筋が凍る。槍の軌道上にいる生物には等しく死を与える魔槍の輝きは、虚無で感情の無い、無機質な力だった。
勝利に飢える渇望も、敗北に抗う度胸もない。ただ死を与える強大すぎる一撃。
だが、それで諦めるわけにはいかない。
ーーー狙うは心臓、謳うは必中。だからこそ、避けることも逃げ切ることもできない。ならば……やれることは一つだ！
死の門に争いながら態勢は辛うじて立て直し、最強を誓った斉天大聖は全力を込める。
「迎え討て、如意棒！」
如意棒は主人の命令に従い、光となった。宝具如意棒ができる最大を絶望をぶつける。
「うぉぉぉぉぉ！」
軋み合う宝具。絶望と意地のぶつかり合い。決して到達できる極みに存在する槍兵に敗北を叩きつけられるチャンスだというのに……
ーーーパリッ！
砕け散る音がした。
悟空の手元で何かが弾けた。

だが、認めない。決して見ない。
割れる、砕ける、何かが。呪槍の閃光が眼前で光を増していく。視界すべてが紅に染まる。
ーーーまだ、耐えられる。
「ーーー諦めるな、如意棒！」
叫んだ。
最後まで抗った。
しかし、全力全開全身全霊が目の前で塵となって緋色の閃光がついに流星を貫く。
緋色の光が弾けた。
流星は消滅した。
勝者は敗者の最後を見届ける、自分が与えた絶望に全力で争った者を。
敗者はぽっかりと空いた胸に手を当て、血まみれの傷口を拭って敗北を認めた。
「あー、負けちまった。負けちまったか……」
虚空を落ちながら、敗者の霊基が散る。
実体を保てぬ体は光となって消え、勇者が消える姿をスカサハは無表情で眺める。
「……次は絶対に勝ってやる」
その声は決して届かない。
喉は潰れ気道は沸き立つ血反吐で塞がった。
それでもいい。
あの高僧が泣かない世界を作れるのなら、自分が最強であると証明できるのであれば……
『覚悟しておけ、女王。俺っちは絶対に追いついてみせる』
次の瞬間、星屑は常夜の空に消え去った。

時を同じくして小太郎とアサシン、インフェルノはキャスターの工房を駆け抜けていた。幾重にも重なる傀儡兵の波を、時に押し抜け、

時にすり抜けながら最奥を目指す。
「ダ・ヴィンチ殿、マスターはこちらの方におられるのですね！」
『その通り。マスターが狙いなのは向こうも同じだからね。私の天才的な予想が正しければ、一番安全な場所、つまり最奥部にいるはずだ』
「しかし広いですね。遠目で見たときはこの数分の一の広さに感じましたが……」
「空間を歪曲させて数倍の広さに拡張しているんだろう。キャスターのやりそうなことだ」
もう数分以上走り通しだ。
地脈の中心はこの建物の地下にある。マスターを監禁し、キャスターが自分のテリトリーで圧倒的に優位に立てる場所はそこしかない。
「となると、階段の位置も偽装されているのでは？」
『その点は大丈夫。偽装されているのなら、その部分をしらみ潰しに探すだけさ。でも、今回は……』
「見てください！」
インフェルノが指差した先、つまり自分たちが向かっている方向に体育館のような広い空間があった。無論、ただの広場のはずがない。
ーーーそこにはランサーがいた。
紅の鎧を纏い、紅の槍を構えて仁王立ちする武士が待ち構えていた。三人が広場に差し掛かると、後方の通路が幾重にも遮蔽され、魔術的封印で完全に封じ込められる。
「逃げ場なしですか……」
「そんなこと、ここに来る前からわかっていることだ」
「ええ、後ろがダメなら前に突き進むだけです」
三人は迷うことなく広場に入った。
「ランサー、マスターはどこだ？」
アサシンが刀に手をかける。
「この先にいるが、生憎ここは遠さん。それに辛うじて私を倒したところで、ここは開かないようになっている。ここを破れるのはキャスターが用いる神性と同等以上の神性を有する者だけだ。そんなこと

は百も承知じゃないのか、アサシン？いや、抑止力のサーヴァント！」
『ーーー抑止力だって？』
　場の視線がアサシンに注がれる。アサシンはめんどくさそうにため息をついて……
「そんなことに何の意味がある。私は、私の誓いのためにここにいる。お前もそうじゃないのか？」
「それも私たちを裏切ってそこにいるがな？」
「ああ、わかっている。私は一度お前たちを裏切った。そして抑止力という馬鹿げた阿呆になった。だがそうでもしなければ、お前たちは止められない！」
『何を言っているんですか？あなたは主人のサーヴァントではないのですか？』
「正解であり、間違いだ。私は抑止力と一つ取引をした。それは『召喚される場所を一度だけ指定する見返りに一度だけ抑止力として働くことだ』」
「どういうことですか？」
「分からんか？ならもっと単順に言ってやる。私は藤丸立香に呼ばれる代わりに抑止力として働くことを承知したんだ」
『どうして、そんなことを。抑止力なんて事後処理をしたり事前に危険の芽を潰すだけの役目になったんだ？』
「それはアイツに会ってから説明する。これは私と彼の問題でもある。この落とし前は自分でつけなければならない」
　アサシンは足を前に踏み出し、ランサーを見据える。小太郎も追従しようとしたが、インフェルノがなにかを察して彼の行く手を塞いだ。言葉を交わさなくとも彼女の真剣な眼差しで、言いたいことがわかった小太郎はその場でクナイを下ろした。
「一人で戦うのか？」
「そうだ。お前は私が倒す。こればかりは他人に譲れん、私だけの戦いだ」
　スーツの娘武者は刀を抜いた。凛とした顔に殺気が宿り、切っ先が敵と重なる。

「そういうのであれば、止める義理もない……」
ランサーは槍を構えた。
「今度こそ決着をつける！勝負だ、ランサー！」
「来い、アサシン！」
ーーーーガギンッ！
高速の剣線がすれ違った。
ぶつかり合う刃と刃。それを口火に負けられない攻防が始まった。
アサシンは持ち前の速度を駆使してランサーの死角を攻めながら距離を詰め、対してランサーは槍の間合いの広さを十二分に使いながらアサシンを翻弄し寄せ付けない。
突き出される槍を紙一重で避け続ける、アサシン。
攻め入る隙を与えず隙も作らない、ランサー。
お互いに出方を理解しているような先読みの先を見た動きに立会人は魅入られる。
アサシンの速度はランサーに優っているがランサーに見切られていた。ランサーの槍さばきはアサシンを翻弄していたが決定打にはならない。
そんな戦いが続いた数分後、両者は距離を取った。アサシンは攻め方を変えるため、ランサーはアサシンの間合いから遠のくため、未だ互いの闘志はまだ消えていない。
「どうしたアサシン、その程度か？」
「その言葉そのまま返すぞ、ランサー。日ノ本一の武士の名が泣くぞ？」
「日ノ本一の武士？」
アサシンの一言にインフェルノと小太郎がハッとした。
この日本が世界一長く続いている国でも、最も優秀な武士と言えば一人しかいない。その人物は大阪冬の陣で獅子奮迅の活躍をし、夏の陣では徳川軍の本陣に斬り込み、あわや敗北寸前まで追い込んだとされる赤備えの勇将。後世に語り継がれる、その鬼神の名は……
「真田信繁……豊臣を最後まで守り続けた徳川の天敵の一人……」
「違うな。コイツはそんな大層な名前じゃない。もっと庶民的で不定

形な存在だ。」
　アサシンは刀を突き出した。
「紹介しよう。彼こそ、後世に創造され語り継がれ鋳造された願望のステンドガラス、真田十二勇士が頭目、真名『真田幸村』だ！」

幾度見た光景だ。
人生最後に鬼神のごとく戦場を駆け抜けた記憶だ。
だが――――それは、不変ではなかった。
定説が日々変わり続けるように私もまた変わる。
「私」は誰でもない。誰にもなることができない。
人々が願い続け、創り続け、紡ぎ続けるたびに、「私」はあらゆる存在に変わるのだ。
民衆が「男」と定義する限り私は「男」になる。
民衆が「女」と定義するなら、私は「女」になる。
もとより私は「信繁」ではなく「幸村」なのだ。
「こいつは無辜の怪物……いや、元から存在が書き換わる存在だ」
アサシンは相手の心を突き刀（言葉）で刺す。
「無辜の怪物は存在が歪められる。しかし、コイツは真田信繁の存在が歪められて生まれた、真田幸村ではない。無辜の怪物そのもの、人々の願いによって形作られて『創作』の結晶。召喚されるたびに召喚者のパーソナリティによってある程度存在が操作される特異性を持った『創造の外殻』でチューニングされた『誰でもない真田幸村』がコイツの正体だ！」
「――――御託は済んだか、暗殺者！」
幸村の槍が火炎を纏い、ランサーの魔力が高まる。アサシンを殺さんと切っ先が向けられる。
「ああ、十分だ」
「なら、死ねッ！」
火炎を纏った朱槍がアサシンに投擲され、アサシンはひらりと避ける。その間にランサーは急接近し刀でアサシンを袈裟懸けに一閃する。
「……ッ！」

アサシンは体を限界まで反り、ランサーの一閃を紙一重で避けたが、ランサーは刃を返しながら即座に切り上げる。だがこれもアサシンをとらえることなく空を裂いた。
アサシンは左足を軸にして態勢を戻し、切り上げで手薄になった横腹に切り込む。
「――取った！」
アサシンの切り込みは見事だった。伸び切った姿勢で隙だらけになった弱点をカバーするのはサーヴァントといえど不可能だ。しかし彼女が聞いたのは肉が断ち切れる血なまぐさい音ではなく、ゴドンッと鈍い音だった。
「……え？」
アサシンは目を疑った。
切り込んだはずの刀身がランサーの鎧の直前で止まっていた。
そして、ランサーはそのわずかな時間を見過ごすことなく、アサシンに上段からの振り抜きをたたきつけた。
「――ッぐ！」
アサシンは持ち前の速度を持って距離を取ろうとしたが間に合わずに袈裟懸けに胴体を裂かれた。しかしわずかに回避が上回ったのか、致命傷にならずまた距離を取られてしまった。
「惜しいな。もう少しで、両断できたんだが……」
スーツに血が染み込みジワリと傷が広がる。ぽたぽたと滴る大きな血の粒と顔色の悪さがダメージの大きさを物語っている。痛みに顔を歪めながらも、決して怖気づくことかなく、アサシンの切っ先は常にランサーの心臓をとらえている。
「躱せないならわざと受けることでいなしたのか？　相変わらず避け方だけは見事だ。だが、こちらにも三騎士というプライドとキャスターの切り札という自負がある」
「物理保護のギフト……　キャスターの仕業か……」
「正解。この鎧には生半可な武具では傷つかないように障壁を張ってある。宝具級の一撃ならまだしも鈍（なまく）ら刀程度では掠りもしない」

「切り札というのは『キャスターのギフトを受け入れられる』から……
　だけではないな、お前の宝具も理由なんだろう？」
「わかっているのならどうして一人で戦おうとする？　その調子だと刀を振るうだけでも一苦労の筈。だというのに助けを求めるどころか援護も要求せずに私に立ちはだかった。そこまでして単騎掛けにこだわる必要もないだろ？」
「当然。お前の狙いはそれだ、幸村。お前の宝具は強い敵と対峙するほど効果を増す。集団戦になればなおさらお前は強化される。だから『わざわざ弱い』私一人が前に出たんだ」
「だが、それも意味をなさない。お前は既にまともに戦える状態じゃない」
　アサシンの闘志は消えてなくとも、脚は震え、顔色も蒼く、何より袈裟懸けの傷のダメージが大きく、満身創痍でなくとも重傷なのは変わりない。
「ああ、そんなの分かっている」
　承知の上でアサシンは構え直す。
「これはケジメだ、幸村。私はためらった、お前たちを正しいと心の奥底で肯定して見逃してしまった。だから貴様たち二人との決着は私がつける。そのために、私はここに来たんだ、抑止力の使いとして……」
「だったら、どうする？」
　――メラメラとした炎が幸村の全身を包む。
「お前を倒す……　我が、秘剣にて貴様を仕留める！」
　――アサシンの、突風にも似た魔力の流れがランサーを通り抜ける。
「まだ余力を残していたか？」
「いや、かなり切迫している。予定ではこの技は最後の最後まで取っておくはずだった。この戦いはキャスターも観戦しているだろうから、切り札は残しておくべきだと思った……　だがそうしてもいられない。これ以上、時間を稼がれるのも……　馬鹿げている！」
　アサシンは刀を握りしめた。

傷から響く鋭い痛みをこらえ、刀の切先をランサーに向ける。
ランサーは全力の魔力を身に込める。
距離は約三十メートル前後。サーヴァントの疾走であればあって無いような間隔。
ランサーはアサシンに狙いを定め、槍を構えると脚部に力を籠める。
「行くぞ、アサシン！」
武士は、踏み出す。
同時に彼の纏った魔力すべてが烈火となり、彼の体を紅蓮に染め上げる。
「真名開放ッ！」
――その炎は獄炎のような恐ろしさではなく、人々の描いた幸村という願いを形どったかのような清廉で熱く燃え盛る猛々しい不沈の焔であった。まるで、真田幸村という創作でしかなかった伝承がそのまま自身の存在の証明として顕現した。
まさに、戦場に勝利を穿つ烈火の武士である。
「――　鬼神合一・火炎車！」
これこそ幸村の宝具である。無辜の怪物により、存在が歪められたことで獲得に至った。真田幸村という存在を描いた人々によって願い、形作られた自分という存在の発露と終着点が彼の宝具である。無論、これを受ければサーヴァントは一撃で粉みじんになる。回避も可能であろうが、距離の関係上近すぎてできない。アサシンであれば最低限の動きと持ち前の速度で、直撃は避けられるだろうが、どれだけ最良で見積もっても致命傷を免れない。
「――ふぅ……」
アサシンは軽く息を吐き、瞑目しほどなく開眼。
心を静めながら、眼前の獄炎を直視し、彼女は迎え撃つ姿勢を変えず、じっと彼を見据える。
ランサーは存在が不確かも、その実力は計り知れない。
ランサーとの実力差はステータス、技、宝具どれをとってもアサシンが勝る部分がほとんどないと素人目にもわかるほどの圧倒的だ。

加えて、彼には防御強化の術が施され刃を身に届かせることすら怪しかった。
だが、そんな彼女にも唯一、英雄真田幸村に勝てる見込みがある方法がある。すべて劣ったとしても自分を単なる人斬りと下卑されたとしても、それだけは勝てる自信がある。
アサシンは切っ先をランサーの胸に狙いを定める。しかし彼の一撃がアサシンの懐を抉るまで僅かな時間しかない。だがそれでもアサシンにとっては十分すぎる時間だった。
――踏み出す足は左、踏み込む距離は一歩。
彼女は最小限の動きを持って業火を纏う仇敵に刃を突き出し、幸村の決死の一撃を迎い打つ。
両者の交錯は一瞬、宝具を纏ったランサーの突撃は彼女をかすめた後に停止し、アサシンは刃を突き出した状態で動かない。サーヴァントの眼をもってしても何が起きたのか把握できな程短く静かだった。どちらが勝ったのか、外野の小太郎とインフェルノは両者の動きを注意深く見た。
一撃同士の交わりの数秒が永遠と感じていた時……
「ぶッ……」
アサシンは吐血し、刀を杖の代わりにしてやっとのことで姿勢を保った。
「残念です、まさかこれほどとは……」
アサシンが振り向くと、そこには心臓のあった部分に風穴をあけられ消滅しかけた幸村がいた。
「キャスターのギフトごと私を貫いたのか？　いや、失敬。そうでもしないと私は殺せませんからね……」
「で、どうする？　……戦闘続行スキルがあるんだろ？」
アサシンは深刻なダメージでガタガタ震える体を起こして、血を滴らせながらもランサーを睨め付けた。
「ああ、だがそこでお前を倒したところで、控えている二人を倒す前に自壊する。それに最後に聞きたいこともある」
「なんだ？」

「お前は悲しくないのか？　私たちの願いは知っているはずだ。だったら賛同してもいいはずだ。それなのにどうして、お前はそれを捨てられる？」
　アサシンはランサーから視線をそらしたが、アサシンは一息ついて真っ直ぐにランサーに目を向けた。
「それは、それが皆の願いだからだ。一連の事態はお前たちが原因だ。すべてたった一人のためでも、それが本人の願いであるとは限らない。私はその人に『正してほしい』と託された。だからお前たちの前に立った。それだけだ」
「なるほど、お前も結局は私たちと同じだったわけだ……　先に聞くといい、アサシン。お前ならあの扉も両断できよう」
　ランサーの形が消える。光の粒となって消えゆく体を哀の感情を浮かべながら……
「そうだ。これを持って行け」
　ランサーはアサシンに一本の小刀を投げ、アサシンは受け取る。
　朱色の漆塗りで細工の凝った業物だ。
「私はな、心の奥では今でも迷っていた。主の正しさは、私の正しさと同義なのかと思えなかった。だから私は天運に身を委ねた。いつか全力で戦っていれば、正しい結末にたどり着けるだろうと見切り発車して……」
「らしくないな、ディルムットと同じタイプの生真面目なお前が」
「だから負けたのかもな。だが最後の結末までは見てみたい」
「分かった、これは大切にしよう」
「無論だ。これは命よりも大切な、私の存在した意味そのものなのだから……」
　その言葉を最後にランサーは消滅した。
　その直後、アサシンは倒れた。霊核は損傷してないがそれ以外の場所が半壊しているためだ。ぶっちゃけ立てていることがおかしい。
「大丈夫ですか？」
　小太郎たちがアサシンに応急処置を行った。
（閑話休題）

ライダーを下したスカサハが合流した。アサシンの傷はスカサハのルーンで回復を促し、一旦の休憩を挟んだ。その中で話題になったのは、自分たちの行き先を阻む扉だった。
「おお、これはかなり重厚だね」
「重厚というのなら私の宝具でどうにかなりますか？」
「いや、インフェルノの宝具でどうにかなる代物ではない。この場合の重厚さというのは『神秘の高さ』の事さ。この壁は神性が宿っている。それも『この壁以下の神秘を無力化する』効果を持っている。これを破壊するためには『これ以上の神秘で破壊する』もしくは『神秘を纏っていない一撃で破壊する』の二択しかない。魔力を伴わない純粋な破壊力だね。でもそう簡単には壊せない。この壁自体、核シェルターのレベルをはるかに超える強度を持っているから、破壊は困難だろうね。無論、これ以外の壁も床もすべて同様の作りになっているから迂回も不可能だ」
「ではどうやって……　スカサハの神殺しの力ではどうですか？」
「難しいな。破壊出来ても私の魔力の方が尽きるレベルだ。これをするくらいならチクチク壁を削った方が楽だ」
皆が悩んでいるとアサシンが前に躍り出た。
「……どけ、任せろ」と一言だけ言って扉に向け刀を突き立てた。
その瞬間に起きた光景に皆、目を疑った。
アサシンの一刀が、扉を貫いた。そのまま横に薙ぎると扉は水平に真っ二つに倒れ、先の通路が顔を出した。
「ウソ……」
ダ・ヴィンチちゃんを含め、ほとんどが絶句した。スカサハは「このくらいはできるだろう」と涼しい顔をしている。
「どうした？　先に行かないのか？」
絶句した皆をしり目にスカサハとアサシンは先に進んだ。一拍遅れて小太郎たちも先に向かった。
門を抜けた先は通路だった。真っ白な内装に飾りっ気のない廊下だ。だがサーヴァントたちは足を止めた。
「この魔力量は……」

ダ・ヴィンチちゃんからの連絡が入る。
『うん、計測してみたが、おそらく神代レベルを超える濃度だね。感受性の豊かな人でなくても死ぬくらいには濃い。サーヴァントでなければ通れない』
「そうか、なら問題ない」
アサシンは躊躇なく踏み出した。小太郎が罠があるかもしれないと止めに入ったが、アサシンは無視して先に進んだ。サーヴァントたちもそれに追従する。
『そろそろ全てを聞かせてもらってもいい頃じゃないのか？この廊下の先は長い、時間潰しに聞かせてはくれないか？先ほどの対人魔剣を含めてね』
アサシンは目を細めてダ・ヴィンチちゃんを睨んだが、程なくため息して……
「私はお前を信頼していない。マスターに属する者としての敬意はあるが、お前を信頼するほど私は人ができていない」
「それは残念だ。なら勝手に答え合わせさせてもらうよ……」
ダ・ヴィンチちゃんは朗々と語り始めた。
「君は抑止力のサーヴァントなのは、この事象とくに敵側のサーヴァントと繋がりが深く、彼らに対してのカウンターになる力を持っていたからだ。そのカウンターというのが、君の対人魔剣の力だね」
「ーーーーーー」
「でも君の魔剣は神性に対する特効を持つわけじゃない。それよりももっと埒外な……殺人に特化した魔剣だ。生前、相当な修羅場をくぐったと見える」
「ーーーダ・ヴィンチ殿……そのアサシンの目が……」
「おっと、気に障ったか？でも実際そうなのだろ？」
ダ・ヴィンチちゃんの歯に着せぬ言い方に、アサシンは歩を早めた。無言の反発だった。
「ホームズの真似事はするべきじゃないか。だがまぁ一応、あのサーヴァントは無害そうだから信用してもいいと思うよ」
「だといいのですが……」

永遠と続く階段を歩き続ける。次第に濃くなる魔力の流れを最奥から感じながらアサシンたちは先を見つめた。
歩き続けてから数十分。階段の先に光が見えた。
自然とアサシンの足が速くなる。ほかのサーヴァントも連れられて下っていく。小太郎はアサシンの傷を心配していたが、彼女の顔色は相変わらず険しいが傷は完治したようだ。出血で腹を抑えていた手は今ではぶらりと下ろしている。この調子であればほぼ万全な状態で戦いに臨める。
光が大きくなる。感じたことのない巨大な魔力の突風が肌に当たり、精神的に押し潰されそうな魔力が吹き荒れるなかを一歩一歩下っていく。
ーーーそして、視界がひらけた。
そこにあったのは、ドームだった。
今自分たちはそのドームの縁に備え付けられた階段にいた。
眼下には見慣れた少年の姿が一際大きい、古代遺跡の様相のある祭壇に供えられていた。祭壇の四方に松明が置かれ、傍に身の丈以上もある羽織を着た青年が呟くように術を施している。
あの若者はサーヴァントだ。
アサシンが刀を抜く。臨戦態勢をとるカルデア側に対して、若者は振り向くことなく告げた。
「降りてくるといい。手出しはしない。君たちがマスターこと私を倒したいのであるのなら、構わないがね」
アサシンは階段を下った。他のサーヴァントは様子を見る。
「キャスター。やっと会えた」
「あー、その声はアサシンか？まさかこんな世界の最果てで相見えるなんて、君は相当に不幸のようだ」
「言ってろ、キャスター。お前には山ほど言いたいことがあるが、それではラチがあかない。だから簡潔に言うぞ。さっさとこの茶番劇を閉幕しろ。観客もすでに飽き飽きしている。貴様は今すぐ劇場の戸を開け。そしてマスターを解放して全てを終わらせろ」
「終わらせる？観客は飽き飽きしている？戯言は寝て言え。寛大で器

の大きな朕でも、うっかり羽虫を消してしまう粗相をして醜態を晒すのは好かん」
「その羽虫というのは、私のことか？」
「知らん。貴様がそう思うのであれば、そうなのだろうな？」
「なんだ顔見知りのよしみで挑発は程々にしてやろうかと思ったが、よほど死にたいらしい」
「アサシン風情がいい気になるなよ。気配遮断というアドバンテージもない貴様に勝利する可能性は一分たりともない」
　ここでキャスターはアサシン以外のサーヴァントに目を向けた。
「カルデアのサーヴァントよ、私の顔見知りが失礼をした。コイツは礼儀も知らない愚か者だからな」
　と言ってキャスターは一礼した。
「ようこそ、朕が城へ。朕が真名は、中華大陸初の皇帝、始皇帝と申します。以後、お見知り置きを」
　――始皇帝
　これを聞いて最初に浮かぶのは、中国の最初の皇帝であるという偉業であろう。他にも傍若無人の語源にもなった暗殺者荊軻の標的になったり、万里の長城を整備したりと数々の逸話がある皇帝だ。
『始皇帝？なぜ、そのような人が、マスターを？』
「それには深い理由があるのですよ、ダ・ヴィンチ女史」
『っ!!』
「まずはその疑問から解くとしよう。そもそもここはどこなかのかというと、日本の首都東京だ。今はというと戦いやら魔術の施工のためにもう色々とグチャグチャになっているから、その面影はほとんどなくなってしまった。付け加えて、ここは君たちの東京ではない。東京という下地を使って作った特異点、私たちは『高天ヶ原』と呼称しているがね」
『高天ヶ原』とは日本という島国が作られるまえに天上に存在したとされる土地である。天岩戸の件舞台であり、天照大御神などの天津神が住んでいるとされている。
「賢いダ・ヴィンチ女史に加えて名探偵殿がおられるのであれば、わか

るはずだ。ここがどうして『高天ヶ原』なのか？なぜ、朕がマスターを求めたのか？」
『まさか、いや、それを本気でやろうとしているのか！』
ダ・ヴィンチちゃんから嬉の感情が消えた。そして彼、始皇帝の狂気を理解できてしまった。
「ダ・ヴィンチちゃんどういうことですか？始皇帝は何をしようとしているんですか？」
画面外からマシュの声に皇帝はニヤリと笑う。
「その声はシールダーだね。安心して欲しい。儀式が終わればマスターを傷一つなく返そう。元から朕はマスターを殺すつもりはない。まぁ、致命傷ではないが傷だらけにしてしまったのは謝罪しよう」
「え？ええ？先輩を返してくれるんですか？」
「ああ。朕は皇帝だ。嘘はつかない。この儀式が終われば、私は退去するつもりだし、この特異点も消滅させる」
「な、なら、どうしてサーヴァントを使ってここを守っているんですか？」
「それはね、マシュ……。この世は残酷だからさ。私の抱いた願いはただ一つ。一人を救うことだ。聖杯探索で得た絆を無にしないために、結果を残して明日への道を得るために、私はここにいるんだ」
「なるほど。抑止力へのカウンターということか？」
「ホームズさん。カウンターって？抑止力ってどういうことですか？」
「要するに、彼がやろうとしているのは抑止力が働く案件であり、あのサーヴァントたちはそれを抑止するための存在ということだ」
「そうさ、名探偵。私は抑止力から守らなくてはならないのさ。彼を、このマスターを」
と言って始皇帝は手を叩く。
それは術の始まりを意味しているかに見えたが全く違う。
空中に描かられた術式が圧縮された空気が開放され、まるでプラネタリウムのように天蓋を光の粒が覆った。粒一つ一つが術式の機転であり、粒の形も四角、三角、円、帯など魔術系統が違うモノもごちゃ

混ぜにした複合式が幾重にも連結する。
「これは……まさか脳細胞か？」
「ほう、ダ・ヴィンチ女史、君にはわかるか？　そうさ、この術は朕の作った【脳細胞】を参考にした自己増殖、自己発展の術式さ。必要なのは時間とそれを管理する頭脳だけ。術式の構築は術式そのものがする、成長する魔術と言えばわかるだろう」
「成長する術式！　そんなものが？」
「ああ、スーパーコンピューターを参考にしたものだ。だが知性はない。この術がやっているのは朕の紡いだ術の最適化と進化だけだ」
「だとしても、この術式を回すだけの魔力はいったいどこから仕入れている！」
「世界すべてからさ。この世界のすべて、全ての山、全ての海、全ての陸からあぶれだす魔力をここに貯蔵したのさ。今でも魔力は増大し続けているのは、それが理由だ」
「世界すべてだと？」
「ああ、世界すべてさ。そうだよな、アサシン」
「私に言わせたいのか、始皇帝？」
「いや、ただ、真実を言っていないのが不思議だったのさ。そうかなら、いいネタバラシだ。貴様たちに教えてやろう。この特異点の正体を……」
始皇帝は不敵な笑みを浮かべながら言った。その一言に戦慄するであろうという確信を持った。姑息な笑みだ。
――ここは平行世界、人理の崩壊が達成された世界だ。

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第九章

ゲーティアの事件が解決されてから数か月の世界。国連や魔術組織がカルデアに介入をし始めたころ。とある事件が起きた。

カルデアの資源の一部が外部に流出した。

国連などの組織がカルデアの資源を「解析」という名目のもとに外に流れた結果、それを利用して新しいものがつくられることとなった。それは「疑似聖杯」と呼ばれる。聖杯の偽物である。万能の願望器でもなければ特異点の原因でもない。ただの膨大な魔力の貯蔵庫であり、それだけの性能を追求しただけの品物だった。だがそれだけに用途は様々だった。特に兵器転用の速度は異常だった。国連理事国に一つずつ渡された聖杯は兵器となり、破壊力を肥大化させた聖杯はもはや聖杯爆弾というものとなった。これにより兵器転用できる聖杯を大量に保有していたカルデアは脅威となって即座に解体された。

藤丸立夏は「最重対象」として国連に就職という名の「監視」をされる立場となった。カルデアという防衛組織がなくなったことで、人理編纂を乗り切ることができなくなった世界は漂白されることとなり敗北した。

「皇帝陛下……いままでありがとう」

皇帝は点滴や機械が所狭しと並べられた病室のベッドに寝転んでいる主人の手を握る。主人は体が傷だらけで包帯だらけにされており血が滲んで、時折顔を歪ませながら唸っていた。数々の戦いを切り抜けたその体は誰から見ても既に限界を迎えていた。年頃の人間が、平和に過ごせるはずだった人間が「最終戦争」に挑みながら、傷つき、涙を流し、救えなかった民衆の事を他人に罵られながらも立ち上がり続けた世界の救済者は、今はもう動けずにいた。

「痛み止めが切れたようですね、看護師に投与を頼んできます」

皇帝は一礼して病室を出る。

「泣いてもいいんだぞ」
　帯刀した女性が廊下の壁にもたれている。
「泣けわけがないだろ、アサシン。お前如きが私の涙を見る権利があるとでも？」
「それだけ気丈に振る舞えるのであるのなら問題ないな」
　皇帝は暗殺者に踵を向けた。
「これで終わらせるものか……　世界が救えないのなら、マスターだけでも救って見せる」
　それから皇帝は儀式を始めた。
　――とまあ、こういうわけだ。
「世界は滅びを迎え、選定されるだけの未来が待っていた。マスターはボロボロで満足に生きることもできないし、カルデアという組織はもうこの世にない。だが幸運だったのは解体の後でも緊急事態ということでサーヴァントの召喚を一時的に許可されていたことと、朕という絶対的な存在が小癪にも地べたを這ってまでも、この世界の維持を続けるだけの力を蓄えていたということだ。漂白され、世界が消滅する際に世界の消滅から守る設備を作り上げ、この『
　高天原』を拠点とした。ざっくりとした説明だが理解できたかな？」
「じゃあ、新宿を囲っていたあのバレルのような建物は……」
「あれは悪のカリスマがデザインした長城さ。世界が消滅する際に発生する魔力リソースを利用して、存在強度を維持することで、この「新宿しかない世界」を守っている。あれが破壊されるもしくは劣化してしまうと、この世界はいともたやすく消えてなくなる。だが、そこにサーヴァントは入れない。入ることができるのは朕が許可した存在だけだ」
「まて、そんなバカげたこと世界というシステムが許さないはずだ。この世界が維持できるとは到底思えない……」
「だができた。朕の編み出した独自体系の魔術『封禅』は神の威光を経由して発動させる術だ。世界の理との凌ぎあいなら有利とまではいかなくとも拮抗させることならできる。これが朕の能力だ」

「まさか、ここまでデタラメなんて……」
「デタラメか……　私一人仕留められないお前がよく言えたものだ」
「ランサーか？　あれは迷いがあった。門番としては百点だが、従者としては及第点だが、そこまで良くはなかった。だが、それでもよかった。最悪時間さえ稼げればよかった」
　アサシンは階段を下りた。アサシンから祭壇までの距離は約２００メートル。
「結局、貴様と朕の意思は交わらないというわけか？」
「いつからお前は私と同じ立場だと思っていたんだ？」
「カルデアが解体され、我ら数騎が研究用として残された時からだ。貴様は我らと心を同じくする同士だった。如何なる時もマスターを守り、マスターの笑顔に支えられてきたのではないのか？」
「無論だ。貴様はマスターを、藤丸立香を本気で守ろうとしていた。だが私が本当に守りたかったのは、あいつの意思だ。生前の私は無様にも生き残った。生き残ることで、あいつらを裏切ったのだと思っていた。だがそれは違うとあの日々で気付かされた。私が生き残ったのではない、あいつらの方が私を生かした。降伏してでも次の世代を産む私に意思を託した。歴史に埋もれた烈士の意思を後世に残すために……私の正義とは、藤丸立香を生き残らせることではない。人の死は避けられない。避けることのできない真理だ。それを捻じ曲げることも、もう一つの世界の同一存在を排除して成り代わられても変わらない。お前はお前のエゴに取り憑かれている。藤丸立香は生を全うした。アイツは……あとを頼むと後世に、汎人類に全てを託すために」
　忘れるものか。女の藤丸立香が死ぬ直前に私に言った言葉を。
　――私はここまでだから、残りは託そうと思う。呪いのような言葉だけど、言うね。並行世界の私に会ったら、その目的に協力して。私の意思はあなたに託したよ……
「全くひどく優しい呪詛だ。残酷すぎるほどに真っ白な呪いなど聞いたこともなかったが、なるほど。存外に心地よいものだ」
　アサシンの身体から光が発せられる。魔力の渦に身を包みながら

脈動するアサシンのスーツは瞬時に解かれ、着物に変わっていく。青いダンダラ模様の羽織、履き慣れた草履、ポニーテールはリボンにまとめられ、長く白いハチマキが彼女の真名を物語っていた。
「あれ、は……」
霊基再臨いや、真名を開放した。抑えていた魔力が溢れ、姿を変えるほどの力があった。魔力源はマスターだけではない。世界の守護者としての力が彼女に皇帝を打ち倒す真理を授けた。
「私の真名を今こそ、告げよう」
――真名、斎藤一。新撰組最優の武士、斎藤一の影法師が、私の真名だ。
斎藤一という名前は所謂、コンビ名というものだ。本来の斎藤一は二人存在した。一人は知を、一人は武を司り、要所でその存在を使い分けた。その一方が彼女である。
本来は無名の少女だった彼女は、侍として世界を変える希望を持ち、武士ではないのに武を学んだ。女性が武を学ぶというのは昔の時代でも少なからずあったが、それはあくまで例外にすぎない。一般の百姓の小娘が武士になろうとするなど、この時代ではありえない。下手をすれば打ち首もあり得る所業だった。
それでも日本を変えるという夢だけを抱えた少女は新撰組の戸を叩いた。それから武術を叩き込まれるうちにメキメキと実力を高めた彼女は一人の男に目をつけられた。彼は武には秀でなかったものの、知には秀でていた。対して少女は武には秀でていたが知には秀でていなかった。故に二人は協力することになった。二人で一人、お互いに欠けた部分を補い合う存在として乱世を駆け抜けることで日本を変えようとした。
「息巻いたはいいが、結果はあの通り、何も変えられることなく歴史の荒波に沈んだ。でも、あの時、あの時間にたしかに私の足跡はあった。私がいたという証明がある。だから、世界を変えられなくても……」
共に歩んだ者たちに恥じない生き方をしたい。何も変えられなかった自分でも、何か役に立てることがあったのなら……
「と思ってカルデアに召喚されてから、私とマスターはずっと世界を

旅していた。始皇帝、お前も傍らに添えながらな」
「あー、あの時はマスターと共に世界を救うことに邁進していた。あの一時はずっとこの記憶のなかにあってほしいと思った」
「だがお前はそれ以上を望んだ。世界が剪定されて消滅するとわかっても、マスターの命が尽きたとしてもお前は彼女との日々を思い描き続け、停滞している」
「なんだ、言いたいのはその程度のことか？いいか、暗殺者。マスターはゲーティアから世界を救った。報酬もなく与えられる歓声は一つとしてない。マスターはそれでもよかったのだろう。だが朕は許さん。きっとマスターはこれを望んではいないのかも知れないが、それでも……朕はもう一度……マスターと世界を歩んでみたいのだ！エゴと罵るがいい！だがそれでもこれだけ美しい人をみすみす消滅させることはさせん！」
　その一言を皮切りに皇帝の上空、寝かされた藤丸立香の真上に光体が現れた。そこに眼を凝らすと薄っすらだが、人の姿が見えた。
「マ、マスター！なぜ！きえたのではないのか！」
「いや、消えてはない。生命維持はこの世界が果てる瞬間まで続けていた。お前が退去してからずっとだ。そして、私はキャスターだぞ？人を蘇生させる術など数十は思いつく朕に、生命維持など容易きことよ」
「……そこまでしてか？」
「ああ、そうだ。あとは男のマスターの肉体情報を彼女に移植するだけだ。そうすればマスターは蘇る」
「だが男の方はどうなんだ！お前の言い分が正しいのなら、アイツは……消滅するんだぞ！」
「そうさ。この世界のマスターをあっちの世界のマスターと融合させて、置き換える。そうすればいかに世界の修正力でも抑えられまい」
「でもそもそも成功するとは限らない。失敗すれば両方とも死ぬことだって」
「いい知見だ、ダ・ヴィンチ女史。しかし問題ない。そのためのこの術である。世界が消滅する際に発生した無尽蔵の魔力を使い。第三魔

法の更なる先をここに作り上げる！前人未到の極地。根源よりも深き深淵の先にある秘術を私は成し遂げてみせる！」
「いくらなんでも危険すぎる！この魔力であれだけの規模の魔術を起動させたら、この空間も持つかわからないし、そもそも魔力の制御が少しでも狂えば、この特異点というか並行世界の欠片ごと吹き飛ぶぞ！みんな、あの皇帝を止めるんだ！」
カルデアのサーヴァントたちが一斉に始皇帝に襲いかかる。
斎藤一は一息はいて平晴眼の構えを取った。
「私がさせない。終ぞ世界を救えなかった敗者だが、かつての仲間が無謀をするというのであるのなら……これ以上の勝手は許さん」
「止めたいのならかかってくるがいい、歴史の敗者よ、カルデアの者共よ！」
「新撰組三番隊隊長、斎藤一！押して参る！」
決戦場に爆音が響き渡る。祭壇には術式が全くことなる数十の透明な障壁により防御され、内側に入ることができなかった。かといって外側にいるのなら、空間に描かれた術式から放たれる光弾の雨にさらされる。
サーヴァントであれば光弾は弾けるが、連射速度が桁違いだった。小太郎は術を組む隙ができず、インフェルノは弓を射れずに刀で防戦し、スカサハは防御のなかに攻撃を交えるがことごとく障壁に吹き飛ばされる。
「ハァッ！」
そのなかでもアサシンは防御を固めるしか動作が取れないように入念に攻撃が加えられていた。絨毯爆撃のごとき光弾のなかをアサシンは持ち前の瞬足で翻弄するが一歩のところで攻撃に転じられない。
「アサシン、朕の封禅陣は神性を有している。故にスカサハを警戒していると思ったのだろうが、甘かったな。スカサハの神殺しなど朕の防壁の前では意味をなさない。この防壁はそもそも、そのようなサーヴァントのために編み上げたものだ。あらゆる攻撃は朕の防壁により防がれる。故に警戒すべきは貴様の魔剣のみだ！」

「くそッ……」
高い神性がなければ破壊されない扉を貫いた斎藤一の魔剣を皇帝は見逃さなかった。自分の防壁を貫くとしたら彼女の魔剣がもっとも可能性が高いと算段をつけ、光弾で封じ込めた。
「縮地ならここは突破できよう。しかしそれは貴様の命も終わると心得ろ！」
「舐めるな！」
光弾乱れる戦場を縦横無尽に駆け巡るアサシンだが光弾を避けるだけで精一杯であった。刀で弾いても受け流しても近づくことは至難の業である。
上空に展開する術式は五基。その一つでも落とせるのなら、突破の可能性ができる。だが攻撃に転じられるのはスカサハのみ。彼女も術式を狙ってはいるが、近くほど容赦のない攻撃が襲い、後ろに押されてしまう。
トップサーヴァントの一人であるスカサハでも突破しきれないこのなかをくぐり抜けるなどできようはずもなかった。
二人の藤丸の融合の儀式が刻一刻と迫っていた。

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　第十章

――起きて……
どこからか声がした。
――目を開けて……
若い女性の声だ。
――こっちを見て……
しかしどことなく聞き覚えがある。
彼が眼を覚ますと、そこは真っ暗な空間だった。自分の輪郭と姿だけが光る漆黒の空間。まるで宇宙のなかった時の虚無の空間のようだ。すると突然、眼前に一筋の光が現れた。目が眩むほどの鋭い閃光に目を覆う。次第に光は収束していくと人の形へと変わりながら確かな質感のある肌と見慣れたカルデアの服を着た一人の少女の姿となって彼の前に現れた。
「あなたは誰？」
「私はあなたよ、藤丸立香」
彼は驚かなかった。それほどにすんなり受け入れられるほど、彼女からは藤丸立香の気配がした。そして自分も藤丸立香であるという確信があった。自分が二人いるという異常な状態であろうとも藤丸立香の精神が揺らぐことはなく自然の出来事として心の中で完結させられた。
「これってアルトリアと同じパターンかな？」
「同じ人物が二人いてもおかしいと思わなくなっている時点で、ね。カルデアで色々と毒されたよね」
「だよな。二人いようが三人いようが、同じ顔がたくさんいても割と普通と思っちゃうよ。アハハハ！」
「そうそう、だがらニックネームで区別しないと大変で……」
「わかる、わかる、本当に心労が絶えないよ」
ひとしきり二人が笑い終えた後、二人は真顔に戻った。

「それで、俺は何をすればいいんだ？」
「それは君が決めること、私が決めることじゃない。私ができることは、自分の至った答えと、その過程を教えることしかできない」
「自分の至った答え？」
「うん。選定された世界の私がサーヴァントへ託した思いのこと。それを含めて、君が答えを見つけてほしい。キャスターの計画を成功させてもいいし、アサシンに協力して阻止してもいい。私はあなたの答えを尊重するし、否定もしない。だって、やりたかったことがたくさんあったし、『すまない、あれは嘘だ』と言ってみたいしね」
「なんか思っていたキャラと違う……」
「ええ、あのカオスとシリアスのダブルパンチでボコボコにされればこうもなるさ……」
無駄に成熟した達観を思わせる顔をする女性は「ふッ」と笑みを浮かべて、
「最後に会話出来てうれしかったよ。じゃあ、あとは任せた。押し付けるようだけど、君の世界は君が守るんだよ」
景色が白くなる。同時に意識が消滅していき、脳内に走馬灯が流れていく。
それは彼女の冒険の物語だった。
世界を救ったというのに与えられた報酬はなく、自分を危険人物とされてもなお、生きる戦いをして、自分の思う正義を成し遂げ、そして消えていった普通の少女の物語。
中国の皇帝、無名の剣士、烈火の槍兵が傍らで彼女を支え続け、消滅する最後の時まで彼女の未来を憂い、最期を看取るまで寄り添った記録。ハチャメチャだけど決して面倒でもなく、楽しいと言える思い出のまどろみの中で、彼女は最後まで世界の守り手としてここにあった。
「――――ありがとう、楽しかった」
この一言が彼女の人生の集約だ。
――――ならば……
やるべきことは、決まった。

あとは指し示すだけだ。
彼女の意志ではなく、誰の意見を尊重するでもなく、自分だけが持つ思いを答えにする。
サーヴァントの叫びと肉を焼き切る魔弾が入り乱れる戦場のなかで、突如として祭壇が白く輝く。藤丸の体に魔力が収束しながら、彼は目を覚ました。天に浮いた女の藤丸の肉体の光は消え去り、男の藤丸は祭壇から降りて始皇帝の前に立った。
「どういうことだ……　早すぎる」
融合が進めば片方の藤丸だけが残るはずだというのに、二人の藤丸が残っている。儀式が途中で中断されたとしか思えないこの状況に始皇帝は狼狽しながらもあとこの藤丸に言った。
「何故だ、どうして儀式が止まった……」
「君のマスターが復活を望んでいないからだ。確かに彼女の人生は一般的に見れば壮絶で悲惨で絶望だらけで希望も人並みの幸せも味わうことができなかったかもしれない……　だけど分かる、彼女は最後まで幸せだった。悲惨で絶望だらけでも、彼女の世界は色彩に満ちていた。自分の願いを継いでくれる人がいたから、彼女はもう救われていたんだ、だからお前の救いはいらない！」
「だから何だというんだ。私は復活を望んでいる。それだけで、彼女は復活しなければならない。お前にはわかるはずだ！　戦争で人が何人死んでも人を悲しませないように笑顔を絶やすことなく、必死に歯を食いしばって死んだ屍の数だけの重荷を背負って、戦場を歩いて、行き着いた先は屍を積み重ねた荒野だった。お前には絶対にわからない。惨劇に慣れていき、徐々に心が強くなっていく、痛々しさが分かるものか！」
「わからないよ。俺は彼女の言葉を伝えただけ。でも俺ならこういうよ、もう終わりにしよう……」
藤丸は令呪を掲げた。
「させるか！」
始皇帝は空中から出現した鎖が藤丸を拘束し、腰から振りぬいた剣で藤丸を……

……やめなさい、始皇帝！
彼の頭に一瞬だけ、マスターの顔がよぎった。
「……ッ！」
この一瞬のためらいが藤丸に力を使う隙を作った。
令呪が赤い閃光を放ちながら励起する。令呪は不可能を可能にする魔力の塊でもあり、マスターの願ったあらゆる命令を可能にする唯一無二の力でもある。
藤丸は拘束されながらも腕に満身の力を込めて絶叫した。
――令呪をもって命じる、始皇帝を倒せ！
その瞬間、令呪から魔力が溢れながらサーヴァントたちに流れていく。
斎藤一、スカサハ、小太郎、巴御前は受け取った魔力を最大まで使って祭壇に再度突貫する。
始皇帝は「クッソ！」と剣を修めて、防御を固めながらも空中に描いた術式から魔弾を放つ。
スカサハは宙をかけるように魔弾を裂け、小太郎は分身に攻撃をひきつけ、巴はサーヴァントに命中する魔弾を撃ち落とし、始皇帝の祭壇に向かおうとするがことごとく弾幕に阻まれてしまう。いくら魔力があっても始皇帝の攻撃は強固だった。
ただ一人を除いて……
アサシンは佇んでいた。自分に降りかかる魔弾を無意識に弾き飛ばしながら、アサシンは祭壇を臨んでいた。
「そうか……　幸せだったんだな……」
――うん、幸せだよ。みんなの思い出はかけがえのない瞬間だったよ。
聞きなれた声が虚空から聞こえる。
「お前はいつも、そうだった。痛々しい笑顔で私に優しくしてくれた」
――そんなこともあったね……　でも、それもこれでおしまい。後は分かっているよね……
「ああ、大丈夫だ。やるべきことは分かってる」
さあ、行こう。決着をつけるために……

アサシンは日本刀を握りなおした。頬を伝わる雫を無視して虚空から聞こえた懐かしき声を振り払って死地に赴いた。
――行け、アサシンッ！　私の最後の令呪をあなたに託す。
アサシンは駆ける。令呪のバックアップを最大限利用して弾幕を潜り抜け、絨毯爆撃のなかを針の穴を通すような隙間を縫いながら、目にもとまらぬ速さで突進する。
防御は必要ない、令呪の力は全て機動力に還元する。
加速し、加速し、加速する。彼女は目に迷いはなかった。
「この加速……令呪か！」
始皇帝がアサシンに狙いを付けた。彼女の無謀は幾度となく見てきたが、なりふり構わない突撃は見たことがない。
「勝負だ、始皇帝！」
完全無差別の絨毯爆撃がアサシンの行く手を阻む。アサシンは致命傷だけを刀で弾き、瞬間移動と同義の縮地で翻弄する。しかしすべてを防げるわけではない。爆撃の波を潜り抜けるたびに、熱線は腕を裂け、ももを貫き、腹を焼き切るが彼女は止まらない。
しかし最後の魔力障壁がアサシンを迎え撃つ。
（――あれはスカサハの槍でも突破できない。しかし……！）
アサシンは血まみれの体で疾走しながら刀を構え、跳躍した。
「刹那にひと踏み……」
彼女の宝具はたった一つ。能力を向上させる『誠の羽衣』のみ。
「すべては瞬き……」
しかし彼女にはもう一つだけ特技がある。
それは斎藤一と呼ばれた、烈士が最も得意とした剣であり……
「これぞ、我が一歩の極限！」
――無敵の剣と呼ばれた逸話の具現！
「無間一刀突き！」
切先が魔力障壁を突いた。だが一撃の突き程度では魔力の壁はビクともしない。
――普通の突きであったならば……
「お前！　まさか！」

始皇帝は魔力を集めて壁を補強する。彼は知っている、彼女の一撃がどんなに強固な壁ですら破壊してきたことを。

【無間一刀突き】

斎藤一の無敵の剣という逸話でコーティングされた剣戟。あの沖田総司の無明三段突きの相互互換であり対となる奥義である。無明三段突きは同時に同じ場所に突きを内包させることで破壊をするが、この突きは『貫く』という概念を極限まで突き詰めた結果、その切っ先は『割り込む』という概念を取り込むことを可能とした。故にあらゆる物体に『剣が割り込む』ことでいかなる壁であろうとも貫通する、無敵の剣となるのだ。

「近寄ればこちらの勝ちだ！」

「甘く見るな！　たとえ魔剣の類と言えど、際限のない守りは突破できない！」

「それはどうかな！」

剣が壁に滑り込み、障壁の穴を広げていく。始皇帝は魔力をつぎ込み封鎖を試みるが、剣の浸蝕は防ぎきれない。

それもそうであろう、この剣を阻むために必要なものは『事象』ではなく『事象の強度』である。魔力でいくら防御を高くしようとも魔術の事象としての強度が高くなければ意味がない。ゲームで言うところのレベルが足りていないのだ。この剣の強度は彼女の剣撃もとい、彼女が剣に取り込んだ『割り込み』の概念の強度に依存する。『割り込み』の概念のレベルよりも攻撃対象のレベルが低ければいくらそれを魔力で強化したところで意味はない。いうなれば、一定のレベル以下の防御を完全無視する一撃。

これぞ、まさに魔剣。

無敵と言われた斎藤一が得た、いや、斎藤一の歴史の一片となった女性がその生涯で唯一到達した、可能性という世界に割り込んで、新たな可能性を切り開いた一つの答えだった。

「うおおおおおお！」

剣を押し込み、体を割れ目にうずめて始皇帝の守りを強引に抜ける。彼はすぐ目の前で驚愕の表情ながらも剣で心臓を庇っていた。

しかし突き出された剣は始皇帝ではなく、その横の空中を貫いて始皇帝を通り過ぎていった。アサシンの体も同様に始皇帝の直近を抜ける。

「――――え？」

アサシンが振りかぶった剣の先には藤丸と同化しようとしていた光体があった。

「切り捨て御免！」

刀を振り切った時、アサシンの手には確かな手ごたえがあった。生前から何度も何度も刀を通して残った余韻。生きた人間を切り裂いた時の生々しい血肉の感覚。

「すまない……　私はこうしなければならなかった。」

血が飛び散り、柔肌の頬を紅くする。人を切ったことは何度もある。殺した人の数を忘れるほどに、数えるのをやめてしまうほど多くの人を殺した。だが今回ばかりは……

――――泣いてしまった。

「大丈夫、わかってる」

「……ッ！」

光体が収束する。その中にあったのは人の影、袈裟懸けに致命傷を受けた普通の女の子だった。

「嫌な、役目を、押し付けたね……」

「嫌なものか……　これが役目だ。私たちの誓いだ」

――――次に全てを託す。そして藤丸の使命を助ける。

この誓いのために私は抑止力となった、藤丸立香の思いを遂げるために。

「私はお前を斬る。私の誓った思いは、こんな安直で独りよがりの生存の秘儀で揺らぐものじゃない」

「うん、はじめちゃんはいつもそうだよね。律儀で、世話好きで、おお節介焼きで、皮肉屋みたいにつんのめって……でもね、こういっちゃなんだけど、王様の行為はうれしかったんだ。私の頼み事よりも私の生存を優先してくれた。それだけ私を大切にしてくれたって。でも……　私は死ぬ。この世界と一緒に消える。それでいいんだ。次が、

あそこにあるんだから」
　女の子は藤丸を見つめた。もう意識は途切れ途切れで、消滅寸前で透明のガラスのようにもろい。同一人物が目が合ったという以上、存在の弱い者が消えるのは必定であり、女の子が望んだ結果だった。
「はじめちゃん……　楽しかった？」
「ああ、楽しかったよ」
　頬を伝う雫を拭って最後に彼女は、満面の笑みを向けた。
　消えていく、消えていく、消えていく、際限なく消える彼女の肉体を抱きながら最後に
「さようなら、マスター……　この眠りがいつか希望に変わらんことを……」
　どこかでガラスが割れる音がしたと同時に祭壇は急速にその力を失っていった。それに呼応するかのように施設内が光の粒となり消滅を始めた。
『いけない、この世界をつなぎとめていた楔が破壊されたんだ。この消えかかった平行世界は、今すぐ事象まるごと世界から分解される。今すぐ、この施設から逃げるんだ。そこは、いの一番に消滅してしまう。まだ安定しているところを使ってレイシフトするから、そこまで走るんだ！　早く！』
　ダ・ヴィンチちゃんの指示をもとに脱出を図ろうとする藤丸たちに対して、始皇帝は意気消沈のまま膝を屈して動かなかった。サーヴァントたちは何が起こったのかを目くばせで察しながら祭壇にいるマスターを抱えて施設からの脱出を図った。
「アサシン……　いや、斎藤一……　行かないのか？」
　ドームの出口で彼女の脚が止まり、振り向いた。だが、一瞥しただけで踵を返した。
「すまない、今行く……」
　さようなら、中華大陸最初の皇帝陛下。お前の思いは決して、間違ってなどいなかったよ。

ｆａｔｅ／ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ　完全臨界特区　高天ヶ原　最終章

「壊れてしまった」

崩壊する施設の中で始皇帝は打ちひしがれていた。

この世界は消えてなくなる。跡形もなく、この世にあった証拠もなければ、自分たちがいたという証明も無くなる。朕はその世に反旗を翻したかった。世界を変え、世界の終わりを回避した英雄的一般人が何の記録もなく消えるのは看過しがたい話であった。本人は報酬を求めてやったことではないが、記録も残らないというのは絶対に可笑しい。あれだけの犠牲を払って世界を救った意味もなくなってしまう。

もとはと言えば、聖杯を軍事的に利用しようとして世界中で軋轢を作りまくった連中がカルデアを潰すことで「安全保障」という名目で「対抗策」を完全につぶしたことが原因だというのに。そんな奴らのせいでこの世の善良な人たちが殺されたというのに。

「ああ、終わった。全部……」

結局は世界に宣戦布告したというのにこんなにもあっさり抑止力に負けた。私たちは一人を救うためにどんな犠牲も払うというのに、あの人の生存のためだけに全てを費やしたというのに……

「ダメだな」

諦めた。心が折れてしまった。

全てに意味を見いだせない。この世界にいる理由も、もうなくなってしまった。

「もう、終わってもよい」と受け入れようとしたとき。

――もう終わるんですか？

ふと声がした。

――アナタはもっと諦めの悪い人だったはずでは？

見上げた先にいたのは、想い人だった。

「ああ、そうだった。だがもう疲れた。あの時の喪失を二度も重ねて

あの時の思いをまた繰り返して……　あの瞬間に立ち尽くすことしかできなかった朕が求めた救いは、こうもあっさりと敗れ去ったのだ」

――うん、負けちゃったよね。でも、うれしかったよ。

「え？」

思ってもみない言葉だった。呪詛のような救いを求めたことを、別の世界の同一存在を壊してまでも一人を救おうとしたことを、彼女は責めなかった。それ以上に、ほほ笑んでくれた。

――ありがとう、皇帝陛下。私は、既に救われていたんだよ。あの世界で、最後に見えてくれたみんなの笑顔でね。

「どうして、そんなものが救いになる？　死屍累々の世界で強くたくましくなっていたお前たちが見せた、あの痛々しい笑顔で何が報われたというんだ」

皇帝は分からなかった。聖杯の流出を止めようとして生まれた、人が否応なく命を散らす血みどろの紛争地帯の中を歩んだ時に見せた「大丈夫」という顔と、戦いでボロボロになった君が死ぬときに見せた仲間の「平気だよ」という笑顔にどんな違いがあるというのだ。

どれにも「悲しみ」しかない。笑顔の意味は違っても根底にあるのは「不の感情」だ。

「不の感情で救われていいわけがない。本当にあったのは希望や喜びかもしれないが、根底にあったのは不の感情だ。私はあの時に誓ったのだ。あんな痛々しい笑顔でマスターを終わらせないと……　答えてくれ、あれで、あのような結末で何が救われたというんだ！」

――確かに最後は「終わり」ということしかなかったと思うけど、記録はなくても、想いは残った。私たちは全てを尽くして最後に得たのは「あの時、私たちがいた」という「事実」だけだよ。

「それだけでいいのか？」

――命はね、有限だけど。樹の幹のように広がり続けるもの。そこに終わりはない。その終わりには必ず果実があって、それがまた新しい希望になっていく。なにも得られるものがなかった人生でも、どこか必ず救われた人たちがいるんだ。「事実」という「意味」が残れば

すべては無駄じゃない。私たちの世界は消えたけど、それがもしかしたら次につながる何かになるんだ。
「――――なんだ。なんで、こんなにきれいな笑顔をしているんだ。これじゃあ、無いも言えないじゃないか……」
――もちろん、なにも言えないようにした。
「まったく、君はいつもそうだ。皇帝だというのにズケズケと関わって、言いたいことははっきりモノ申して、朕らを振り回してぐちゃぐちゃにして……」
だが、確かにそれだけでも……　記録に残らなくても「事実」はあった。形には無くても、そこに確かにあった物たちがいた。あそこに世界は確かにあったのだ。
「つまらない。真につまらない。だが、まあ、朕が覚えておればいいだけか……」
座に戻れば忘れてしまうかもしれない。だがそれでも朕は覚えて居よう。心の奥深くにこの思いを、この軌跡を。
「ああ、良かった。私が求めたものは……　すでにあったんだ」
声がなくなった空間はそのまま無音にして消滅した。
しかし、その光は妙に明るく、輝いていた。

「ここでお別れだな？」
施設の外、今も安定して原形をとどめた地点でアサシンはひと時のマスターに言った。
「はじめ……　あれで救われたのか？」
藤丸は結末を知っていた。あの世界で起きたすべての結末を、あの世界の藤丸との融合の際に断片的にでも垣間見ていた。だからこそ、気になった。世界が終わるような、一つの世界が消えても、彼女は何をもってそれに終止符を打とうとしたのかを……
「お前は、何かにつけて救いを求める奴なのか？」
「え？」
「私には救いは必要ない。私は既に知っているからな。この世にいる誰もが救いを必要としているわけじゃない。救われなくても報われ

なくても、それでもいいと言いながら生きて人生を歩くようなやつだっているんだ。救いを求めることは決して悪くはないが、それにこだわるのは良くない傾向だ。私は救われようが救われまいが関係ない。もともと生前からして救いを求めたわけでもないからな」
「本当に？」
「ああ。私はこの世を変えたかった。それは既に私が行動した時にはもう叶っていた。それがより良い世界だったらよかったが、案の定私たちは敗者だった。だが日本という国は最後まで続いた。それだけでいいんだ。私に救いはいらない。私は報酬を求めたわけでも希望を求めたわけでもない。変革だけが私の原動力だ」
「でも悲しい出来事はあったんじゃないか？」
「一応割り切っていた。今ももう割り切った。めそめそできるほど私の精神は善良ではない。だがもしお前たちがいなくなったとしたら、私は泣き崩れて絶叫するつもりだ」
「お、おう……」
「おかしいか？　すまんな、生前からずっとこうだったから、染みついている。もっと人間的なようにしてほしいのであれば努力する」
「……それって……」
「召喚に応じるということだ。それがこの記憶を有した私なのかと言えばわからないが、その努力はしよう。あとあのバカには最後まで希望が必要だ。一応、そのための触媒も用意した方がいいな。だから、これと一緒に持って行け」
　というと、アサシンは藤丸にランサーから得た短刀を渡しながら、受け取った彼の手を引きながら顔に触れて、
　――その頬にキスをした。
「う、うわ！　どういうこと！」
「生憎、お前は私をモードレットのような女扱いを嫌っている女性と思っているだろうが、私はそんな馬鹿ではない。『自分の意志で女になる』ことに嫌悪はない。それにだ。私は女である自覚もしている。モードレットのような歪でとっつきにくい人格はしていない。　――さあ、これで行くといい。お前は夢から覚めて自由になるだろ

う。もし会えたのなら、そちらの世界で」
これを最後にアサシン、斎藤一は姿を消した。
このあと、彼女がどうしたのかは定かではない。泣いたかもしれないし、泣かぬまま帰還したかもしれない。想像の余地を出ないが、藤丸が見た彼女顔は確かに緩んでいた。
この物語はこれでおしまい。
世界の理不尽から世界をつなぎとめて、主人の復活を願ったサーヴァントと主人の思いを胸に戦いに挑んだものとの悪意のないぶつかり合い。これで全てが終わった。
だが、終わりは始まりのための前座でしかない。
命は幹のように成長を続ける。
それを救いとするか、呪いとするかは人それぞれだ。
さあ、見るといい。
世界は君がいるから輝いている。